

タルマリンチェン『六十頌如理論疏』 の和訳研究

カンカル・ツルティム・ケサン（白館戒雲）
佐 藤 弘 幸

解題

本書『六十頌如理論疏』(Toh. 5443, Ca Klal-33a6; H1a1-36a4) は、ギエルツァプジエ・タルマリンチェン (rgyal tshab rje dar ma rin chen, 1364-1432) により執筆されたナーガールジュナ (Nāgārjuna, ca. 150-ca. 250) 『六十頌如理論』(*Yuktisaṣṭhikākārikānāma*, Toh. 3825) の注釈書である。

本書は主としてチャンドラキールティ (Candrakīrti, ca. 600-650) による『六十頌如理論註』(*Yuktisaṣṭhikākārikāvṛtti*, Toh. 3864) に基づくものではあるが、チベットの論師の説について論評する (K2a5・H2a4 以下、K28b4・H31a5 以下) など、独自の見識も示される。全体としては、もちろん師ツォンカパ・ロサンタクペーペル (tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal, 1357-1419) の学説に則り註釈している。

タルマリンチェンには本書の他に『六十頌如理論覓書』(*rigs pa drug cu pa'i zin bris*, Toh. 5444, Ca Klal-11b6; H1a1-11b5=Toh. 5403, Ba Klal-13a3; H1a1-12a2) もあり、これはツォンカパの講義をタルマリンチェンが筆記したものである。

凡例

- 一、訳文はなるべく原文に忠実に、逐語訳を試みた。
- 一、D はデルゲ版、K はタシルンポ版、H はラサ版を示す。
- 一、底本はタシルンポ版とラサ版を校合して定めた。
- 一、チベット語原文、および対応する訳文中にタシルンポ版 (K) とラサ版 (H) のフォリオ番号とその表 (a)・裏 (b) を挿入した。
- 一、訳文に対する注記についても簡潔に止めた。本格的な拡充は後日を期したい。
- 一、チベット語原文中、欠落していると思われる字、句読点等は () で補った。誤字と思われるものには、その直後に [] で正しいと思われる字句を示したものがある。ただし、『六十頌如理論』の標題部分は訳者による補遺である。なお { } は、tsheg を nyis shad で置き換えたことを示す。
- 一、訳文中の < > はひとかたまりで意味をなす語が地の文に埋没するのを防ぐため、[] は語句の補いを示すために用いた。また、() は語句の言い換えを表し、その中でも特に (=) は意味を説明するようなものに対し用いた。
- 一、訳註に、『六十頌如理論』(Toh. 3825) と『六十頌如理論註』(Toh. 3864) に収録された偈頌のデルゲ版の箇所、および後者については瓜生津訳のページ数を記した。
- 一、両原典の偈頌が本文中のものと異なっているときは、訳註の前掲箇所に異文を示した。その際、一部の偈頌のみが異なる場合はその詩句を表す記号を付して明記した。
- 一、訳註に『六十頌如理論』偈頌のサンスクリット文を示したが、一部、サンスクリット原文が回収できているものについては、括弧無しで Lindner および李・叶より引用し、回収できていないものについては、*[]に入れて Kumar (ただし第五十偈 cd だけは李・叶) により還梵・再建されたものを示した。後者については李・叶を参考にするなどして一部、語句を修正した。
- 一、「引用書目」は、本文中に直接引用されているもの（書名を明示しないなくても）に限り、並行文が見出されるものなどは含んでいない。

Toh.5443, Ca ଅଜି ସିଶାର'ହୁଣ'ନୁ'ହରି'ଦ୍ଵୀପ'ଏକୁଷାର'ଶୀ'।

କ୍ରିସ୍ତାନ୍ମାଧୁ ପ୍ରିୟମ୍ଭାଗୀରେ ଗୁରୁତ୍ୱ ଶନାନାଦୁ କେଷାଦ୍ୱାରା ପ୍ରଦତ୍ତାଦ୍ୱାରା ବିଶ୍ଵାସ
ଏ ଦେହମଧ୍ୟାବଳ୍ଲକୁ ପ୍ରଦତ୍ତାଦ୍ୱାରା ଜ୍ଞାନକାର୍ଯ୍ୟ ॥

150 H 50

2

3

⁴ ਪ੍ਰਿਕਾਰ H ਪ੍ਰਿਕ

Toh. 5443, Ca 六十頌如理論の疏がございます。

la1 法界、〔すなわち〕全ての戲論が寂滅している虛空に
 その方の御悲という〔日〕輪が現れたことによって、
 我が意の信という芽が拡がることとなつた
 手という Hla2 蓮華を頭頂で閉じ合わせさせるところの、その方(=釈迦牟尼)に Kla2 敬
 礼する。

その方を刹那、意に憶念した程度で、
 常・断の辺見という山を破壊し、
 無上最上乗の道に導くところの

依怙主ナガールジュナ足下 Hla3 に帰命するのである。

牟尼主 Kla3 が涅槃することとなつて以降、

その教説が濁すこととなつたときに、

縁生、それこそを教示する唯一の士、

チャンドラ〔キールティ〕足下にも Hla4 諂誑無く頂礼する。

その意趣義を過たずに明瞭に教示する

Kla4 最上の上師(=ツォンカパ)に恭敬をもつて敬礼をなして、

正理の自在者たる者(=ナガールジュナ)が著作なさつた

Hla5 『六十頌如理論』を弁別する。

そのうち、ここでは偉大な本性の者・聖者ナガールジュナが著作なさつた『六十頌
 K2a1 如理論』が、説明すべきところの法である。

それも、総じては、御教え一 Hla6 切の究竟の意趣は大中觀の義を有すると教示せんが
 ために、限定しては、声聞部派という、生 K2a2 滅が自性によって成立していると主張する
 者らの誤った分別を否定せんが H2a1 ために、彼らにも周知の声聞藏の聖教の義を正理
 によって決択するものなのである。

これに、(1)著 K2a3 述に先行する帰敬頌と、(2)著述 H2a2 されるべき典籍そのもの、(3)
 著述したことの善の廻向である。

[インド語で、ユクティシヤシタカ・カーリカ・ナーマ
 yuktisāsthikākārikānāma、チベット語で、リクパ・トゥクチュペー・ツイクレウル
 チェーペ・シェーチャワ(六十頌如理論)。文殊師利童真に帰命するのである。]

(1)第一(著述に先行する帰敬頌)について、(1・1)必要・目的の意義、(1・2)撰義、(1・3)
 句義の三つによって説明するものが、

ସାର୍ବଶୀଳକୁଦ୍ଦାତ୍ମିଶାପା⁵ କୂରନ୍ଦା ।
କୁର୍ଯ୍ୟଦର୍ଦ୍ଧପିଣ୍ଡକୁଷତ୍ରାପା⁶ ଗୁର୍ବଶା ।
କୈରାତ୍ରିଦ୍ଵାରାତ୍ରାପାଶ୍ରମଦ୍ଵାପା⁷ ପିଣ୍ଡ
ଶ୍ରୀନାରାଦ୍ଦାପାତ୍ରାପା⁸ କର୍କଶାର୍ମ୍ୟ ॥ (0)

5

6 藝文正學

蒙古文

H inserts j.

९ श्री H श्री
विजय प्रतिष्ठान

生・滅の _{K2a4}両者がおよそ
この理趣、それによって捨断されることとなつた
縁 _{H2a3}生をお説きになつた
牟尼主、その方に帰命するのである。(0)¹

といふものである。

そのうち、(1・1)(第一)必要・目的〔の意義〕は、自分自身が勝れた高貴な方の行と一致している、と教示せんがため、また _{K2a5}論書を著述する所作を究竟 _{H2a4}させんがためになのである。

パツアプ〔・ニマタク〕御口づから、

聖者御父子は帰敬頌について必要・目的を御主張なさっていなくて、すなわち或る必要・目的を所縁としてから、それを知覚の対境とし _{K2b1}で帰敬頌を著作する者なのではないのである。

それ _{H2a5}ならどうかというなら、殊勝な対境に対して強力な信を生じさせてから、信が逆る帰命をなさつた者なのであって、たとえば信を具えた或る者は、必要・目的について尋伺をなさずに帰依が突発して生起する _{H2a6}様に。

との御發言 _{K2a2}だ。

ツアンバ・サルブーは云う、

〔聖者御父子は〕そのように必要・目的を御主張なさっていなくて、御主張なさっているのなら、(宗)聖者御父子を有法として、勝れたブドガラではないことに帰謬する。(因)必要・目的の応報への希望を伴つてゐるから。_{H2b1}(喻)たとえば商人の様に。

と〔そのように〕三輪を承認して、かつ主張命題(聖者御父子が必要・目的を主張なさること)を教証と _{K2a3}極成によって除去した帰謬を提示する。またマチャ・チャン・イエーは云う、

(宗)そのように必要・目的を御主張なさっていなくて、(因)というのも〔聖者御父子は、十〕地に住する離食の位な _{H2a2}での取捨の所縁一切を克服していく、必要・目的を算定し得ることは無いから。

と〔そのように〕他者に極成した証 _{K2b1}因を提示するが、シャン・タン・サクバも『六十頌如理論疏』に、それらと一致して提示しているけれど妥当のではなく _{H2a3}で、そのうちまず、(宗)第一の立場は道理でなくて、(因)というのも、解脱を追求する作り物でない知覚を生じるブドガラは、必要・目的に観待しないことになる _{K2b5}が、信が生じてから法を為すから。『宝鬘』に「信を有するから法に縁る。」²と _{H2a4}お説きになつてゐるのである。

ଶାନ୍ତିରୀଧାରମିରେଷାଟୁ ଦ୍ୱାରା ପ୍ରାଣକୁଟିଲାଗୁଣ୍ୟାଗବ୍ରାହ୍ମିକାରୀରୁ ଦ୍ୱାରା ପ୍ରକାଶିତ ଏକ ଶାନ୍ତିରୀଧାରମିରେଷାଟୁ ଦ୍ୱାରା ପ୍ରାଣକୁଟିଲାଗୁଣ୍ୟାଗବ୍ରାହ୍ମିକାରୀରୁ ଦ୍ୱାରା ପ୍ରକାଶିତ ଏକ

ସମ୍ବନ୍ଧରେ କାହିଁଏବୁ କାହିଁଏବୁ କାହିଁଏବୁ କାହିଁଏବୁ

କେଣାର୍ଦ୍ରପଦିନଶର୍ମା | କେନାର୍ଦ୍ରପଦିନଶର୍ମା H3al ସାତିଶାଶ୍ଵରୀ |

ସାହେବ ହେବ ମହିନ୍ଦରଶାଖାମାର ସ୍କ୍ରାପ୍ରକାଶନକୁ ପାରାଣ୍ଟିଏ ହେବ ମହିନ୍ଦରଶାଖାମାର କ୍ଷମାଦରକାରୀ

ସ୍ଵାଧ୍ୟାନରେ ଦେଖିଲୁଛି କି କେବଳ ଏକ ପାତା ଅତିରିକ୍ତ କାହାରେ ଥିଲା ନାହିଁ ।

དྲ་ସ୍ଵ-ଶ୍ଵର୍ଣ୍ଣା_{Hs}ନ୍ଦାନ୍ତକୁ ପ୍ରସାଦା ହେତୁ ପର୍ବତୀ ପାଶେ ଦେଖିଯାପାରେ ଏହାମ୍ଭାଗୀ
ପର୍ବତୀ ପାଶା ଥର୍ମ କୁର୍ରା ପରିଚିତ ଏହାରୀଙ୍ଗାମୀ ପ୍ରସାଦରେ ଥିଲା ଏବଂ କୁର୍ରା ପର୍ବତୀ ପାଶା ହେତୁ ପର୍ବତୀ ପାଶା
ହେତୁ ପାଶା ଥର୍ମ କୁର୍ରା ପରିଚିତ ଏହାରୀଙ୍ଗାମୀ ପ୍ରସାଦରେ ଥିଲା ॥

དྲାଙ୍କି ଶ୍ରୀଧରକୁ ଦେଖିବାରେ ପାଞ୍ଚମିତିନାଟିକା ହେଉଥାଏନ୍ତିରୁ ।¹⁴ ଏହି ପ୍ରଦୟନ୍ତରେ ସହିତାରେ ଦିନାନାଟିକା ହେଉଥାଏନ୍ତିରୁ ।

ସାମାଜିକ ପରିବହନ କାର୍ଯ୍ୟରେ ଦେଖିଲୁଛି ।

ସମ୍ବର୍ତ୍ତି ପୁନଃ ଦୟା ଫିର୍ଦ୍ଦୁ ଶାନ୍ତି^{K3b2} ସମ୍ବର୍ତ୍ତି ।

10 *Journal of V*

— 2 —

12

13 ၂၄၁၁ K ၂၄၁၁

ସମ୍ବନ୍ଧ ପରିଚୟ

(宗) 第二も道理でなくて、(因) というのも勝れた者は如何なる所作を為しても利他に入っている、と見えるから。(宗) 第三も道理でなくて、(因) というのも、「等引で克服するから」と云うなら _{K2b6} 遍充が不定〔だから〕だし、後得での克服は _{H2b5} 〔遍充が〕不成であって、取るべきを取っているし、捨てるべきを捨てているから。それゆえに、(宗) 聖者御父子を有法として、了解を具えていないことに帰謬する。(因) 必要・目的が無い所作に入っているから。(喻) 痴愚なるブドガラの様に。

[これらの] 帰謬の承認と除去の _{K3a1} 教示の _{H2b6} 様態は後で説くので、[ここでこれ以上は] 戯論しないのである。

(1・2) (第二) 摂義は、(1・2・1) 称賛・帰命の二つは、称賛に縁生をお説きになることと、(1・2・2) 生滅を捨断することと、(1・2・3) それの、理趣どおりの諸捨断による教示である。

(1・3) (第三) 句義に、(1・3・1) そのものと、(1・3・2) 論難の捨断の _{H3a1} 二つである。

_{K3a2} (1・3・1) 第一(そのもの)のうち、〔帰敬偈〕後半の句義は帰命〔すること〕である。

誰に對してか〔という〕なら、ただ縁生をお説きになったということだけで牟尼主と建てる、すなわち縁生をお説きになった牟尼主、その方に、である。

(宗) 牟尼主だけでも、縁生をお説きになることの _{H3a2} 能立因なのであって、(因) というのも、他者には能力が無いから。_{K3a3} 声聞と独覚と菩薩も、牟尼主による教示だけから了解可能なのだが、自力では無能だからである。

「そのとおりなら、牟尼 _{H3a3} 主と証成するのは、縁生をお説きになることが決定していることに觀待し、それ(=縁起をお説きになることが決定していること)も牟尼主と _{K3a4} 決定していることに觀待するので、相互に觀待するから、両者とも証成しないのである。」というなら、相互に觀待するので性により証成しないことは認めるが、《一般に証成しない _{H3a4} ことに帰謬する》〔という〕ならば、遍充が無いのである。

「他の功徳により称賛せずに、ただ縁生をお説きになることだけにより _{K3a5} 称賛するには、どうしてか。」というなら、[1] 称賛者の自性と、[2] 称賛の行相と、[3] 称賛の因である。

[1] 第一(称賛者の自性)は、軌範師自身は、眞実を了解する _{H3a5} ことにより殊勝な歡喜〔地〕を獲得した者であり、かつ縁起を了解することこそが一切の功徳の源だと _{K3a6} 御覽になる者である。

[2] 第二(称賛の行相)は、所論である縁生は、自性により生じないので辯見の垢一切を離れていること、それを教示する _{H3a6} 者となったことにより功徳の自在主となったことである。

[3] 第三(称賛の因)は、軌範師が縁生を説こうとお思いになったことと、それ(=縁起)が教示 _{K3b1} 者である如来に対する恭敬を生じさせるものであることである。

〔帰敬偈〕後半の句義は、縁起生するものが _{H3b1} 自相により生・滅することをこの理趣によって捨断することとなった牟尼主、その方への帰命である。

牟尼(能仁)とは、身語意、三つに _{K3b2} 能忍であることである。

དྲୟାନାତ୍ମକାରୀଦିନୀ ଦ୍ୱାରା କେବଳ ସାହିତ୍ୟରେ ଅନୁଭବ କରିବାରେ ପରିବର୍ତ୍ତନ ହେଲା
ଏବଂ ଶରୀରରେ ପରିବର୍ତ୍ତନ ହେଲା ।

କୁର୍ଯ୍ୟାଦିନାତେବୀପାଦାପରମାର୍ଥ୍ୟାପିଣ୍ଡିତ୍ବୀ । କୁର୍ଯ୍ୟାଦିନାତେବୀପାଦାପରମାର୍ଥ୍ୟାପିଣ୍ଡିତ୍ବୀ ।

୧୦ ଦୂରିତ୍ୟାନ୍ତରେ ସମ୍ପର୍କ ହେଲା ଯାଏ ଏବଂ ଏହି ଜ୍ଞାନ କୁଣ୍ଡଳୀଶ୍ଵରଙ୍କାରୀ ଏବଂ ଶର୍ମିଶ୍ଵରଙ୍କାରୀ ଏବଂ ଶର୍ମିଶ୍ଵରଙ୍କାରୀ ଏବଂ ଶର୍ମିଶ୍ଵରଙ୍କାରୀ ଏବଂ ଶର୍ମିଶ୍ଵରଙ୍କାରୀ

ହେଉଥିବା କ୍ଷେତ୍ରରେ ପାଶ୍ଚାତ୍ୟକାଳୀନ ପିତ୍ତୁ ମାତ୍ରାଙ୍କିତ ଦେଖାଯାଇଛି ।

ସାର୍ଵଶିଳ୍ପିନୀଙ୍କ କୁର୍ଯ୍ୟଙ୍କ ସମ୍ପଦରେ ଏହାର ପରିଚୟ ଦେଖିଲୁଛାମୁଁ

ମୁଣ୍ଡାରୀରେ କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା

ୟତ୍କୁ ପହଞ୍ଚିଯାଇଲା

ସାମୁଦ୍ରାଷ୍ଟିକାଶିନ୍ତିକ୍ଷେପଣିକ୍ଷେତ୍ରରେ ଲୋକଙ୍କ ଜୀବନକୁ ଉପରେ ଆଶିନ୍ତା ହେଉଥିଲା

ଯନ୍ତ୍ରାଣିକୀଳିତ ପରିବହନ ପାଇଁ ଏହାର ଉପରେ ଆମେ କିମ୍ବା କିମ୍ବା ହାତରେ ଦେଖିଲାମି

କ୍ଷେତ୍ରପଦ୍ମପିତା ।

କୁ-ଶ୍ଵର-ଷଷ୍ଠୀ-ଶ'ପ'ଦ୍ୟ-ଦ୍ୟୁମ୍ନ-ଶ'ପ'କୁ-ଷ୍ଟତ୍-ତେ-ଗ' ରେଖ'ପ'ଦ୍ୟ-ଦ୍ୟୁମ୍ନ-ଶ'ପ'କୁ-ଷ୍ଟତ୍-ତେ-ଗ'

ଯଦ୍ବନ୍ଧମାତ୍ରେ କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା

କୁର୍ମାଦ୍ୱିପିଶାଙ୍କନାଦଶୁଣାଦଶ

ସାରିବାନ୍ତିକ୍ଷଣଦ୍ୱାରା ପରିଚୟ କରିବାକୁ ପାଇଲା ।

אָמַרְתִּי לְפָנֶיךָ יְהוָה אֱלֹהֵינוּ וְאֶת-בְּנֵינוּ תִּשְׁמַח.

କୁଣ୍ଡଳୀ ପାତାର ଦୟାରୀ ପାତାର ଶନିର ଦୟାରୀ ପାତାର କାହାରେ ଦୟାରୀ ଦୟାରୀ ଦୟାରୀ

力に自在なことと力が大きいことの二つで、二資糧を積集したことと、声聞_{K3b2}などへの權能を訳したからである。

「この理趣によつて」ということについての説き方が四つで、因果が相互に觀待することと、前者に縁つて後者が順次、生起_{K3b3}することと、眞実を了解する様態の次第と、説くこととなろう正理_{K3b3}という理趣である。

それに応じて、「およそそれ(生滅を捨断するところのもの)によつて」についても四つで、〔証〕因「およそそれによつて」と、〔縁生〕お説きになる者「およそそれによつて」と、牟尼主と建てる因「およそそれによつて」と、妥当性「およそそれによつて」というのである。

縁生を_{K3b4}お説きになるから牟尼主なのであることに尽きずに、諸_{K3b4}事物が自性によって生・滅することを否定したが故に〔という理由によつて〕も牟尼主である。

何によって捨断したのか、〔というの〕なら、因果が相互に觀待するといつてこの理趣によつてである。

果を果と建てるのは、因が生じさせることに〔觀待するから〕、また因を_{K3b5}因と建てるのも、果が_{K3b5}生じることに觀待するからである。

さらに〔いうなら〕、生・滅の両者が捨断されたのである。

「お説きになる者、およそそれによつて」というときの理趣はどのようになるか〔というの〕なら、前者に縁つて後者が生起するといつてこの理趣によつてである。

さらに、「如何なる〔証〕因によつて捨断したのか」〔というの〕なら、「生が知られるので消滅が知られる」という_{K3b6}了解の_{K3b6}様態、あるいは教示の様態の次第といつてこの理趣によつてである。

「そのように教示することに何の必要・目的が有るのか」というなら、この次第で所化に利益を付与すべきだからである。

さらに、軌範師自身が後から説くことになろう教典にお説きになつ_{H4a1}た_{K4a1}正理といつてこの理趣によつて捨断されることとなつたということである。

(1・3・2) 第二・論難の捨断、「空性七十論」と『廻諍論』に称賛頌を作りなさらずに、これ(=『六十頌如理論』)に作りなさったのは何でか? というなら、『根本般若(=中論)』とこれは始め_{H4a2}からどの程度か縁起に_{K4a2}関して決択する独立の論書なので帰敬頌を作りなさつたが、〔空性七十論〕と『廻諍論』の二つは、『根本〔般若〕』の派生した義程度〔のもの〕なのだが、別途に独立した所詮は無いので作りなさらなかつた_{H4a3}のである。

何について派生したのかは、『註』のとおりである。

(2) 第_{K4a3}二・著述されるべき典籍そのものに、(2・1)縁起は離辺だと教示することと、(2・2)蘊などとしてお説きになつたものは末了義だと論証することと、(2・3)蘊と思念する誤失と、(2・4)解脱の功_{H4a1}徳である。

(2・1) 第一(縁起は離辺だと教示すること)に、(2・1・1)有辺の否定、(2・1・2)二辺の能_{K4a1}証の否定、(2・1・3)二辺の体の否定である。

16 K

17

18 קָרְבָּן

मुक्ति H अनुवाद

२० वृक्ष H यज्ञ

ସମ୍ବନ୍ଧ

K omits].

۱۳

(2・1・1)第一(有辯の否定)に、(2・1・1・1)縁生は離戯論だと何によって了解されるのかということと、(2・1・1・2)有辯を否定する正理である。

(2・1・1・1)第一(縁生は離戯論だと何によって了解されるのかということ)に、(2・1・1・1・1)そのものと、_{Hab5}(2・1・1・1・2)甚深を教示するものだ、と教説することである。

(2・1・1・1・1)第一(そのもの)、「『子を生まなかつた、その者が子を生んだのである。』と_{Kab5}いう言葉の義に相反があるように、生滅が無いことも縁起という言葉の義に相反するのである。」というなら、凡夫の慧に観待して相反すると分別するのならば、〔そのように〕了解_{Hab6}せよ。

(宗)私〔、ナーガールジュナ〕には過誤が無くて、(因)というのも凡夫らは縁起という名だけから、自性を伴う_{Kab6}ものと執念するから。

聖者の御覽になったものに観待しては、縁生は無自性だと大変明瞭に通_{Hab1}曉可能であると教示するために、

その慧が有無を

超越していく、住していない者ら、

彼らは、縁の義は

甚深で_{Kab1}無所縁だと了解する。(1)³

とお説きになったのである。

詩句の二つと半分によって能了解を、_{Hab2}また一つと半分によって所了解を教示したのである。

前者については、「今世において空性を数習する偉大さが無くても、過去の前生において数習する力を具えた**その慧**の者らである_{Kab2}聖者シャーリップトラなど、**彼らは了解して、_{Hab3}智により現見に証する**」という義である。

業と煩惱を因として伴う作用因を具えた世間が流転することと同じように、また

業と煩惱の還滅の因、それをも_{Kab3}導師はお説きになった。

そこには生・老・衰の苦_{Hab4}が定めて住していない、

解脱の最上なるもの、それを、論者のなかの牛王、彼は自ら御存知になってお説きになった。⁴

という偈頌を、聖者シャーリップトラは聖者アシュヴァジットより聴聞した程度で、_{Kab4}眞実に通曉したとお説きになつ_{Hab5}たから。

どのような慧か、というなら、**有と無**の二辯だと見ることを**超越していく**、その二つ以外の中は無だから、それにも貪著により**住していない**ものである。

何を**了解する**のか、[という]なら、**縁**、[すなわち]縁起_{Kab5}生の義をである。

དྲྱྟକୁଣ୍ଡଳାରୀଶ୍ଵରାମାଦ୍ୱାରା ପ୍ରେସ୍‌ରେ ପ୍ରକାଶିତ ହୈଥାନିବାରେ ଏହାର ପରିଚୟ ଓ ଅଧିକାରୀଙ୍କ ବିବରଣୀ ଦେଖାଯାଇଛି ।

Hsal-'dbyig-sha' K4b6
‘^३କୁନ୍ତାଦୟିଗଣା’^୪ ଶୁଣୁ ପେଦାଦୟା

ଯଦ୍ବକ୍ଷେତ୍ରସ୍ମୀ ହକ୍କାଦ୍ଵାରା ହିନ୍ଦୁଶାସନାବେଳେ ଅନ୍ତର୍ଗତ

ପେନ୍-ଏରି ଶୁଣ୍ଗାନ୍ତକୁ ପାଇଲାବେ । ଏକବୀଧାର୍ତ୍ତକୁ ଶୁଣ୍ଗାନ୍ତକୁ ପାଇଲାବେ ।
କୃଷ୍ଣଙ୍କୁ ପେନ୍-ଏରି ଶୁଣ୍ଗାନ୍ତକୁ ପାଇଲାବେ ।

ଶ୍ରୀପାତ୍ରକଣ୍ଠାଣି ଦୂରାଧ୍ୟାନ୍ତିର୍ମିଳିତାରେ କାହାରୁଷାର୍ଥମ୍ଭାବୀ ହେଉଥାଏକବୀ ଦେଖିବାରେ କାହାରୁଷାର୍ଥମ୍ଭାବୀ ହେଉଥାଏକବୀ କହନ୍ତିରୁଣ୍ଡିଲୁଗିଲାମାର୍କାର୍ତ୍ତମାନୀ ।

শুভ মঙ্গল পুরুষের সৈকান্তিক পুরুষ এবং পুরুষ পুরুষের পুরুষ।

শ্ৰীমতী প্ৰিয়ানা শুভ্রানুষ্ঠানৰ পৰি হৃষে প্ৰদৰ্শন কৰিব।

西藏藏文新文正字对照表

24 Homits '55.

25 श्री. H. शिवा

26

୨୮ ପାତ୍ର
ସଂକ୍ଷିପ୍ତ

それも凡夫らを恐怖させるから、また彼らが底辺を量ることが不可能だから基深で、自性不生性であるがゆえに、有・無・中を十全に觀察する不顛倒の慧の対境として _{H5a1} 所縁とするのが _{K4b6} 不可能なので、無所縁なのである。

或いは縁の義に「そのようだと了解する」というものを結び付けるのである。

そのうちここで、聖者の等引に慧が有るか無いかを伺察すべきだが、慧を承認してから「それも顯現 _{H5a2} を伴うものである。」と論じる者ら、彼らは中觀の立場の香りほど _{K5a1} も顯現していない者なので、論駁の対象ほどにも適さないから〔論駁に〕努力をなさないのである。

[慧が] 無いという立場を伺察すべきで、「真相が現前になったときに、水に水を _{H5a3} 置き、またバターにバターを置くかの様に、区分し得ることは無いので、慧が法界 _{K5a2} となったということである。」というなら、そのとおりなら、(宗)法界も慧となるのであって、(因)というのも理由が相同だからである。

加行道〔世〕第一法の時に慧が有る者、彼には後に不生である程度のことだと _{H5a4} 承認するなら、それは無否定である程度のものなのだが、法界を見るという義としては適さないのである。

後に _{K5a3} 不生だし、前に同一だと主張するとしても、(宗)勝義諦にならなくて、(因)というのも同一の事物は因が尽きた縁より生じたから。

_{H5a5} 「慧は前から有るが、領納されないそのようなものへの伺察が働くないのである。」というなら、そのとおりなら、異生にも慧が無いので、聖者だけを _{K5a4} 例外とする必要性は無いのである。

異生に二顯現の慧が有るなら、聖者の等引 _{H5a6} にも二顯現を離れた慧を何故に建てないのか。

(宗)慧である程度のものを二顯現が遍充することは如何にしても論証不可能であって、(因)というのも無関係だからである。

_{K5a5} (宗)そのようではないのなら、〈等引に二顯現が有る〉という言説が正理になるのであって、(因)というのも慧という _{H5b1} 言説が結び付くからである。

「『悲心と無二慧と』⁵ という所とここでもそのようにお説きになったから、慧が有るなら対境も承認する必要があるので、境・_{K5a6} 有境の戯論が寂滅していないことになるのである。」というなら、等引によって御覽 _{H5a2} になるという意味は、対境と有境のいずれも無いことだから、戯論が寂滅していないことにどうしてなろうか、すなわちその程度で境・有境が滅することは道理でなくて、眼知の側に音声が無いので、音声が無いと _{K5b1} 証成しないということと同様だ。等引と勝義 _{H5a3} 諦は境・有境でかつ所了解と能了解だと軌範師御父子はお説きになったし、そのように言説の量によって量られるから。

କୁ'ନା'କୁ'ନେ'ଅବର'ଦ୍ୟ'ହୃଦ'ଦ୍ୟ'କ'ଶତ'ରମ୍ଭ'ପେ'ଶ'ଯୁ'ଦ'ି'ନ'ି'ର'କ'ଳ'କ'ଶ'ହେ'ଶ'ଦର୍ଶନ'ନ'ି' । ଏକକ'ଦେଖ'କ'ଶ'ଦ'ା'ଗୁଣ'ଚ'ନ୍ଦ'ରମ୍ଭ'ପେ'ଶ'ଯୁ'ଦ'ି'ନ'ି'ର'କ'ଳ'କ'ଶ'ହେ'ଶ'ଦର୍ଶନ'ନ'ି' ।

ଶ୍ରୀକୃଷ୍ଣାମନ୍ତ୍ରାବେଦିକାଣିଶ୍ଵରୀଶ୍ଵରାମାଯାନାମନ୍ତ୍ରାବେଦିକାଣିଶ୍ଵରୀଶ୍ଵରାମାଯାନା³⁰

၃၁ དྲୁଣ୍ଡ ཉତ୍ତର ପାଶେ କଣ୍ଠରୀ କୁମାରାଦ୍ୱାରା ଘଟିଥିଲା କଣ୍ଠରୀ ନିର୍ଦ୍ଦେଶ କୁମାରାଚି ଦିର୍ଗଦାଶ କାଳକୀ ହାତରୀ ।

དେଖିବାରେ କମାପାଣାମ୍ବାହି ଦେଖିବାରେ କମାପାଣାମ୍ବାହି ।

ସାହୁ'ଯା'ମା'ଦେବ'ଦ୍ୱାରା'ଶ୍ରୀ'ଶବ୍ଦା'ତ୍ତିନ୍ଦ୍ର' ଦେଵ'ମକ୍ଷର' Kā2 Hōr'ମାତିର' ଦେଖାଯା'ପାଦ' ଯତ୍ତ' ମା'ଶକ୍ତୁ' ଦୟା'
ଧର୍ମ' ଶ୍ରୀ' ଶକ୍ତି' ଦେବ' ପାଦ' ଶକ୍ତି' ଦେଖା' ପାଦ' ଯତ୍ତ' ମିତ୍ର' ଦୟା' ଯତ୍ତ' ପାଦ' ଯତ୍ତ' ପାଦ' ଯତ୍ତ' ଶକ୍ତି' ॥

२८ अष्टकः H अष्टकः

29 Homits ହାତ୍ତ

ପ୍ରକାଶନ

୩୧ ପଦ୍ମନାଭ

୩୨ ପରିଚୟ

藏文大藏经

ପଦ୍ମନାଭ

如何なる者らが「等引」によって御覧にならないのなら、無である必要があるのである。」と論じる _{K5b2} 者なのか、また勝義の量と _{H5d4} 言説の量の力はいずれが強大かを伺察してから、「言説の量の対境に対して侵害をなすことは正理の理趣を超えている」ことについて後から伺察しよう。

もし、「それ(=等引)に慧を承認したなら、道に対する相執になるのである。」というなら、_{K5b3} 正理の側で、慧が有ると _{H5b5} 論じたならそうなるけれど、言説の量によってそのように建てたので、何で「そう」なろうか。そのようなら、慧が何について執っても相執になるので、見解を擁護する流儀が漢土の親教師の如くになる必要があるのである。

見解が漢土の親教師のようで妥当なら、_{K5b4} 行持もまったくそのとおりに _{H5b6} なる必要があつて、相執を全面的に否定することは道理だが、異生も相執【のこと】を行持の中心とするのは、一切相に道理でないのである。

そのとおりなら、その慧に義共がどのように現れるのか、と考えるなら、あらゆる所取 _{K5b5} 行相が空虚なことを虚空のごとしという喻例によって教示すべきである。

〔両外境〕実在 _{H6a1} 論者で、所取行相・能取行相の二つについて認める者らは、その能取行相にも不共の義共がどのように現れるのかをも思惟すべきである。

「領納される程度の _{K5b6} ことによってである。」というのは、名の言説 _{H5c2} 程度【ということ】なのである。

「(宗)そのとおりなら、そこに能取行相が有ることになるのであって、(因)というのも慧を承認してから、あらゆる所取行相が空虚だから」というなら、過失は無くて、觀待法の行相は空虚なのだが、法性の行相はそこで否定す _{K6a1} べき _{H6a3} でないのである。

「大種などを説く」という場合に、対境の行相を具えていることを承認したので、所転変・能転変・転変の三行相の有無も伺察するのである。

更にまた、道諦を有為と建てたし、その相 _{K6e2}, _{H6e4} 基体(=具体例)として八支聖道を建てたから、またそれらを後得が遍充することをどこにもお説きになつていなし、等引は道ではないともお説きにならなかつたのである。

所捨断を捨断する様態を軌範師バーヴィヴェーカなど _{H6a5} が迷乱によって迷乱を捨断 _{K6a3} するという喻例を通じて建てたのは、異生の場合で、かつ捨断・対治が義として成立していることを否定するものなのだが、種子を捨断するばあいに無我を現見に見る必要があると『入中論註』⁶などの全てに _{H6a6} お説きになっているから、また諦を現前に了解するのは一剎那だとお説きに _{K6e4} なったから、「言説の慧の時に量つてから喻例として認めなさるのである。」ということにも能決定は顕現しないので、非常に不明瞭な句義に対して _{H6b1} 努力をなすのは不合理である。

ବନ୍ଦର୍କୀ ଦୁଃଖାବାହିନୀ ଯାତ୍ରା ପାଇଲା ଶାନ୍ତିମୁଦ୍ରା କିମ୍ବା ଶାନ୍ତିମୁଦ୍ରା କିମ୍ବା ଶାନ୍ତିମୁଦ୍ରା କିମ୍ବା

ଦୁର୍ଗାଦେଖିବି କୈତ୍ତିଲୁହାରମାନାଦି କ୍ଷେତ୍ରମଧ୍ୟରେ ରତ୍ନାପିତ୍ରାଣୀ ଦ୍ୟାମାଶକ୍ତି କ୍ଷମାଦାଶପିତ୍ରାଣୀ ଏତ୍ଯାଙ୍ଗଜୀବି ସମ୍ମାନି କରୁଥାଏ ହୋଇଥିଲା ଅର୍ଥରେ ।

ସାନ୍ତିରୁଷା'ପା ମୌଦ୍ୟ'କୁଳ'ଦ୍ୱାରା ପରିଚ୍ଛବିତ ହେଲା ଏବଂ କାହାର ପରିଚ୍ଛବିତ ହେଲା ଏବଂ କାହାର

אַתָּה שְׁמֵךְ אֱלֹהִים

ହେ'ଶମନ' K6b1 ତତ୍ତ୍ଵଦ୍ଵିଦ୍ଵାମି'ରଷଦନ୍ତୀ ଶାଶା'ପ୍ରେଦ୍ବଳ୍ଲକ୍ଷଣଦ୍ଵାରା

ਲੇਖਕ

ੴ ਸਿਖਾਤੇ ਸਾਗਰਾਂ ॥
K663

ଶ୍ରୀକୃତିକୁମାରଙ୍ଗଣ୍ଠାନ୍ତିକୁ^{Han} ସିଦ୍ଧା । (2ab)

ଯତ୍କର୍ତ୍ତାପରିକାରକ ହାତି ପରିକାରକ ମଧ୍ୟାମ୍ବୁଦ୍ଧା ହିନ୍ଦୁ ମଧ୍ୟାମ୍ବୁଦ୍ଧା ହାତି ପରିକାରକ ହାତି ପରିକାରକ

35 Homits 55

36 Homits ሻሮ

要するに、如何なる義に執っても、(宗)等引に〈慧が無い〉という言説を結び付けるべきでなくて、(因)というのも軌範_{K6a5} 師御父子に隨従する者等は、〈慧が有る〉という言説を結び付けるから。

「それらは勝義について伺察する正理_{H6a2}なので、そのようなものによって伺察すべきでない」というなら、そのとおりなら〈慧が無い〉という立場も建てないのである。

この義は、非常に難しいので、そのように伺察した_{K6a6} 程度なのであるが、(宗)否定を真剣に取ったものなのではなくて、(因)というのも私の慧は明るくないので了解し難_{H6a3} いからである。

(2・1・1・1・2) 第二(甚深を教示するものだ、と教誡すること)は、(2・1・1・1・2・1)説き終わった無見の否定を憶念に結び付けることと、(2・1・1・1・2・2)有見の否定について聴くように教誡することである。

(2・1・1・1・2・1) 第一(説き終わった無見の否定を憶念に結び付けること)、自部が云う、

(宗)一_{K6b1} 切法が_{K6b2} 空性なのは妥当ではなくて、(因)というのも能証が無く、能害があるからである。

{H6a4} 前者は、空性だと論証する妥当性は有り得ないから、また〔後者は、〕正理が侵害していて、(宗)現見が{K6b3} 所縁とすることにならないことに帰謬する。(因)無だから。(喻)ロバの角の様に、それゆえに_{H6a2} 有であって、現見が所縁とするから。また、教誡によても_{H6a5} 侵害されていて、『經』に、三世の縁起をお説きになったのと、アビダルマにも、蘊界処の自・共相をお説きになったから。

と〔そう〕いうなら、回答は

まずは、全ての過誤が_{K6a3} 生起する場所である

無は斥き終わっている_{H6a6} から、(2ab)⁷

世間と出世間の善根一切を蔑ることに該当しているので、地獄などの苦一切を生じさせる因なのだとということと、前に有る善が減失する_{K6a4} 因なので、全ての過誤が生起_{H7a1} する場所である業果を損減する無見、これは汝にとって斥き終わっていることだから、まずは否定を為さないのである。

或いは、「アビダルマ經で斥き終わっているから、否定をまずは為さないのである。」_{H7a2} ということである。

「その_{K6b5} とおりなら、有見も否定が道理でないことになるのであって、『比丘らよ、勝れた諦は一つであって、欺かない法を有する涅槃である。』⁸ ということによって否定し終わっているからである。」といふなら、それは相応しないのであって、有見の否定は_{H7a3} 声聞藏に、繰り返し_{K6b6} 多く、かつ間断無く、かつ一典籍で有見だけを否定する典籍としてお説きになっておらず、無見の否定——それ(=有見)とは反対に〔繰り返し多く等、〕お説きになったものなので——に大変明るい彼ら(=声聞乗の者)にも〔有見を否定する〕正理を教説していないのである。

{H7a4} (宗)「大乗藏にそのようにお説きになった」とは{K7a1} 思わなくて、(因)というのも、これは声聞部派自身に周知の教誡に縁つて否定なさったものなのだから。

དྲ་କ୍ରତେ ପରି ଶାହୁ ପ୍ରଦେଶ ଏନର୍ଗା ଜ୍ଞାନ ପଦମ୍ବାଗୁଣ ପଦ ଅନ୍ତର୍ଗତ ପରିଷାମାନି^{HAD} ରେ ଶାଶ୍ଵତ କୁରୁ ପାଦମ୍ବାଗୁଣ କେ ବା ଦେଶ କୁରୁ ଜ୍ଞାନ ପଦମ୍ବାଗୁଣ ଏବଂ ସାଧାରଣ ଏକ ଦେଶ ଏବଂ ଏକ ଜ୍ଞାନ ପଦମ୍ବାଗୁଣ କୁରୁ ପଦମ୍ବାଗୁଣ ଏବଂ ଏକ ଦେଶ ଏବଂ ଏକ ଜ୍ଞାନ ପଦମ୍ବାଗୁଣ ।

ସାହିତ୍ୟକାରୀ

ସମ୍ବନ୍ଧରେ କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା

କୃଷ୍ଣ-ପତ୍ର-ଦୟାତ୍ମକ-ଶବ୍ଦ-ପତ୍ର-ଶ୍ରୀଶା । (2cd)

ଦେଶ'କଣ'ରକ୍ଷଣ'ପାତ'ରକ୍ଷଣ'ପାତ

ଶ୍ରୀ କୃଷ୍ଣା ପଦମାତ୍ରାକୁମାରୀ^{H7b} ସହଶରା ସବିନ୍ଦ୍ରା । 37 (3a)

गुरुशीत्तद्वादृप्रविरेतापादे विद्युत्त्वाद्यादिः॥^{१५} एवं विद्युत्त्वादिः प्रविश्च द्वादृप्रविरेता विद्युत्त्वाद्यादिः॥^{१६} एवं विद्युत्त्वादिः प्रविश्च द्वादृप्रविरेता विद्युत्त्वाद्यादिः॥^{१७} एवं विद्युत्त्वादिः प्रविश्च द्वादृप्रविरेता विद्युत्त्वाद्यादिः॥^{१८}

ଦ୍ୱାରା କିମ୍ବା କିମ୍ବା

ମୁଦ୍ରାକଣ୍ଠାନାମିତିଶୀଳିତିରେ ।

ଦୁର୍ଦ୍ଵାରା ପରିଚୟ କରିବାକୁ ପରିଚାଳନା କରିବାକୁ

କ୍ରିତ୍ସମ'ପେଟ K7a6 ମନ୍ଦ୍ରାକ୍ଷ୍ମୀଯମନ୍ଦ୍ରା

କୁଳାଙ୍ଗ ପ୍ରଦେଶ ଯାତ୍ରା ପିଲାମାନା ସମ୍ବନ୍ଧ ପାଇଁ ଅଣ୍ଟିମ ମହିନା ପାଇଁ କରାଯାଇଛି ।

କ୍ରିସ୍ତମାନଙ୍କିରଣାରୁ କାହାରେ ପାଇଲା ଏହା [କାହାରେ] କ୍ରିସ୍ତମାନଙ୍କିରଣାରୁ

ଶତକ ଲେଖଣୀ ।

23

3) K omits].

38 קְרֵבָה

それなら、「近くの所化、彼らには世尊は有見を否定する _{H7a5} 正理を広説していないのである。」というなら、彼らは相続が成熟した _{K7a2} 者なので大いなる努力をもって教示する必要はなく、法無我を完全に修習することは無いからである。

それなら、「近くの大乗の所化にも相応する」というなら、(宗)過失は無くて、(因)というのも、_{H7a6} 所知を知ることに熱心なのと、法無我を広汎に修習する _{K7a3} からである。

(2・1・1・2・2) 第二(有見の否定について聴くように教説すること)は、

正理、それによって有も

斥くことになるところのものを聴きなさい。 (2cd)⁹

後から説くことになる〔偈である〕

凡夫が構想 _{H7b1} 分別した通り、そのとおりに(3a)¹⁰

云々によって「正理、それによって有見も——縁起の証 _{K7a4} 因などによって——斥くことになるところのものを説くが、聴きなさい」と教説することである。

「(宗)『も』という言葉を述べるのは道理でなくて、(因)というのも、無見を否定する _{H7a2} 努力をなさずに教示されたからである。」というなら、過失は無くて、「〔無見だけでなく〕有見も経で斥き終わっているけれど、そのとおりだとしても前の _{K7a5} 相反、それは無い」ということである。

(2・1・1・2) 第二・有辺を否定する正理に、(2・1・1・2・1)該当する帰謬と(2・1・1・2・2)補足である。

(2・1・1・2・1) 第一(該当する帰謬)、「その正理も何か」というなら、

凡夫が構想分別した通り、そのとおりに

事物がもし諦となつたなら、

それが事物として無である _{K7a6} ことによって解脱すると、

誰が主張しないのか、如何なる因で「主張しないの」か。(3)¹¹

すなわち、凡夫にそのように顕現するもの、これらは顕現するところ、_{H7a4} そのとおりに諦でないが、もし、凡夫が構想分別した通り、そのとおりにこれら事物がもし諦となつたなら、(宗)彼ら凡夫を有法として、蘊 _{K7b1} の事物が全くの無だ〔とする〕と、後生を受けない解脱である涅槃を _{H7a5} 得た主体にほかならないと、声聞部派たる汝は如何なる因由によって主張しないのか、主張するのが正理であることに帰謬する。主張しないことに如何なる因が有るのか、(因)というのも、少しも無いからであって、というのも、諦を _{K7b2} 見ると主張するから、(喰)たとえば阿羅漢が涅槃 _{H7a6} して後生しないのと同様である。

そのような帰謬のうちでは、凡夫は解脱を見たからこれらの顕現は諦でないので、有辺だと証成しなかったのである。

シャン・タン・サクパは、これらを世俗の伺察 _{K7b3} による自立だとなさっていても、帰謬語あるいは自己極成 _{H8a1} の証因である。

ପରିମାଣାବ୍ୟକ୍ତିଦ୍ୱାରା କୁଣ୍ଡଳାଦିକାରୀ ଅନ୍ତର୍ଭାବରେ ଉପରେ ଏହା ଦେଖିଲୁଛି ।

ଦ୍ୟାସ୍ତ୍ରୀମାନିଶବ୍ଦିକେ ଶ୍ଵରାଯ୍ୟରୁ ପାଦଗୁଡ଼ିକରୁ ଏହାରୁ ପାଦଗୁଡ଼ିକରୁ

ପଶ୍ଚାତ୍ ଯେତୁ ପ୍ରଦ୍ୟମନଙ୍କ ପିତା ହେଉଥିଲା ।

39 ५. H ५

40

⁴¹ 355.5 K 355.5

42

43 श्रीहरि

४४ देश निर्माण

45 $\sum_{i=1}^n K_i$

46 ମୁଖ୍ୟ H ମୁଖ୍ୟ
47 ତେବେଳି K ତେବେଳି

無始來の輪廻から諦を見ていたなら、その程度で涅槃を得たことに帰謬することを投じるものなのだが、見道から涅槃を建てるものなのではなくて、後に伺察するのである。

教証に、_{K7b4, H8e2} 凡夫が諦を見ることに対する能害を教示するものは、六根に依止することに縁って觀察して量ではないのだと教示することである。

これら教証を証拠としてから、二顕現の知覚を量ではないことが遍充すると主張するの_{H8e3} は、(宗)論の一切が虚偽だ_{K7c5} というのと法が相応していて、(因)というのも、そのように理解する自らの知覚を量だと承認したから。

それを認めない〔という〕のなら、その二つ(=二顕現の知覚は量ではないことと、論の一切が虚偽だということ)のうち、妥当か妥当でないかの違いがどうして妥当するのか、それゆえに、これら教証は、根は真実を_{H8e4} 伺察する量ではなくて、他に聖_{K7b6} 道に努めることが無意味であることに帰謬することを投じたものなのだが、その様でないのなら、四つの量の建立をなすことが道理でないことになるのである。

さて、帰謬・自立と論じられる中觀派の_{H8e5} 違いを説こう、そのうち、[1]説かれる数目〔の確認〕と、[2]妥当な立場の_{K8e1} 確認である。

[1]第一(説かれる数目の確認)に、①〈一般に自立の主張命題を承認するのかしないのか〉〔と論じること〕と、②〈真実を伺察する場合に承認するのかしないのか〉〔と論じること〕と、③〈事物の力の_{H8e6} 働きという量を承認するのかしないのか〉〔と論じること〕と、④〈有法に共通顕現が有るのか無いのか〉と論じることと、⑤自らの_{K8e2} 流儀の承認の有無と、⑥肯定的断定の主張命題の有無と、⑦〈自らの流儀を論証せずに他者の立場を否定する_{H8e1} 程度のものだ、と承認するのかしないのか〉と、⑧帰謬の主張命題程度のものの有無と、⑨〈仏陀に自立の智を承認するのかしないのか〉と、⑩〈自己_{K8e3} 認識(自証)を承認するのかしないのか〉と、以上十である。

そのうち後者二つ(=⑨・⑩)は、性器の有無について、中觀帰謬派・自立派の違いを_{H8e5} 建てることと法が相応するのである。

①～③承認の有無も、色法・表識の違いについて建てるなら美麗である程度のものである。

第六と第七の二つも妥当でなくて、世俗を伺察する_{K8e4} 場合における肯定的断定の主張命題と自らの流儀は帰謬_{H8e3} 派も承認するが、(宗)正理の側における肯定的断定は自立派も承認しなくて、(因)というのも、大軌範師バーヴィヴェーカが、「色の生は無である。」と伺察するなら般若波羅蜜多について行じているが、「色_{K8e5} の生の無は有である。」と考えるなら般若波羅蜜多_{H8e4} について行じていなくて、正理の側で生を否定するものなのだが、生の無を肯定しない」とお説きになっているから、それゆえに妥当な立場は第一のとおり(=自立の主張命題の承認・不承認)なのだが、(宗)それも④有法における共通顕現の有無なのであって、(因)というのも、自立の証相の有無は、最終的に論者・_{K8e6} 後論者の_{H8e5} 共通顕現において基体である有法の成・不成に依拠するからである。

48

49

50 ፳፻፲፭

ଶ୍ରୀ ହିନ୍ଦୁ

³¹ Homits 5.

52 ఏ. కణ.

③「事物の力の働き」というもの〔である量〕も、自相ある事物を承認することだと云うとしても妥当でなくて、というのも、軌範師バーヴィヴェーカも否定したから。

「〈言説_{H8b6}の量の共通_{K8b1}顕現は真実について伺察する場合にはあり得なく、正理の側に有法が無いことは、軌範師バーヴィヴェーカも承認したことである。」というなら、自立の証相を承認し、かつ正理の側で有法は無いと認める_{H8a1}ことは、バーヴィヴェーカの内的相反だとチャンドラキールティは_{K8a2}なさって^{1,2}いて、『明句論千葉』に「ここで、生の否定を所詮法と認める際、真実として、所依である有法を顛倒した程度のものである我という事物として獲得したことが退失した_{H8a2}ことになると、この思撰者自身は承認した者なのである。」とお説きになったのである。

「経部と_{K8b3} サーンキヤ派が論争したときに、常・無常のいづれによっても区別されなかつた声として共通顕現が有る様に、中觀派と實在論者に_{H8a3} も諦・空のいづれによつても区別されなかつた顕現した程度のものとして共通顕現が有るので、共通顕現が無いと成立していないのである。」というなら、これへの_{K8b4}回答として或る者が句の少分を執つて、〈中觀派には承認が無い〉ということによつて回答を与えるのは、二諦_{H8a4}の区分に対する痴愚なので捨てるべきである。

それゆえに、経部とそれ(=サーンキヤ派)の両者には——いづれによつても区別されなかつた自相ある声を両者が_{K8b5}認めるので——共通顕現が有るが、中觀派と實在論者の二つにはそのようなものは無く_{H8a5}て、というのも、中觀派は自相を証相の所否定とするが、實在論者は自相が知覚・対境として現れなかつた色などの非共通顕現の体が知覚・対境として現れないと主張する_{K8b6}から。

それゆえに、自相とそれとして空であることの_{H8a6}両者が知覚・対境として現れたことに観待しない色などである程度のものが知覚・対境として現れることを、中觀派も二諦両者について認めず、實在論者も認めないから、軌範師チャンドラキールティとディグナガの_{H8a1}両_{K8a1}者が、〈自立の証因であるのなら、〔三〕相という能証の量の根本が、知覚によって増益されずに有る真実を執ることに依拠しない〉と主張なさることは両者共通していても、チャンドラキールティは、そのようなものは有り得ないから自立の_{K8a2}証因を_{H8a2}お認めにならない者なのである。

「或る者が中觀派であるのなら、自立の比量をなそうとするのは道理でない」という句に縁つて、中觀自立派は中觀派として無効だと主張するのは道理でなくて、それは自立が道理でないと教示しているが、中_{K8a3}觀派であることと_{H8a3}自立を承認することが相反すると教示するものなのではなくて、[たとえば、]比丘の飲酒は道理でないと教示しているから [といって]、酒が律儀を放棄する因になるものなのではない [のと同様な]のである。

「それ(=自立派)は事物が諦だと承認したから〔中觀派でない〕である。」というなら、そのとおりなら、(宗)サーンキヤ派は_{K8a4}仏教徒であることに_{H8a4}帰謬する。(因)蘊は無我だと承認したから。「それは証成してない」と云うなら、前者も証成してないのである。

୧୫

⁵⁵ Komits [.

⁵⁶ Read K एविषा, H एविषा.

「〔自立派は〕事物が正理によって成立していると承認したから〔中觀派でない〕」というなら、(因)それ(=サーンキヤ派)も蘊が所作だと承認したから〔(宗)無我を承認していて、仏教徒に帰謬する〕。

「所作であるのなら無我_{K9a5}であることが遍充していても、_{H9a5}所作を承認したことを無我を承認したことが遍充しないのである。」というなら、それはこれ(=自立派)にも相応するので、〔自立派は〕事物が諦であることを承認していないし、一切が無諦だと承認したから、中觀派なのではないことに何でなろうか。

その_{K9a6}ようなことを論じる者、彼_{H9a6}は、所遍を承認したなら能遍を承認している必要があることと、[能遍を実際に]承認していることとの違いが分明でないことに尽きるので、一切の学説論者について錯誤していることになるのだが、[たとえば]二外境〔实在〕論者も〈一切の所作は無諦で幻術のごときだ〉と承認した_{K9b1}ことになる_{H10a1}のであって、というのも縁起について承認しているから。

(2・1・2・2・2)第二・補足に、(2・1・1・2・2・1)〔有・無の〕二と見ることによって解脱しないと教示することと、(2・1・1・2・2・2)無二を了解することによって解脱すると教示することである。

(2・1・1・2・2・1)第一(二と見ることによって解脱しないと教示すること)、

有によって解脱しなくて、

無によってこの有(生存)より〔解脱するもの〕なのではない。(4ab)¹³

{K9b2}(宗)事物に{H10a2}自性が有ると見ることによっても有(生存)・輪廻より解脱しなくて、(因)というのも、それは〔前世・現世・来世の〕全ての世において樂趣の果と樂受の果を有するのだから。

(宗)業果が無いと見ることによっても有(生存)におけるこの輪廻より解脱することに_{K9b3},_{H10a3}なるものなのではないであって、(因)というのも、一切の過誤の源となって、悪趣の果と苦受の果を有するのだから。

それゆえに、この二見は輪廻の因なので——不淨なものによって不淨なものは浄化することにならない_{H10a4}様_{K9b4}に——解脱することにならないのである。

『宝鬘』に「有という者、彼は樂趣に趣く。」¹⁴「無という者、彼は惡趣に趣く。」¹⁵とお説きになったのである。

(2・1・1・2・2・2)第二(無二を了解することによって解脱すると教示すること)、

事物と事物の無を十全に知るから、

偉大な本性の者は解脱する。(4cd)¹⁶

もし、「その二見によって解脱しない_{H10a5}のなら_{K9b5}、何によって解脱することになるのか」というなら、[それは]「有無は相反事なので、そのとおりなら解脱は有り得ない」と思惟することである。

(宗)事物に縁らずに事物の無にならなくて、(因)というのも、他の事物となつた消滅を事物の無と認めるから。

ସମ୍ବନ୍ଧରେ କାହାର ପାଇଁ କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା

ସାରିବ୍ୟାଧିକ ପରିମାଣରେ ଶୁଣୁଥିଲା ଦ୍ୱାରା ଧାର୍ଯ୍ୟାତ୍ମକ ହୁଏ ଥିଲା ।

ଦୁଃଖ୍ୟୀ। ଦୁଃଖ୍ୟୀରେ ଦୁଃଖ୍ୟୀରେ ପ୍ରଦୂଷିତ ହେଲାମାତ୍ରା ଏଥିରେ ଯାହାକୁ ଦୁଃଖ୍ୟୀରେ ପ୍ରଦୂଷିତ କରିଛି

‘**ਤੁਸਾਹਿਂਦੀ**’ ਕੇ ‘**ਤੁਸ**’ K106a. ਸੈਰ. ਵਾਦੀ H106a. ਸ੍ਰਦ੍ਧਾ. ਪ੍ਰਿ. ‘**ਦੰਦਸਾਹੋ**’ ਵਿਚੋਂ ‘**ਨਾਮੀਕ**’ ਵਾਂ ਦੀ ਸ੍ਰਵਣ ਕੰਢ ਵਾਦੀ ‘**ਦੰਦਸਾਹੋ**’ ਕੇ ‘**ਦੰਦਸਾਹੋ**’ ਵਿਚੋਂ ‘**ਨਾਮੀਕ**’ ਵਾਂ

ଶ୍ରୀମଦ୍ଭଗବତ

ੴ ਸਤਿਗੁਰ ਪ੍ਰਸਾਦਿ॥

ସୁଦ୍ଧାରମନ୍ତ୍ରାଶ୍ଵରାଶ୍ଵରାହୀ ॥ (5ab)

དྲୟାମାଣୀଙ୍କ ପରିଚୟ କରିବାକୁ ପାଇଁ ଏହାମାତ୍ର ବିଶ୍ୱାସ କରିବାକୁ ପାଇଁ ଦେଖିବା
ପରିଚୟ କରିବାକୁ ପାଇଁ ଏହାମାତ୍ର ବିଶ୍ୱାସ କରିବାକୁ ପାଇଁ ଦେଖିବା
ପରିଚୟ କରିବାକୁ ପାଇଁ ଏହାମାତ୍ର ବିଶ୍ୱାସ କରିବାକୁ ପାଇଁ ଦେଖିବା

57

58

59 ପାତ୍ର

६० हिंसा H हिंसा

61 वेक् K वक्

(宗)事物の _{K10a6} 無 _{H10a6} に縁らずに事物は証成しなくて、(因)というのも、事物でないものを否定せずに事物は証成しないから。

それゆえに、〈事物と事物の無〉の二つは相互に観待するので自性空性だ」と現見に十全に知るから——〔それは〕無所縁の智 _{K10a1, H10a1} の所依なので——偉大な本性の者・聖者らは解脱することになるのである。

〔それが、〕『宝鬘』に「二に縁らず解脱することになる。」¹⁷ ということの義である。

(2・1・2) 第二に、〔すなわち〕二辺の能証の否定に、(2・1・2・1) 聖教の能証が _{K10a2} 妥当でないこと _{H10a2} と、(2・1・2・2) それらに涅槃が妥当でないことである。

(2・1・2・1) 第一(聖教の能証が妥当でないことに、(2・1・2・1・1) 凡夫には不定であることと、(2・1・2・1・2) 聖者への教示は不成であることである。

(2・1・2・1・1) 第一(凡夫には不定であること)、〔実在論者が〕「(宗)事物と事物の無が有って、(因)というのも、輪廻と涅槃が有るから。」

(宗)遍充は有って、(因)というのも、五 _{K10a3} 取 _{H10a3} 蘊の事物が輪廻なのだが、その相続の断たれた事物の無が涅槃なので。

(宗)輪廻・涅槃が無いとも証成しなくて、(因)というのも、それが無いなら取捨せんがために教示することが道理でないことになる、と世尊がお説きになった _{K10a4, H10a4} から」というなら、聖者に教示するために〔そう〕云うのなら、〔その証因は〕不成であって、というのも、聖者になつてない者を聖者にならせんがためにその二つ(=輪廻・涅槃)が教示される必要があり、その二つ(=輪廻・涅槃)を教示するのにその前に聖者が必要なので、相互に縁るから _{H10a5} 無自性 _{K10a5} だと証成したのである。

凡夫に教示するなら、遍充は不定で、すなわち

眞実を見ない者は、世間として

涅槃だと輕慢を思つていて、(5ab)¹⁸

は、「眞実を見ない凡夫らは、世間〔すなわち〕自相ある輪廻が所捨断で、そしてその相続が断たれた涅槃 _{K10a6} が所受取だと輕慢を思い、すなわち執念していて、それ故に、単なる〔無自相である程度の〕輪廻を捨てようという思いが生じたときにも、輪廻は無自相だという教示が意に掛かりつつ、(それが無いならその相続が断たれた涅槃も無い)と了解可能なことによって輪廻無 _{H10a1} 自 _{K10a1} 性性が涅槃だと了解可能なので、凡夫に教示しても未了義だとお説きになったから、遍充は不定である。」ということである。

事物に対する或る執念の念が斥く為に、世尊は、自相ある輪廻・_{H11a2} 涅槃を _{K10a2} 他の側(=実在論者)だけに承認なさってお説きになったということなのである。

「経部には人・法我をお説きにならなかつたのである。」と論じる者ら、彼らは仏陀の御教えを言葉通りのものが遍充することを承認することが必要な者 _{H11a3} なのである。

ସାତିଶା'ଦ୍ୟ'ଏ^{୧୨} ରେଖାଣ୍ଠ' K1063 ମୁଖ୍ୟ'ଏ'ଶାତିଶା'ଦ୍ୟ'ଏ'ଦ୍ୟ' | ଦିନେ'ରେଖାଣ୍ଠ'ଏ'ଶାତିଶା'ଶ୍ରୀ
ଦ୍ୟ'ଏ'କ୍ଷି

“**ଦ୍ୱାରା କରିବାରେ ପରିବର୍ତ୍ତନ ହେଲା**”

ଶୁଦ୍ଧାର୍ଥକାରୀଙ୍କ ପରିମାଣରେ ଅନୁଯାୟୀ ଏହାର ପରିମାଣ ହେଉଛି ।

ଦ୍ୱାରା କ୍ରିତିମ ପ୍ରକାଶକ ମୁଦ୍ରଣ ଏବଂ ପ୍ରକାଶନ ପାଇଲା ।

དྲୟାକ୍ରି-ସନ୍ଦାମାପଞ୍ଚ-ରୂପ୍ୟଦ୍ୟାଗୁରୁତ୍ୱାତ୍ମାତ୍ମାପରି ଦୂରତ୍ୱାତ୍ମାତ୍ମାଦେଶ-ଜ୍ଞାନପରିହାରୀତ୍ୱାତ୍ମା
ପ୍ରେମଦ୍ୟାରୀଗୁରୁତ୍ୱାତ୍ମାପରି ଦୂରତ୍ୱାତ୍ମାତ୍ମାଦେଶ-ଜ୍ଞାନପରିହାରୀତ୍ୱାତ୍ମା ଗୁରୁତ୍ୱାତ୍ମାପିବୁଳିଗୁରୁତ୍ୱାତ୍ମା ଦେଖିବୁଳିଗୁରୁତ୍ୱାତ୍ମା
କଣ୍ଠାପରିହାରୀଗୁରୁତ୍ୱାତ୍ମାପରି ଦୂରତ୍ୱାତ୍ମାତ୍ମାଦେଶ-ଜ୍ଞାନପରିହାରୀତ୍ୱାତ୍ମା ଦୂରତ୍ୱାତ୍ମାପରିହାରୀତ୍ୱାତ୍ମା
ପରିହାରୀତ୍ୱାତ୍ମା ॥

ସାହିତ୍ୟକୀ

শু'দ'ব'দ'ব'ক'ভ'ন'ব'ব'দ'শ'।
ষ'ন'ি'শ'া'স' দ'ব'ক'ভ'ন'ব'ব'দ'শ'।⁶⁷ (6ab)

⁶² शनिवारा K शनिवारा

୬୩ ଶତାବ୍ଦୀ

64 ၃၇ ၁၁၃၇

၁၅၃

66 ၂၁၄။ H-

፭፻፷፯

(2・1・2・1・2) 第二(聖者への教示は不成である)に、(2・1・2・1・2・1) 聖者_{K10c3}は御覽にならないことと、(2・1・2・1・2・2) それの妥当性との二つである。

(2・1・2・1・2・1) 第一(聖者は御覽にならないこと)、

眞実を御覽になる者らは、世間そして

涅槃だと輕慢と思うことが無い。(5cd)¹⁹

眞実を現見に御覽になる聖「者らは、世_{H11a4}間が所捨断で、そして涅槃が_{K10b4}所受取だと輕慢を思い、すなわち思念することが無く、分別なさないのである。

「それら(=輪廻・涅槃)が聖者に教示されるものではないのなら、聖〔者の〕諦はどのようになるのか」というなら、(宗)過失は無くて、(因)というのも、それを了解するなら聖者になるの_{H11a5}で聖者にするところの諦が聖〔者の〕諦であるか、あるいは聖者らが教示した諦が_{K10b5}聖〔者の〕諦であるのだが、そのとおりでなくて聖者だけに成立しているのなら、聖者という八つの言説(=四向四果)も道理でないことに_{H11a6}なり、世間ににおいても、教示されたとおり、そのとおりの_{K10b6}ものに安住している者を聖者と言説すると極成しているからである。

苦、更に無常などは、聖者が教示したとおり、そのとおり、そのとおりに住するが、淨・樂などとして世俗において住さないのである。

そのとおりに_{H11b1}また『註』に、「そのうち、顛倒とは樂_{K11a1}などとして執ることなのだが、それは世俗においてもその本性としてその事物が住していないからである。

(宗)不顛倒とは苦などとして執ることであって、(因)というのも、その事物が世俗_{H11b2}においてその本性として_{K11a2}有るからである。」²⁰とお説きになったのである。

これは、何であれ迷乱の側で有る諸々が世俗として有るものだという義を排斥しつつ語釈しているのだが、違いが分かたれずに、世俗として有るなら有に相反すると主張する惡分別も除去するものなのであつ_{H11b3}て、その〔惡分別の〕とおりなら、淨_{K11a3}樂常我も世俗として有ることに帰謬する。迷乱の側で有るから。証相・遍充は承認されている。〔そうだと〕認めるなら、この教説によって除去されるのである。

(2・1・2・1・2・2) 第二(その妥当性)、

有(生存)と涅槃の

二つ、これは有でない。(6ab)²¹

କାହାରୁ ଆଶିନ୍ତା ପାଇଲା ଏହା କିମ୍ବା କିମ୍ବା ?

କୁଣ୍ଡଳୀ ପାଦମ୍ବରି ଲିଖିତ ଶବ୍ଦରେ ଏହାକିମ୍ବା

དྲିଦ୍ଧ-ଭାବ-ମୁଦ୍ରା-କ୍ଷମି

ଅନ୍ତର୍ମାଣ

ସମ୍ବନ୍ଧିତ ପରିଚୟ

西藏民族學院藏文系藏文函授大學畢業證書
西藏民族學院藏文系藏文函授大學畢業證書

ଶତାବ୍ଦୀ

ଦୂରଶାନ୍ତିକୁମାରବିଷୟ ପାଇବା ।

ମୁଦ୍ରଣ ପରିକାଳୀନ ପରିବାର ଏବଂ ପରିବାରକୁ ଅନୁଭବ କରିବାକୁ ଆପଣଙ୍କ ଉତ୍ସବ ହେଲା ।

ੴ ਪਾਖਿੰਦ ਸਾਹਿਬ ਨਾਨਾ ਗੁਰਾਂ

୨ ଶ୍ରୀ କଣ୍ଠ ପାତ୍ରମାତ୍ରାଙ୍କିତିରେ ଦେଖିଲୁଛାମୁଣ୍ଡିରେ । (7)

ସମ୍ପର୍କ କାର୍ଯ୍ୟ କରିବାକୁ ଅନୁରୋଧ କରିଛନ୍ତି।

68

68a

Omit ፳፻.

३८५

Read K 5

⁷¹ H omits].

輪廻と涅槃が自相によって成立したなら、聖者の等引によって御覧になることが道理だとしても、有(生存)と涅槃の二つ、これは自性によって有でないから、(宗)映像の如くそれは自性によって「有でない」と御覧になることが真実を御覧になることではなくて、(因)というのも、眼翳を有する者なども真実を見ることになるからである。

(2・1・2・2)(第二)それら二つ(二辺)に涅槃が妥当でないことに、(2・1・2・2・1)自らの涅槃を確認したことによって、(2・1・2・2・2)他者に涅槃が得られることが妥当でないことと、(2・1・2・2・3)自らに妥当であることである。

(2・1・2・2・1)第一(自らの涅槃を確認したことによって……)に、(2・1・2・2・1・1)略説と、(2・1・2・2・1・2)広説である。

(2・1・2・2・1・1)第一(略説)、「涅槃というものが何も有でないのなら、聖者が涅槃を得たと建立したこと、それそのものはどのようになるのか」というなら、

有(生存)を十全に知ることこそを

涅槃と述べる。(6cd)²²

有(生存)を無自性として現見に十全に知ることこそを「涅槃が得られた」と述べるものなので、言説として無が証成していないし、勝義として遍充が証成していないのである。

(2・1・2・2・1・2)第二(広説)、

事物が生起し消滅したことを

滅と分別した様に

それと同様に勝れた者らも

幻作されたごとき滅をお認めになる。(7)²³

無常な事物は自体による成立は無いが、事物が前に生起した、すなわち生じたのが消滅したことを、滅、すなわち無常と構想分別した様に、²⁴そのように涅槃も自体による成立は無いが、輪廻が無自性であることが涅槃なので、それが知覚・対境として現れることは輪廻が知覚・対境として現れるに観待したから、喻例、それと同様に勝れた聖者らも幻作されたごとき蘊の無生である滅をお認めになるのである。

これを確認したものが自性涅槃なのだが、道によって得られた涅槃は客塵である垢を離れた滅²⁵なのである。

ଦ୍ୱାରା କୈଶାମାନୁଷାଦନ ଦସାମା ପଦିଶା ଏତଙ୍କରୀ^{H1262} ହାତି ଶବ୍ଦାଳାପନା ପାଇଁ ପାଇଁ ଶିଳ୍ପିଦିନ ହାତି ଶିଳ୍ପି

ଶାନ୍ତିରୁଦ୍ଧାରାକୁ ଶୁଣୁ । ତୁମୁଁ K12aସନ୍ଦର୍ଭରେ ଏହାରୁଦ୍ଧାରାକୁ ଶୁଣୁ ।

੫੫

“**କୁ**” H12b6 **ମୁଦ୍ରିତ** ଏବଂ ପାଇଁ ପାଇଁ ପାଇଁ ପାଇଁ

ପ୍ରକାଶ'ପ୍ରକାଶ'ପ୍ରକାଶ'ପ୍ରକାଶ'ପ୍ରକାଶ'ପ୍ରକାଶ'

ମୁଖ୍ୟମାନଙ୍କ ପରିଚୟ

ବିଶ୍ୱାସ ॥ ୮୮ ।

73

74 **କଣ୍ଠାନ୍ତର୍ମାତ୍ରାଜୀବି**: **Hକଣ୍ଠାନ୍ତର୍ମାତ୍ରାଜୀବି**

75 മുഹമ്മദ് പാഠം

76

Digitized by srujanika@gmail.com

(宗) 見道を得てから涅槃を得たと建てることも、この『註』の K11b₅ 流儀では明らかになつていなくて、(因) というのも、『経』に「我が生は尽きたのである。」「為すべきことは為されたのである。」²⁴ というのは、また阿羅漢の場合だけに見えるから、また、「もし法知の H12a₆ 直後に……」²⁵ 云々への『註』の結部に、「縁起生 K11b₆ の義、それが如実の一相として見えること、ほかならぬそれを次第に數習したことによって無明が残りなく滅したので、縁起 H12b₁ 生の自性を所縁とする智に安住する者が現法において涅槃すること、K12a₁ および〔涅槃と〈智に安住する者〉を〕所作・能作性として建立したが、他の行相として〔建立したの〕ではないのである。」²⁶ とお説きになったのである。

それは、「無明が残りなく滅した」阿羅漢 H12b₂ の境地でない者には有り得ないから。

「『入中論』に『有身見を預流が捨断 K12a₂ する』²⁷ と説いているので、有染汚の無明は見道から尽きて捨断されたのである。」と考えるなら、軌範師チャンドラキールティは——『中觀五蘊論』²⁸ では言説を H12a₃ 大部分、アビダルマ七部と一致させなさっているので有身見を見所断に遍充させていても——それを K12a₃ 修所断に包摶された有染汚の無明とお説きになっているから。

附帶して、声聞の聖者は、法無我を了解して H12b₁ も所知障を捨断しないと主張すること、これも伺察すべきであって、大乗の見所断に包摶された所知障、それらを、K12a₄ 法の真相を現見によって新たに了解した程度で捨断するのか、それとも數習することが必要か。

(宗) 後 H12b₅ 者は道理でなくて、(因) というのも修所断になるから。前者のとおりなら、声聞の聖者が捨断していないことが退失るのである。

(2・1・2・2・2) 第二・他者が涅 K12a₅ 檀を得ることが妥当でないことに、(2・1・2・2・2・1) 略説と(2・1・2・2・2・2) 広説である。

(2・1・2・2・2・1) 第一(略説)

消 H12a₆ 減することによって寂滅することになるが、
有為を十全に知ることによって【寂滅する】のではない。
それは誰に現見することになるのか、
消滅を知ること、それはどうなるのか。(8)²⁹

は、前半によって帰謬を K12a₆ 提示してから、後半によって、無余依が妥当でないことと有余依が妥當 H13a₁ でないことの二つによって明らかになることを教示するものである。

(宗) 残りなきすべての蘊が消滅する、すなわち尽きたことより、無余依寂滅・涅槃することになることに帰謬し、蘊が有っても煩 K12b₁ 悩が尽きたことが有余依に帰謬する。
(因) H13a₂ 自相ある業・煩惱の因・縁が尽きたことによって蘊が再び生じないので涅槃だと建てるから。

(宗) 有為を自性により無生だと十全に知ることによって涅槃になるでないことに帰謬する。(因) 前者の証相、それ K12b₂ 故に。

78 Read માટે

79 Read निष्ठा।

⁸⁰ Read शशि-क्षः.

ବ୍ୟାପକ

Komits

後者を全く認める_{H13a3}ので、それを、有余依が妥当でないという帰謬として投じるものなのである。

「認めているから過失は無い」と〔対論者が〕いうなら、無余依涅槃、(宗)それは誰に現見することになるのか、(因)というのも、現見に証する者は妥当でないので、「私は涅槃を現見に証した_{H13a4}のである。」_{K12b3}という言説が妥当でないことに帰謬するのである。

有余依の場合には、残りなきすべての蘊が寂滅することは無いので現証されるべきものが無いから、〔現〕証することは妥当でなく、無余依の場合に〔現〕証者は妥当でないから、誰にも現前し_{H13a5}ないのである。

(宗)我_{K12b4}らに過誤は無くて、(因)というのも、聖者シャーリプトラなどが自性無生の寂滅、それを現見に証したから。

更にまた、(宗)寂滅は現見において妥当でなくて、——すなわち否定基体である蘊を現見に了解_{H13a6}してから寂滅を間接的に了解することは妥当でなくて、(因)というのも、_{K12b5}その場合に蘊を汝は認めないから。

(宗)直接に了解することは妥当でなくて、(因)というのも、現見の知は自相の直接境を有すると承認したからである。

後者の帰謬_{H13b1}を除去する教示は、有余依の場合に、「我所として生じることが尽きた、_{K12b6}すなわち消滅したのである。」と考える知であるもの、それもどうなるのか、すなわち、(宗)あり得ないことに帰謬する。(因)自相によって生じるから。

[それを]認める〔という〕のなら、経と相反するのである。

中觀派は、その_{H13b2}場合にも自相により無生だと承認するので、経と相反することは無いのである。

_{K13a1}「消滅を知ること、それはどうなるのか。」ということになるようなら、経の句の類だと執ったのである。

(2・1・2・2・2・2)第二(広説)に、(2・1・2・2・2・2・1)有余依が妥当でないことと、(2・1・2・2・2・2)無余依が妥当でないことの二つ。

{H13b3}(2・1・2・2・2・2・1)第一(有余依が妥当でないこと)、「『生が尽きたのである。』といふのは、未来の生に結生しないことを意趣{K13a2}なさったものなのであるが、現在の蘊が生じないことにについて述べたものなのではないのである。」というなら、そのとおりであるのなら、その場合に有余依も妥当でなくて、

もし、蘊が滅し_{H13b4}ないのなら、

煩惱が尽きて涅槃することにならない。(9ab)³⁰

経³¹に「この苦を残りなく捨断した」³²_{K13a3}と、現在の蘊が生じないことを思惟して、残りなく捨断したことから没することに至るまでお説きになり³³、未来の生に関わり_{H13b5}なさって、「これ以外の有(生存)は知らないのである。」³⁴とお説きになったので、未来の蘊だけに「生は尽きた」³⁵という言葉を_{K13a4}結び付けるのは妥当でないのである³⁶。

ଶ୍ରୀମତେ ଦୁଇ ଛକ୍ଷୁର୍ମସ୍ତକ-ଅର୍ଦ୍ଧାବାଦ-ଦୟା-ପ୍ରଦାନ-କର୍ତ୍ତବ୍ୟାକାରୀଙ୍କରୁ ଏହା ଦୟା-ପ୍ରଦାନ-କର୍ତ୍ତବ୍ୟାକାରୀଙ୍କରୁ ଏହା ଦୟା-ପ୍ରଦାନ-କର୍ତ୍ତବ୍ୟାକାରୀଙ୍କରୁ

༄༅· བྱତ୍ତିନ୍ଦ୍ରପୁର୍ଣ୍ଣବ୍ରାହ୍ମଣମହିକ୍ଷେତ୍ରପଦ୍ମନାଭ

藏文大藏经

ତେବେ ଶ୍ରୀମଦ୍ଭଗବତପାଠୀ^{KI3a5} କୃତ

ଝୁମା ପରମାଣୁ ପାରିଶ୍ରାମକାଲୀନ ପରିଷରାଜ୍ୟ ପାଇଁ ପରିଚ୍ଛାୟା ପାଇଁ ପରିଚ୍ଛାୟା ପାଇଁ ପରିଚ୍ଛାୟା

ସୁର୍ଯ୍ୟକୁ ପୂଜିବା ଗୁରୁତବ ହଦ୍ଦା ।

ସନ୍ଦର୍ଭ ପ୍ରକାଶକାରୀ ପରିମଳା ପିତା ।

ଲେଖଣ୍ୟମୂଳାବ୍ୟାପ୍ତିକ୍ରିୟା କ୍ଷେତ୍ରରୁ ହଜାରୀ କରିବାକୁ ଅନୁରୋଧ କରିଛନ୍ତି ।

ସନ୍ଦର୍ଭ

ନ୍ୟୁକ୍ତେରଶ୍ଵରପ୍ରମାଣେ । (9cd)

ସାହୀଙ୍କ ତମି କେଣ୍ଟିରୁ ଦେଇଲୁଗାଏନା ପାଇଁ ଯୁଗାପଦିରେ କେଣ୍ଟିରୁ ବାବୁ ଦର୍ଶନ କରିବାକୁ ପାଇଁ କରାଯାଇଛନ୍ତି ।

83

84 V. omits t

KOMITS |

86 ੴ ਸਤਿਗੁਰ ੴ

ପ୍ରକାଶକ

5. H5.

もし、その際、自相ある蘊が滅さざに有るのなら、(宗)煩惱が尽きて捨断されても涅槃を得たことにならなくて、(因)というのも、

蘊と執ることが有る限り、

その限り、その者に私と執ることが有る。³⁷

云々とお説きになった _{K13a5} から。

有余依の場合、正規の涅槃ではないと認めるなら、「我が生は尽きたのである。」云々によつて

「順説」というこの経は、

シャーリップトラが涅槃を

現証してから説かれたものなのだ。³⁸

とお説きになったもの、これを [チャンドラキールティは] どう _{K13a6} して引用したのか。シャーリップトラが、自分自身が涅槃を現証して _{H14a2} から、他の友に順説したことを説明しているからである。

「彼は煩惱が斥いたことを現証したが、蘊が斥いたことを〔現証したの〕ではないのである。」というなら、(宗)妥当でなくて、(因)というのも、「順説経」に「この _{K13b1} 苦が捨断された」とお説きになったから、またこの _{H14a3} 場合に普遍である名を特殊に結び付けることも妥当でないから。

「順説経」にどのように説かれたのかは、これそのもの(=『六十頌如理論』)に対するこの『註』には明らかだが、前に聖者(=シャーリップトラ)に対してアシュヴァジットが語ったそのシローカ³⁹には決して明らかでない _{K13b2} から。またその時、シャー _{H14a4} リップトラは見道を得た⁴⁰のだが、涅槃は後に長爪(ディールガナカ)梵志(パリヴラージャカ)に教主が法をお説きになった時に得た⁴¹と説いているから。更に有余依涅槃を見道から執ることは明らかになつていないのである。

(2・1・2・2・2・2) 第二(無余依が妥当でないこと)、

{H14a5} この者は、{K13b3} それも滅することになった際、

その際に解脱することになる。(9cd)⁴²

この者こそは、蘊、それも滅することになった際、その際に解脱・涅槃することを得たことになる者だと認めたとしても、未来の諸蘊の相続が断れた者、(宗)彼も _{H14a6} あなたの流儀では有り得なくて、(因)というのも、_{K13b4} 有余依の時に自相ある蘊が有るのでそう執ることが有るが、彼は煩惱と業を生じたあと、また蘊を受けるから。

९० श्रीशत्याका H श्रीशत्याका

91 ਕੈਵਾਨਾ K ਕੈਵਾਨਾ

۵۹

ରତ୍ନାକର

ତେବେ H କ୍ରେସ୍

କୃତ୍ସମାଧି H ୯

未来の生に観待してからも消滅を

知ること、それはどうなるのか、あり得ないのである。

(2・1・2・2・3)第三・自らに妥当であることに、(2・1・2・2・3・1)有_{K1365}為を聖者の等引が御覽にならない理由と、(2・1・2・2・3・2)眞實に數習することが「為すべきことは為されたのである。」という言説の対境だと教示することである。

(2・1・2・2・3・1)第一(有為を聖者の等引が御覽にならない理由)、そのように事物が自性を伴う_{H14b1}と論じる者に解脱は有り得ないと教示して、空性だと論じる者には有り得ると_{K1366}教示するために、

無明を有縁として生起したものを

正しい智が御覽になるなら、

生と滅もあり得る。

少しも所縁とすることにならないのである。(10)⁴³

[十二支の] 行など_{H14b3}十一のものに無明が直接・間接に何種類も、縁として有るので、無明を_{K14a1}有縁としてそれより生起したものを正しい聖者の智が御覽になった義である有為が始めに生じることと、最後に滅することもあり得て、戯論を少し_{H14b4}も所縁とすることにならないのである。

それは、行などは無明によって分別された_{K14a2}ものなので、迷乱した知覚に顕現するが、聖者の等引が御覽になったもの〔である知覚〕にではなくて、すなわち眼翳を有する者に顕現するもの、それは眼翳無き者が見たなら顕現し_{H14b5}ないとの同様である。

何であれ聖者の智が有ると御覽にならないことと、有ではない_{K14a3}と御覽になることは同一だと迷乱して、「(宗)縁起が有るのではなくて、(因)というのも、聖者の等引が御覽にならないから」と論じるの_{H14b6}は、「中觀派の見解、(宗)これは正しいものなのであって、(因)というのも、愚者が理解しないから」というのと相同なのである。

「見解が正しいのであるの_{K14a4}なら、愚者が理解することは相反するのである。」というなら、縁起があるとしても等引が御覽になることが何で必要なのか。自性であるのなら_{H15a1}御覽になる必要があるのだが、観待法であるのならそれが御覽にならないことに相反するからである。

このような似非正理に縁って「中_{K14a5}觀派に承認は無い」というなら、私も「表識派に承認は無い」_{H15a2}と論じよう。

「それ(=表識派)は事物の自相を承認したからである。」というなら、中觀派も縁起を承認したのである。

「(宗)それは迷乱の側だけで承認したが、自流で有るものでは_{K14a6}なくて、(因)というのも、不迷乱の知覚は聖者の等引なので、_{H15a3}それが御覽にならないからである。」というなら、それなら表識派でも隠蔽分は有自相ではないことに帰謬する。迷乱した知覚は現見なのにそれが御覽にないから。

「隠蔽分が有つても、_{K14b1} 現見が〔それを〕量らない」というなら、前者にも _{H15a1} 相同意である。

〔それを〕認める〔という〕なら、隠蔽分が却くので所遍である無我が却くことになるが、それ(=無我)が遍充しないものは有り得ないのであらゆる所知が却くから、何も承認し得るもののが無いことになるのである。

(2・1・2・2・3・2) 第二(眞實に數習することが「為すべきことは為されたのである。」という言説の対境だと教示すること)に、(2・1・2・2・3・2・1)そのものと、_{K14b2}(2・1・2・2・3・2・2)所了解である法界に _{H15a5} 不同の行相は無いと教示すること、(2・1・2・2・3・2・3)他者が分別したものは、〈為すべきことは為された〉という言説の対境として適さないことである。

(2・1・2・2・3・2・1) 第一(そのもの)、

眞実の現法は、涅槃

しつつ、為すべきことは為されたことなのである。_(11ab)⁴⁴

縁起生する生・_{K14b3}滅を所縁としない _{H15a6} 有余依の場合、眞実の現法、ほかならぬこの際に涅槃を得、また煩惱の捨断などにより為すべきことは為されたことなのであるのである。

〈も〉という言葉は、為すべきことは為された直後に生起した〈生は尽きたこと〉⁴⁵などを _{K14b4}, _{H15b1} 含むのである。

『註』に、「聖者シャーリップトラは涅槃を現見にしてから、この経を説いたのである。」⁴⁶とお説きになったもの、これこそが現法に涅槃したことが道理であることだとすべきだが、いざれも「生は尽きたのである。」云々と説いているのである。

_{H15a2} これ _{K14b5} も「眞説経」なるものが前に説いたとおりに明らかである。

(2・1・2・2・3・2・2) 第二(所了解である法界に不同の行相は無いと教示すること)、

もし、法知の直後に

これに特殊(属性)があるならば、_(11cd)⁴⁷

非常に微細な事物においても

生じると構想分別し、

善巧でない彼 _{H15a3} は

縁より生起した _{K14b6} という義を見ない。₍₁₂₎⁴⁸

もし、見道の苦法忍、それによって、法、すなわち縁起の真相である空性が現見に知られるので、その直後に所了解である法界に不同の行相は無いが、も _{H15b4} し、後者の智、これに自相ある _{K15a1} 無常など、不同・個別の行相の勝義諦として、[すなわち] 特殊(属性)として肯定的に断定されるべきものとして有るならば、非常に微細な事物である縁生の真相においても、声聞部派であるところの者が自相によって生じる _{H15b5} と構想分別し、すなわち承認したのなら、粗大 _{K15a2} なものである地などにおいては言及するまでもあるまい。

ଦେଶ'ଶ୍ରୀ'ପାତ୍ର'ହିନ୍ଦୀ'ବିଜ୍ଞାନ'ମୀ'ପାତ୍ର'ଶାନ୍ତି'କଣ୍ଠ'ଚତୁର୍ବୀ'କାଳ' ତ୍ରୈଦ'ଖଣ୍ଡ'କ'ବିଜ୍ଞାନ'ମୀ'ଦେଖିଲେ
ମୀ'ଶ୍ରୀ'ପାତ୍ର'ହିନ୍ଦୀ'ବିଜ୍ଞାନ' H156'ଶ୍ରୀ'ବିଜ୍ଞାନ'ର୍କ'ପାତ୍ର'ଶାନ୍ତି'କଣ୍ଠ'ନେଦ'ଯ'କମାପି'ନ୍ଦ୍ର'ପର-
ନ୍ଦ୍ର'ଶାନ୍ତି'କଣ୍ଠ' K154'ନ୍ଦ୍ର'ପର-ନ୍ଦ୍ର'ପର-ନ୍ଦ୍ର'ପି'କ୍ଷୀନ

དྲྲଙ୍ଗନ୍ଧିତୀଯାପାର୍ଶ୍ଵକୁହୃଦ୍ୟବ୍ୟାପିକି ଫ୍ରାଙ୍କିବ୍ରିକା ଦେଖିଯାଏବେ କୁହୃଦ୍ୟବ୍ୟାପିକି ହିନ୍ଦୁମାନଙ୍କାରେ କୁହୃଦ୍ୟବ୍ୟାପିକି ହିନ୍ଦୁମାନଙ୍କାରେ ।

ସାହିତ୍ୟର ପଦକାଳର ନାମାବଳୀ ଦ୍ୱାରା ପରିଚୟ କରାଯାଇଥାବେ ଏହା ନାମାବଳୀର ଲାଗୁ ହେଲା କିମ୍ବା କୁଣ୍ଡଳ ନାମରେ ଏହା ପରିଚୟ କରାଯାଇଥାବେ ଏହା ନାମାବଳୀର ଲାଗୁ ହେଲା କିମ୍ବା କୁଣ୍ଡଳ ନାମରେ

ଶ୍ରୀମା'ପ'ଶାବ୍ଦୀ'କୃଷ୍ଣା'ନେତା'ପ'ଦ୍ରଦ'ଷତା'ପ'ଦ୍ରଦ' । K15b4 ପଦ'କୃଷ୍ଣା'ପ'ନେତା'ପ'ପେଦ'ପର୍ବ

དང་ཤ'པ' རྩ୍ଶା' ଶ' ଫ୍ରେଂଦ' ସନ' କ୍ଷେତ୍ର' ପ' ହିନ୍ଦୁ' | ହିନ୍ଦୁ' ପ' ପ' ହିନ୍ଦୁ' ପ' ହିନ୍ଦୁ'

¹⁰¹ ደ. H ፈ
¹⁰² Homits መ

102 Homits ପ୍ରାଚୀ

それゆえに、学説を執る声聞という善巧でない者、彼らを有法として、(宗)あなたのとおりなら、見道者、彼は縁より生起したという義である〈縁生が_{H15a3}離戲論一味であること〉、それを見ないことに帰謬する。(因)法性に、不同にして個別の行相が順次_{K15a3}に断定されて有るから。

それゆえに、縁生の法性である空性・無自性、それに不同的な行相である区分は無いので、諦の現觀_{H16a1}は一剎那に尽きるのである。

「それなら、〔四諦〕十六剎那と建てたのはどうしてか」というなら、それは排斥を通じて建てたものなのであって、_{K15a4}〔四諦のうち〕あれこれの諦の空性を了解すること、その分のなかで、苦知と集知_{H16a2}などと、それらも知・忍と排斥することによる区分である。

(宗)そのような言説をお認めにならないのでもなくして、(因)というのも、軌範師チャンドラキールティが『中觀五蘊論』で説いているから。(宗)声聞_{K15a5}蔵の或るものには一剎那と_{H16a3}教示しているが、他のものには十五剎那と教示していることは相反しなくて、(因)というのも、相続に生じさせる次第と戲論に喜ぶ⁴⁹側で種々な言説で教示した程度に尽きるから。

「もし、そのとおりなら四諦を所縁として、無常行相など_{H16a4}十_{K15a6}六行相を有すると説くのはどうしてか」というなら、それらは資糧・加行〔道〕の位における所修習・相続を成熟させる道である程度のものなのだが、解脱道なのではなくて、そこでは決まって法無自性と了解する必要があるから。

「弥勒の〔五〕法でも、声聞_{K15b1}にも法無自性と了解することが有る、と教示しているのである。」と論じる聴聞の_{H16a5}小さな者ら、(宗)彼らは、〔ナーガールジュナ、アサンガの〕大車らの海のごとき教義の弁別に慣れ親しみ善巧していない粗忽な_{H16a6}だけの者なのであって、(因)というのも、弥勒の〔五〕法への隨順を伴う典籍の何れにも單なる_{K15b2}解脱と一切知者の道の二つとされた解脱道として無常など十六の行相だけを教示したが、無自性だと了解する_{H16a1}必要があることを何も教示していないから、またナーガールジュナ御父子の意趣を吉祥を具えたチャンドラキールティが註釈した諸典籍_{K15b3}に、それらを相続を成熟させる程度の道とお説きになったが、解脱道だとは何れにもお説きになつないので、彼ら偉大な者(=龍樹・無著)の流儀を十分_{H16a2}にこき混ぜて説いたことによって正法を十分に捨断した業障を積集した者なのである。

(2・1・2・2・3・2・3)第三(他者が分別したものは、〈為すべきことは為された〉)という言説の対境として適さないこと)に、(2・1・2・2・3・2・3・1)他者の立場が過誤を伴うことと、_{K15b4}(2・1・2・2・3・2・3・2)自己の立場に過誤が無いことである。

(2・1・2・2・3・2・3・1)第一(他者の立場が過誤を伴うこと)に、(2・1・2・2・3・2・3・1・1)始めが有ることに帰謬することと、(2・1・2・2・3・2・3・1・2)主張を_{H16a3}除去することを提示することである。

୫୫

ଶ୍ରୀମତୀର୍ଥାଦ୍ଵାରି ଦ୍ୱାରା ଲେଖାଯାଇଥାଏ ।
ଏଥାନ୍ତେ ଦ୍ୱାରା ପରିଚୟ କରାଯାଇଥାଏ ।
ଦେବି ହୁଏ ହୃଦୟାବଳୀ ଦ୍ୱାରା ପରିଚୟ କରାଯାଇଥାଏ ।
ଏଥାବଂ ସମ୍ମଦ୍ଦିଷ୍ଟ କୁଣ୍ଡଳୀ ଦ୍ୱାରା ।(13)

ସାହାନ୍ତ ପେ-ବୈଶିଶ୍ଵା-ରୁକ୍ଷ K156 ମନ୍ଦିରାବ୍ୟକ୍ତିପାଦ-ପରିଦ୍ୱାରା ଏହି ଦ୍ରିକ୍ତଦ୍ୱାରା ଦିଲ୍ଲୀ ଦେଖିଛନ୍ତି ।
ଏହା ବୈଶିଶ୍ଵା-ରୁକ୍ଷରେ ଦ୍ଵାରା ବୈଶିଶ୍ଵା-ରୁକ୍ଷ ଏହି ଦ୍ରିକ୍ତଦ୍ୱାରା ଏହାଙ୍କୁ ନାହିଁ ।
ଦ୍ରିକ୍ତଦ୍ୱାରା ବୈଶିଶ୍ଵା-ରୁକ୍ଷ ଏହାଙ୍କୁ ନାହିଁ ।
ଏହି ଦ୍ରିକ୍ତଦ୍ୱାରା ବୈଶିଶ୍ଵା-ରୁକ୍ଷ ଏହାଙ୍କୁ ନାହିଁ ।

H1666 ଶନ୍ତିଶାପକୀ ଦୈତ୍ୟଶ୍ରୀ

Klal କୁମାର୍ଯ୍ୟଦ୍ଵାରା ଦେଶପଦ୍ୟମ୍ ।
ଖୁଲୁକୁଳାର୍ଯ୍ୟଦ୍ଵାରା ସୁଧାର୍ଯ୍ୟମ୍ । (14ab)

ଯତ୍କଣେଷୁ ତିତ୍କୁ ବୈଶାଷିତକୁ

ସମ୍ବାଦୀ କେତେ ପରିମାଣରେ ଉପରେ ଆବଶ୍ୟକ ହେବାକୁ ନିର୍ଦ୍ଦେଶ ଦିଲୁଛି କି କେତେ ପରିମାଣରେ ଉପରେ ଆବଶ୍ୟକ ହେବାକୁ ନିର୍ଦ୍ଦେଶ ଦିଲୁଛି।

ସତିଶ୍ୟାଦର୍ଦ୍ଦ୍ରେଷ୍ମାପାତ୍ରେ ଏହିଦ୍ୱାରା କ୍ଷେତ୍ରରେ ବସନ୍ତର ପାଦରେ ଏହିପରିବାର ଏହିପରିବାର
ହେଲାଯାନ୍ତା ଏହିପରିବାର ହେଲାଯାନ୍ତା ଏହିପରିବାର ହେଲାଯାନ୍ତା ।

੫੫·੬·੩

ହେବୁ କେତେ ଦେଖିଲୁ ପରି ଗରୁ ଦ୍ୱାରା ।
ମୁଁ ବାହୁଦ୍ଵାରା K16a3 ଦୂର ସାଥେ ॥ (14cd)

ହେଉଥିବା ପାଦାର୍ଥରେ କଣ୍ଠରେ ଏହାରେ କଣ୍ଠରେ ଏହାରେ ଏହାରେ ଏହାରେ

ସନ୍ଦର୍ଭ

ଶ୍ରୀକୃଷ୍ଣାପାତ୍ରେ^{K164} ହୁଏ ।
ଶ୍ରୀକର୍ମାପାତ୍ରେ^{15ab} ହୁଏ ।

103

Read इस.

104 Komits J.

(2・1・2・2・3・2・3・1・1) 第一(始めが有ることに帰謬すること)、

煩惱が尽きた比丘の

——もし——輪廻が還滅したなら、

その開始を等覚者が

説かなかつたのは何の因でなのか。(13)⁵⁰

もし、智によって煩惱を尽させた勝義の比丘は、煩惱が尽きているので業を積集していないこと、それに關って、もし(輪廻が)自相ある蘊が流転しうることとなつたあとと——還滅する、すなわち尽くる)と汝が思うなら、〔輪廻の〕最後が有ることに帰謬するが、それを認めるなら最後は始めて觀待するので、輪廻、その始める開始が有るなら、〔等覚者が〕お説きになつてゐる必要があるので、等覚者が何の始めをも説かなかつたことに何の因が有るのか、(宗)それを御存知でないからではなくて、(因)というのも全知と承認したから。教示しない他の因も無いので、無いだけだから教示しないというのが道理である。

(2・1・2・2・3・2・3・1・2) 第二(主張を除去することを提示すること)、それ故に、

開始が有るなら、定めし

見となつたものを遍計する。(14ab)⁵¹

或いは、「過誤だけ」と誦えているのである。

もし、「始めの開始が有ることに帰謬することを認めるのである。」というなら、そのとおりなら定めしその前に他が先行しないので、無因かつ断見となつたものを遍計する、すなわち承認する必要があることだけになるのである。

(2・1・2・2・3・2・3・2・1) 第二・自己の立場に過誤が無いことに、(2・1・2・2・3・2・3・2・1) 縁生は離刃だと教示することと、(2・1・2・2・3・2・3・2・2) 自性が有るなら常に帰謬することと、(2・1・2・2・3・2・3・2・3) 無自性の喻例を教示することである。

(2・1・2・2・3・2・3・2・1) 第一(縁生は離刃だと教示すること)、

縁りつつ関係して生起(縁起)するもの、

それにおいて、前と終わりは如何に。(14cd)⁵²

縁起論者にこの過誤は無くて、すなわち、事物は觀待法だと論じる、そのとおりなら縁りつつ関係して生起(縁起)するもの、それにおいては、自性によって生じていないから、前、〔すなわち〕始めと終わりは如何ようになるのか、すなわち、何も承認する必要がないのである。

(2・1・2・2・3・2・3・2・2) 第二(自性が有るなら常に帰謬すること)、

前に生じたものがどうして

後から更にまた斥くことになろうか。(15ab)⁵³

これはまさしくそのとおりに決まって承認する必要があつて、さもないと、始めが有るだけに尽きず、常にもなるのであって、すなわち、もし前に自相によって生じたもの〔なら、それ〕がどういう理由で後から更にまた斥くことになろうか、^{K16a5} ということに常に帰謬する。自性が他に〔変化すること〕になることは有り得ないから。

¹⁰⁵ H inserts].

106

Read &.

^{III7a5}(2・1・2・2・3・2・3・2・3)第三(無自性の喻例を教示すること)に、(2・1・2・2・3・2・3・2・3・1)喻例を通じて略説することと、(2・1・2・2・3・2・3・2・3・2)【喻例】そのものを説明することと、(2・1・2・2・3・2・3・2・3・3)【喻例の】義を説明することである。

(2・1・2・2・3・2・3・2・3・1)第一(喻例を通じて略説すること)、

縁起して生起するもの、

それにおいて、前と終わりは如何に。(14cd)^{5・4}

自性によって生じていないから。それは説き終わったのである。

K16a6 前後の辺際を離れた ^{III7a6} ものである

趣は、幻術の如く顯現する。(15cd)^{5・5}

自性によって生じていないので、前後の辺際を離れたものは刹那も止まらずに趣くので趣、〔すなわち〕縁起生するもの、これらは幻術の如く無自性でありながら自性を伴つ ^{III7b1} て顯現する K16b1、すなわち欺く本性を有するのである。

幻術を知る者が、幻術の馬牛などにおいて前の辺際と後の辺際を了解することが不合理な様に、これにおいても不合理である。

(2・1・2・2・3・2・3・2・3・2)第二(そのものを説明すること)、

幻術が生起する際に、あるいは

消滅することに ^{III7b2} なるという際に、

幻術を知る者は、それに迷妄 K16b2 しない。

幻術を知らない者が十全に愛着する。(16)^{5・6}

詩句の最初の三つは瑜伽師の喻例で、第四は凡夫の喻例である。

〔幻術の〕演目には精通していない自性を有する者らは、幻術の〔作り出した〕少年、それらを、肉・血を ^{III7b3} 伴った少年と思念するなら、これら少年が生起、すなわち生まれたことになった時に際し、^{K16b3} 消滅、すなわち死ぬことになると執念する際に、その通りに幻術の自性を知る人々は、幻術が見えるその ^{III7b4} 場合にそのとおりに迷妄しない、すなわち執念しないが、幻術の自性を知らない演目の観衆らは十全に愛着、すなわち思念するのである。

(2・1・2・2・3・2・3・2・3・3)第 K16b4 三(義を説明すること)、

事物を陽炎と同様と

慧が見ることになった者は、

前の辺際や後の辺際に

^{III7b5} 見に全く汚染されることにならない。(17)^{5・7}

前半によって真相を了解する慧を、また後半によって利徳を教示しているのである。

ଅନ୍ତର୍ମାଣାଣୀ ହିସାପୁର୍ବ ତେର୍ଦିଛୁକାଳ୍ପନିକାରୀ ପିଲାଶ୍ଵରୀ ଅନ୍ତର୍ମାଣାଣୀ K166.H181 ହିସାପୁର୍ବ ତେର୍ଦିଛୁକାଳ୍ପନିକାରୀ ପିଲାଶ୍ଵରୀ

ଶୁଦ୍ଧ ପଥ ପଦାଶ ପାଞ୍ଚ ମ ଲୁହ ପୁରୁଷ ପାରେ ବାନ୍ଧିବ ଶୁଣୁ ପାନ୍ତିର ପାରେ ପିକର୍ତ୍ତା ।

ଶାନ୍ତିମୁଦ୍ରାରେ ଶାନ୍ତିମୁଦ୍ରାରେ ଶାନ୍ତିମୁଦ୍ରାରେ

କୁଣ୍ଡଳୀ ଶର୍ମା^{KI7al} ମହିଳା ପତ୍ନୀ ହର୍ଷା

५५. श्वेत

"ଯତ୍କଣ୍ଠେଷୁର୍ବୁଦ୍ଧିମୁଖୀ"

॥ ५८ ॥

੫੯੬ ਹੈਰਿਸ਼ ਪ੍ਰਸ਼ਾਸਨ 108

ପରେ'ମ'କବ'ଏନ'ମ'ମେଷ'ଶ୍ଵା ।(18)

ସନ୍ତିଶ'ପ'ବା ଶୁଣିବି ଦୂର'ଦୂର' ଯକ'ମାଣ'ଶି ଦୂର'ହ' ।

ଦ୍ୱାରା ଏହିକିମ୍ବାନୀରୁ^{Hi&es} ପାଇଲା ତିଥିରେ ଦ୍ୱାରା ଏହିକିମ୍ବାନୀରୁ^{Hi&es} ପାଇଲା ତିଥିରେ

ଦୁର୍ଧର୍ଷକୀ ଗ୍ରହଣଶର୍ମଦ୍ଵାରା^{K17} ପରିଚ୍ଛନ୍ନ ସାରା ଯାତ୍ରାରେ ଏହା ରେଖାରୀ ଯାତ୍ରାରେ ଦୁଃଖଶର୍ମଦ୍ଵାରା ହିନ୍ଦୁ ପରିଚ୍ଛନ୍ନ ହେଲା ଏହାରେ ପରିବର୍ତ୍ତନ ହେଲା ।

ଶନ୍ତିଶାସନକୁ ପାଇଯାକୁ ହେଲାମାତ୍ରଙ୍କାରୀ ଦେଖିଲାମାତ୍ରଙ୍କାରୀ

୫୫-ଶ୍ରୀଆ ପ୍ରକାଶମାତ୍ର-୫୫-ଶ୍ରୀଶାହିନ୍ଦୁ-ଗ୍ରାମ-କୁଳାଙ୍ଗାରୁ-ଶାନ୍ତିଶାନ୍ତି ।

ମୁଖ୍ୟମନ୍ତ୍ରୀ ପାଞ୍ଚମି କର୍ତ୍ତ୍ତାଙ୍କାଳେ ଶାଶ୍ଵତ ହାତରେ

藏文大藏经

དྲିଗ୍ଦଶ୍ମିନ୍ଦ୍ରିୟରେ ପାଇଲା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା

107

109

瑜伽者は**事物**、〔すなわち〕有為の残りなきすべてを幻術および**陽炎と同様**_{K16b5}と慧、〔すなわち〕等引の内証智が_{H17a6}現見に見ることになった者は、前の**辺際**における見や後の**辺際**における見である常断の見に相続が全く成熟され捉えられることにならないのである。

等引の所了解、それそのものが幻術のごときだ、と教示するものなのだが、等引_{K16b6, H18a1}の側において幻術のごときだ、と教示するものなのではないのである。

涅槃が幻術のごときだ、と理解するものは、言説の慧〔のこと〕なのだが、等引〔の慧のこと〕なのではないのである。

(2・1・3)第三・二辺の体の否定に、(2・1・3・1)妥当性の提示と、(2・1・3・2)教証との相反の_{H18a2}捨断である。

(2・1・3・1)第一(妥当性の提示)に、(2・1・3・1・1)箇所の提示と、(2・1・3・1・2)妥当性そのものと、_{K17a1}(2・1・3・1・3)結尾である。

(2・1・3・1・1)第一(箇所の提示)、

有為を

生・滅すると構想分別した者ら、

彼らは縁生の輪の

趣きを知らないのである。 (18)⁵⁸

詩節の二つと半分_{H18a3}によって善巧でないブドガラを教示してから、一つと半分によって誤失を_{K17a2}教示したのである。

顯現する程度のこと、**有為**を自相によって**生・滅する**ものとして**構想分別した**善巧でない者ら、(宗)**彼らは縁起生の**、始めと_{H18a4}中央と最後を離れた**輪の**ごとき**趣き**、すなわち流転の様態を知らない、すなわち了解してい_{K17a3}なくて、(因)というのも、自相によって成立したものに**生・滅**は有り得ないからだ。

(2・1・3・1・2)第二(妥当性そのもの)に、(2・1・3・1・2・1)一般の義(共義)と(2・1・3・1・2・2)支分の義である。

(2・1・3・1・2・1)第一(一般の義)に、(2・1・3・1・2・1・1)二諦の_{H18a5}定義と、(2・1・3・1・2・1・2)区分と、(2・1・3・1・2・1・3)数の決定と、(2・1・3・1・2・1・4)建立の決択である。

(2・1・3・1・2・1・1)第一(二諦の定義)、世俗と勝義_{K17a4}の二諦のうち、順次、言説の量の所量と、等引の内証智の_{H18a6}所量である。

(2・1・3・1・2・1・2)第二・区分に、(2・1・3・1・2・1・2・1)世俗〔諦〕と(2・1・3・1・2・1・2・2)勝義諦の二諦である。

(2・1・3・1・2・1・2・1)第一(世俗)に、(2・1・3・1・2・1・2・1・1)実〔世俗〕と(2・1・3・1・2・1・2・2)邪世俗の二つである。

(2・1・3・1・2・1・2・1・1)第一(実世俗)_{K17a5}は、四つの言説の量⁵⁹の所量である。

それも妨げ無_{H18a1}き六根の対境と、有境である。

(2・1・3・1・2・1・2・1・2)第二(邪世俗)、妨げを伴う根の対境・有境で、夢のなかの馬牛などは虚偽の外境義である。

111 ମାତ୍ରାଦର୍ଶକାରୀଙ୍କିଷ୍ଟିର୍କା^{K17a} ସନ୍ଦର୍ଭାକୁ ଏକାକିଷ୍ଟିର୍କା^{H18a} ପାଇଁ । 110
112 ପାଇଁ ପାଇଁ ।

ଦୁଇର୍ଦ୍ଧାରାର୍ଥାଦ୍ୟ ହଶିଦାମାରିବେ ଗୁରୁକୃଷ୍ଣାଚୁର୍ଯ୍ୟକ୍ରମରେ ମାତ୍ରାପିକରାଯାଇବା ଶୁଣାଯିବା ରୁଦ୍ରର୍ମୁଖରେ ହଶିଦାମାରିବେ ।

K17) एवं द्वादश द्वारा गुरुकृष्णान् पूर्णदेवता वस्त्राभासाद्य वस्त्राभासाद्य वस्त्राभासाद्य
परि द्वादश द्वारा गुरुकृष्णान् पूर्णदेवता वस्त्राभासाद्य वस्त्राभासाद्य वस्त्राभासाद्य
H18) पूर्णदेवता वस्त्राभासाद्य वस्त्राभासाद्य वस्त्राभासाद्य वस्त्राभासाद्य वस्त्राभासाद्य¹¹³
रथविषयाद्य विहर्वा¹¹⁴ विश्वाद्य¹¹⁵ विश्वाद्य¹¹⁶ विश्वाद्य¹¹⁷ विश्वाद्य¹¹⁸ विश्वाद्य¹¹⁹
विश्वाद्य¹²⁰ विश्वाद्य¹²¹ विश्वाद्य¹²² विश्वाद्य¹²³ विश्वाद्य¹²⁴ विश्वाद्य¹²⁵

羌藏族人「藏文」的發音，就是「藏文」的本音。在藏文書籍中，藏文的寫法是羌藏，藏文的發音是羌藏。

ଦେଖାଯାଏ କହିଲା ଗୁରୁ ।¹¹⁷ ସଦ୍ବୀଳ ଶତିଶ ଗୁରୁ କହିଲା ଦେଖାଯାଏ । ଦେଖାଯାଏ ଗୁରୁ ।¹¹⁸ କୃଷ୍ଣ ସଦ୍ବୀଳ ପରମାତ୍ମା ଦେଖାଯାଏ ।

ମୁକ୍ତିଶୀଳବିଦ୍ୟାରେ ପରିଚ୍ୟାତ ହେଲା ଏହାର ଅଧ୍ୟାତ୍ମିକ ପରିଚ୍ୟାତ ହେଲା

110

III 5'9' K59?

112

113 Komits.

114 K omits 5.

115

卷之四

116 H. ॥

117 कृष्ण

血肉を伴う馬牛は真実の _{K17a6} 外境義で思惟の側に觀待 _{H18a2} したものなのだが、事実としてなら一切が虚偽である。

蘊に対する淨樂常我の四つは世俗としても量の所量ではないので、基体不成にはかならないのである。

無常・苦・空・無我の四つは言説の量の所 _{H18a3} 量である。

_{K17b1}(宗)誰であれ、その両者は世俗としての有無が相応すると主張する者らは、迷乱の側だけで有ることが世俗として有ることの義だと思惟していて、他者の側だけで承認する必要がある世俗と、自らの流儀で承認する世俗 _{H18a4} の違いが不分明なのであって、(因)というのも、そのとおり(=妨げを伴う根の対境・有境)なのだととも、軌範 _{K17b2} 師チャンドラキールティが「そのようになりなりて、幻術である程度のものが残っているのである。」⁶⁰といひ、また「若干、幻術である程度のものが残っているのである。」⁶¹とお説きになったので、表記である程度、仮設された程度のものである世 _{H18b5} 俗は、どこにも否定されていないし、承認されたからだ。

「淨樂常我と自相 _{K17b3} ある事物などは見解によって理解されないので、若干のプドガラを悟入させる方便として他者の側だけで承認されたものを除き全面的に否定 _{H18a6} されたから、自らの流儀では唯世俗は有っても、世俗諦は無いのである。」というなら、そのとおりでも全くなくて、妨げ無き六 _{K17b4} 根の所取境である色・声など、それは中觀派自らの流儀の世俗諦なのだが、世間 _{H19a1} の側では勝義諦でかつ、聖者の後得では諦の顯現は有っても「諦である。」という考えは無いので唯世俗として建立されたものである。

聖者らも _{K17b5} 二諦の区分をなすのは、それらが世 _{H19a2} 俗諦だと承認していることなのであって、〔例え〕ナーガルジュナのごときだ。

「そのとおりなら、聖者も諦執を有する者になるのである。」というなら、眼翳を有する者に毛髪が垂れる、と分別するプドガラの眼に毛髪の顯現が何で必要か。世俗諦だと _{K17b6} 了解するから、_{H19a3} 虚偽なること幻術のごとしと了解する者なのだが、諦と承認している必要はないのである。

論じられるとおりのもの、それによってこそ、世俗諦を諦が遍充することが承認されたので、顛倒だと論じたのである。

「それらの知覚の対境である共通の定義基体を承認したので、_{H19a4} 義としての法を承認したのである。」というなら、それらも唯言説のものなのだが、そのとおりでないのなら、『明句論』に「世間の者の勝義、それが聖者の世俗」⁶²と建てたことも道理でないことになるのである。

संक्षेपम् विकृत्या विद्युत्तमाम् विद्युत्तमाम्¹¹⁸ विद्युत्तमाम् विद्युत्तमाम्¹¹⁹ विद्युत्तमाम् विद्युत्तमाम्¹²⁰ विद्युत्तमाम् विद्युत्तमाम्¹²¹ विद्युत्तमाम् विद्युत्तमाम्¹²² विद्युत्तमाम्¹²³

॥१५॥

दर्शनग्रुह्यदाकृत्यामवैद्यन्ति ॥¹¹⁸
दर्शनग्रुह्यदाकृत्यामवैद्यन्ति ॥¹¹⁹

विश्वासि ग्रन्थम् दृश्यकृत्यामवैद्यन्ति ॥¹²⁰
विश्वासि ग्रन्थम् दृश्यकृत्यामवैद्यन्ति ॥¹²¹
विश्वासि ग्रन्थम् दृश्यकृत्यामवैद्यन्ति ॥¹²²

गुरुकृत्यामवैद्यन्ति ॥¹²³
दृश्यकृत्यामवैद्यन्ति ॥

विश्वासि विश्वासि विश्वासि विश्वासि ॥

दृश्यकृत्यामवैद्यन्ति ॥¹²⁴
दृश्यकृत्यामवैद्यन्ति ॥¹²⁵
दृश्यकृत्यामवैद्यन्ति ॥¹²⁶
दृश्यकृत्यामवैद्यन्ति ॥¹²⁷

विश्वासि विश्वासि विश्वासि विश्वासि ॥¹²⁸
विश्वासि विश्वासि विश्वासि विश्वासि ॥¹²⁹
विश्वासि विश्वासि विश्वासि विश्वासि ॥¹³⁰
विश्वासि विश्वासि विश्वासि विश्वासि ॥¹³¹

विश्वासि विश्वासि विश्वासि विश्वासि ॥¹³²
विश्वासि विश्वासि विश्वासि विश्वासि ॥¹³³

विश्वासि विश्वासि विश्वासि विश्वासि ॥¹³⁴
विश्वासि विश्वासि विश्वासि विश्वासि ॥¹³⁵
विश्वासि विश्वासि विश्वासि विश्वासि ॥¹³⁶

¹¹⁸ K omits †.

¹¹⁹ K omits †.

¹²⁰ ह् H शु

¹²¹ K दा

¹²² कृष्णकृष्ण H कृष्णकृष्ण

¹²³ देव H देव

¹²¹

四つの言説の量の所量も、凡夫ら _{H19e5} は諦だと思い込んでいて——二 _{K18a2} 諦の区分に善巧なる異生と聖者らは虚偽だと御覽になるので——虚偽として住するから、基体不成の過失は無く、「中觀派には誰であれ承認は畢竟無であることを証 _{H19e6} 拠として、ナーガールジュナがそのように論証するのである。」と論じる者らは学説の区分を _{K18a3} 為さなかつたなら麗しいのである。

或る者が

全ての事物は——実・偽を見ることで

獲得された事物である——二つの体を保持することになる。⁶³

という典籍の義を了解せずに、「外と内の事 _{H19e1} 物、これらを聖者は勝義諦と御覽になり、凡夫は戲論と御覽になっているのに、その二者を _{K18a4} 超越した権能が強い〔聖〕者にとっては、これらは中の勝義諦である。」と論じる者、(宗)彼は聖者たるフドガラを誹謗していて、(因)というのも、経に、

世俗、それを勝義と _{H19e2} 論じる

彼らは錯誤した慧を具えている、と知るべきだ。⁶⁴

という過誤を聖者に強いているから。

それゆえに、その典籍(=『入中論』)の義 _{K18e6} は、「聖者はそれらを無自性なるものとして獲得し、凡夫はそれに反して獲得したので、聖者が獲得した無自性が _{H19e3} 勝義諦なのだし、外・内〔の事物〕が世俗諦なのだが、凡夫が獲得した特殊な法である自相は世俗としても有り得ないのである。」ということである。

{K18e6} 「『少しも見えるものが無いことが眞実が見えることである。』とお説きになつてゐるので、無自性を獲得することは妥当ではないのである。」{H19e4} というなら、それは、無自性を了解するなら——清浄な眼における毛髪の如く——顕現するあらゆるもののが没していく見えないことをじて了解すると——および瓶が有るなら所縁と _{K18b1} しるのに、瓶が所縁とされないことより瓶の無を了解すると——建てるものなのだが、無自性は肯定的に断定して了解すべくも無いものなので了解の様態を教示するものなのだが、何も見えないこと、それらを「眞実が見える」と建てるものではなくて、そのとおりなら石女の子にも眞実が見える、という言 _{K18e2} 説を何故に仮設しないのか。

(2・1・3・1・2・1・3) 第三(数の決定)、量、それ _{H19e6} について、言説の量と勝義の量の二つに決定しているので、その対境、それについて二諦に決定しているものなのである。(2・1・3・1・2・1・4) 第四(建立の決択)、基・道・果がどのようになるのかによって知るべきで、それも「(宗)顕現する程度のもの、これは有 _{K18e3} 法として無自性 _{H20a1} で、(因)といふのも縁起なのだから。」という帰謬論証、これに二諦とも満たされていて、証相として執られたものが世俗〔諦〕で、かつ法として執られたものが勝義諦である。

ଦ୍ୟାୟକୁରୁତ୍ସମ୍ବନ୍ଧାତ୍ମିକାତ୍ମକାପରିବର୍ତ୍ତନାରେ ଶର୍ମାଜୀବିନ୍ଦୁମାତ୍ରାଙ୍କିରଣାରେ ଅନୁଭବ ହେଲାନ୍ତି ଏହାରୁ ଶର୍ମାଜୀବିନ୍ଦୁରେ ଅନୁଭବ ହେଲାନ୍ତି।

ଶ୍ରୀଦୁର୍ଗାରୂପାଦପ୍ରତିଷ୍ଠାନାମାବାହୀନୀ ଶ୍ରୀକୃଷ୍ଣାମାନାଦିକୁ ପ୍ରତିଷ୍ଠାନ ଦେଖିଲୁଛି ।

西藏自治区“民族团结”旗帜上印有“西藏”二字，K1858号“民族团结”邮票背面印有“西藏自治区”字样，H200号“西藏自治区成立三十周年纪念”邮票背面印有“西藏自治区成立三十周年”字样。

ସାହୁରିବୀଷମ୍ବନ୍ଧୁମୁଦ୍ରା । ୧୫୯

ଦ୍ଵାରା ପଦିତ ଏକ ସମ୍ବନ୍ଧରେ ଆଶୀର୍ବାଦ ଦିଲ୍ଲିରେ ଥିଲା ।

ଶିଖନ

ସାହୁ-ପାତ୍ର-କ୍ଷେତ୍ର-ଶାସ୍ତ୍ର-ଯମନ-ଦ୍ୱାରା-ଦ୍ୱାରା-କ୍ଷୁଣ୍ଣ-ଗୁରୁ-ଦ୍ୱାରା

ମୁଦ୍ରାରେ କୁଣ୍ଡଳିକା ଶବ୍ଦରେ ପରିଚୟ

ସକ୍ରିୟାଦର୍ଶକ ପରିମାଣ କରିବାକୁ ପରିଚାଳନା କରିବାକୁ ପରିଚାଳନା

କୁପାଦି-ଘର-ହର-କୁ-ବକ୍ଷଦି-ଶ-ରେଖ-ବକ୍ଷଣ-କୁ-ଦେଖ ॥

ବୈଶାଖିନୀ K19al

ସାହୁଶ୍ରୀକୁମାର୍ଯ୍ୟାବନ୍ଦିତବାପ୍ରକାଶକୁ^{H20a} ଏବଂ କୁମାର୍ଯ୍ୟାବନ୍ଦିତବାପ୍ରକାଶକୁ^{H20b} ଏବଂ

ମୁଦ୍ରଣ ପାତା ୧୫୩

ସବୁଟି ଦକ୍ଷିଣାକ୍ଷେତ୍ରକା ।

ପରିଷାର'ପରି'ପଦ୍ମର'ପ'ପବି'ପ' H₂O₂କୁଣ୍ଡା ।

ਤ੍ਰਿਦੁਆਨ ਪ੍ਰਕਾਸ਼ ਬੰਸਾਂ ਵਿਖੇ

ବୈଶ'ରଦ'ପ'ପଦ୍ମକ'ପାତି'କ'ରଷଦ'ଧାରି'ଲେଶ'ପ'ମେଦ'ଧର'ପା

ହେଲା କୁରା ଶ୍ଵର ପାଦି ସେନା ରାଜା ।

ସନ୍ଦର୍ଭ ପ୍ରକାଶକ ମହିନା ।

କୁଣ୍ଡଳ ପାତା ଗୁରୁ ଦେଖିଲା ।

藏文：**藏文**

^{123a} Komits].

そのうち、(宗)縁起を了解する慧が、無自性と了解することの方便_{H20a2}となるものなのであって、(因)というのも、所_{K18b4}証を了解する慧は、証相を了解することより生じる必要があるから。

前者の慧、それに数習したことによって、道の場合においては福徳の資糧となるが、後者〔の慧〕に数習したことによって智の資糧になるもののであり、広汎に_{H20a3}は六波羅蜜多である。

縁起に包摂された如量の_{K18b5}所知を覆障する有染汚でない無知を——無自性と了解することによって——除去するものである慧、ほかならぬそれに、仏地への方便に数習することがならせる_{H20a4}から、その二者は方便と方便所生なのであって、『入中論』に、

言説諦は方便となった_{K18b6}もの、かつ

勝義諦は方便所生となったものであって、⁶⁵

と、また

世俗・真実という広大で白い翅が咲がることとなった

鷲鳥の王、その方は、衆生という鷲鳥_{H20a5}の

前面に位置して、善の風に依り

勝者の功德海の最上の彼岸に行く。⁶⁶

とお説きになった_{K19a1}のである。

言説の場合に、「他の側」あるいは「迷乱の側」という語句を述べずに建立する無知な者、彼らは——〈熱の触〉と〈冷の触〉の様に承認した——二_{H20a6}諦を方便と方便所生として建てるとは不可能だし、(宗)勝義の建立が不可能であって、(因)というのも、勝義_{K19a2}の建立をなすなら世俗は有りはないと、石女の子の様に承認した_{H20a1}から。

その流儀は、語句としてはどのように述べていても、空の義は畢竟無だとお説きになっているので、四聖諦が適合しないという帰謬の主張に結着する必要があるものなのである。

聖者ナーガールジュナ_{K19a3}は、

もし、この全てが空でないなら、

.....

四聖諦_{H20a6}は

汝にとって無に帰謬することになる。⁶⁷

と自らに四諦が適合しないという過誤は無いと教示し、

諸法の空、これを知つてから、

業と果を教示する者は、

驚異よりもこれは驚_{K19a4}異で、

希有よりもこれは希有だ。⁶⁸

_{H20b3}と、二諦を一つの量の側に積集させ得なくとも、一つの基体の上に積集させ得るのであって、色・声の如きだ。

བླକ୍ଷ୍ମୀ བୁଦ୍ଧ དୱାରା ହେଲ୍ପିଦିଲୁ ଏହା ଶବ୍ଦରେ ଶବ୍ଦରେ ବୈଶାଖ ଦିନ ହାତରେ ଥିଲା । ଏହାର ପରିମାଣ କିମ୍ବା ଅଧିକ ହାତରେ ଥିଲା । ଏହାର ପରିମାଣ କିମ୍ବା ଅଧିକ ହାତରେ ଥିଲା ।

‘**ଶ୍ରୀରାଧାର୍ମକୁଣ୍ଡଳୀ**’^{K19c} ପ୍ରତିକର୍ମଦର୍ଶକାରୀ^{H21a} ହେଉଥିଲା^{H21b} ଏହାରେ ପ୍ରତିକର୍ମଦର୍ଶକାରୀ^{H21c} ହେଉଥିଲା^{H21d} ଏହାରେ

124
ଟି H ଟ
125 ସମ୍ପର୍କ K ସମ୍ପ

それによって、知覚に観待しない善法を承認することにも全くならず、世俗は、巻き上げられた縛を蛇と仮設_{K19a5}した如_{H20a4}く分別の執り方の無味乾燥な唯名なものなのだし、それ自らの仮設基体と同・他の何れとしても成立していないものなので、愚昧な人には牛と仮設したときに角の長短の伺察が働くかない様に、因果に同・他以外の伺察は働く_{H20b5}ないものなのである。

更にまた、(宗)その程度に迷乱して伺察したときに、世俗が無になると思わなくて、(因)というのも正理の側で成立していないものなのだが、(宗)〔帰謬派による〕世俗の不共の理解とは、あらゆる戯論の否定に随って獲得されたからで、(因)というのも縁_{H20b6}起を幻術と理解することは、諦の戯論が去いたことに_{K19b1}観待するから。

伺察してから獲得された空性を「知覚が作為した空だ。」という或る者と、「過分な伺察は過失なのだ。」と語る他の者ら、彼らは空性の理解の相続が長く捨断されて_{H21a1}いて、伺察してから獲得されたものは、前に空ではなかったものが空として新たに獲得されたもの_{K19c2}なのではなく、そのとおりなら、瓶を製造した様に、真相ではないものを〔製造して〕獲得したので、顛倒慧になるし、空性を知見によって作為したことになるが、所_{H21a2}否定が前に有ることを否定していても、瓶を壊滅させる分銅の様に、空性が事物を壊滅させるものに_{K19c3}なる必要があるのである。

それゆえに、縁生に対して知覚が執るあらゆる垢を濯ぐために、他辺に有り得るあらゆる疑懼を伺察する_{H21a3}必要があるので、疑懼の限りが断たれない間は、繰り返し繰り返し伺察する必要があるものを伺察しただけ、それだけ決定が獲得されることになる_{K19b4}から、「有を肯定する必要はない、無は肯定不可能だ」という類いの語句に縁って、量による否定・肯定を捨断すべきで_{H21a4}なくて、それは否定・肯定が義に有ることを否定するものなのだが、量による否定・肯定を否定するものなのではなくて、そのとおりなら正理の論書(論理学書)を著述_{K19c5}して何をなそうか。

更にまた、或る者が「顕現する程度のものも否定すべきである。」と論じるのは、その見解だけで悪趣の_{H21a5}因を為すので、(宗)解脱を欲する者らは全面的に捨断すべきで、(因)というのも、否定は可能だが否定する必要がないものを否定したなら過失が有るから。

顕現の能否定である量が無いなら、能_{K19c6}否定が無いので否定不可能だという立場を承認したことになるが、(宗)〔能否定が〕有るなら、_{H21a6}真実も所否定になるのであって、(因)というのも、それも顕現する程度のものを超えていないから。

それゆえに、顕現を否定すると承認したし、能否定も否定すると承認したことによって、自らの語句と相反することになるが、_{K20a1}(宗)否定したことには必要性も無くて、(因)というのも、諦_{H21b1}の戯論を切断したことによって、それに数習するときに自ずと滅したことになるから。

(宗)〔それらを〕否定したなら過失が有って、(因)というのも福徳の資糧を積集するのが不可能だから。

126 H. विजय

127

道の所否定と証相の所否定の違いが不分明な _{K20e2} 中觀派〔を哀れんで〕、彼に帰命する _{H21b2} のである。

それゆえに、(宗)否定する必要がある諦が否定可能なことを否定したなら〔その中觀派には〕功徳が有って、(因)というのも諦と取ることによる一切の過誤が有るから、かつ(因)〔その諦が〕有るなら、正理により所縁としうるのに正理による觀察に堪えないから、(因)それが無いと了解する _{K20e3, H21b3} ことより、輪廻の根本が斥けられるから。

「(宗)諦執は所否定なのだが、諦は所否定なのではなくて、(因)というのも畢竟無なのだから」と論じる者、彼にも畢竟無の決定(理解)は無い、と〔我々に〕了解されるのは、(宗)量の否定・肯定の多くの義を〔我々が〕理解することに尽きていて、(因)というのも諦執を否定するの _{H21b4} にはその執の対境(=諦)は畢竟無だと了解する _{K20e4} 必要があるからである。

それゆえに、「一切法は分別によって仮設された程度のものだ、と自流に承認されたなら縁生は有りえないのに、〔にも拘わらず〕縁生が有ると承認したときには究竟の墮罪になるので、〔一切法が〕有ると建てえ _{H21b5} ない」と論じる者、彼が、自分自身は『現觀莊嚴論』に _{K20e5} 説かれた十六邪分別^{6,9}に安住しているのに、軌範師バーヴィヴェーカなどの大車らを非難するのは、己自身を残害するだけに尽きるのである。

_{H21b6}(2・1・3・1・2・2)第二・支分の義に、(2・1・3・1・2・2・1)生辺を否定することと、(2・1・3・1・2・2・2)滅辺を否定することである。

_{K20e6}(2・1・3・1・2・2・1)第一(生辺を否定すること)、「自相による生を承認したことと、縁生はどうして相反するのか」というなら、

あれやそれに縁り生起するもの、それは、

自体として生じたものなのではない。

自 _{H22a1} 体として生じてないもの、

それを「生じる」とどうしているのか。(19)^{7,0}

あれやそれの因と縁に縁って生起するもの、それは、自体として自 _{K20e1} 性により生じたものなのではないのである。

何故にというなら、〔それが〕因の前に有るなら因に観待せず、生じる前に無い _{H22a2} なら、生じた時にも映像の如く偽りになるが自相として成立したものに何でなろうか。

(宗)自体として自性により生じてなくとも、生じる程度のこと _{K20e2} は有って、(因)というのも「色が生じたのである。」という言説が見えるから。

_{H22a3}「(宗)それ(=生じる程度のこと)が有るなら自相によって生じることも有って、(因)というのも一切の仮設は実物を所依とするものなのだからである。」というなら、自事體として自性により生じなかつたもの、(宗)それを「自相により生じたのである。」とどう _{K20e3} して述べようか、(因)というのも他 _{H22a4} 体として生じることは如何なる時も有り得ないから。

ସନ୍ତିଷ୍ଠାନୀ

ଶ୍ରୀବିଦ୍ଯାତ୍ମକ ପାଠୀ ।
ବିଦ୍ୟାତ୍ମକ ପାଠୀ ।
ବିଦ୍ୟାତ୍ମକ ପାଠୀ ।
ବିଦ୍ୟାତ୍ମକ ପାଠୀ ।

ଶ୍ରୀମଦ୍ଭଗବତ୍ H22b2

୮. ପାତାରେ କିମ୍ବା କିମ୍ବା

କେ'ଯନ୍ତରାପାଦମିଶ୍ରହୃଦୀର୍ଥୀ ॥ (21ab)

དང-འ-វි-। ພ-ප-හ-ද- ད- ཤ- ས- མ- བ- ན- ཁ- ག- ང- ཉ- ཈- ཊ- ཋ- ཌ- ཌྷ- ཎ- ཏ- ཐ- ད- པ- ཕ- བ- བྷ- མ- ཙ- ཚ- ཛ- ཕ- བ- བྷ- མ- ཙ- ཚ- ཛ-

ગુ'ણ'દ્વા'ત્રે'કૃષણ' K2la3 મી'દ્વા

ଓঁ বিদ্বৎসু শব্দে ক্ষণা রূপ পিৰা ।

ଅଶ୍ରୁମାତ୍ରିଷ୍ଟନ୍‌ଦ୍ୱୟାମାନ୍‌ପାଇଁ ।

西藏文書·藏文書·藏文書·藏文書·^{H226} 藏文書·藏文書·藏文書·藏文書·藏文書·¹²⁰

१२८

ଦୟାରୀ ପାଇଁ ଦୟାକୁ ସମ୍ମାନ ଦିଲୁ । (21cd)

127a

128

129

(宗)「自相により生じることが無いなら、生じる程度のことは無いのである。」と論じる者、彼は上下〔の記述〕を良く観察していないくて、(因)というのも撰義の箇所にも「正理により伺察された生は無い」と、また尽K20b4辺をH22a5否定する箇所にも「尽きることは無自性だ」とお説きになったから。

(2・1・3・1・2・2・2)第二(滅辺を否定すること)、

因が尽きたことより寂滅することを

「尽きた」と縁じる者が、すなわち
自性によっては尽きていないもの、

それを「尽きた」とどうして述べるのか。(20)^{71 72}

(宗)諸事物が住するH22a6のは能住の縁K20b5に依拠して、(因)というのも住する縁が無いなら消滅することになるから。

それゆえに、能住の因たる布・油などが尽きた、すなわち滅したことより、生起した油灯の光が尽きた、すなわち滅したことである寂滅を、「尽きたものか滅したH22b1もの」と縁じる者が、すなわち尽きたものである因に觀待するところの、K20b6自性によって尽きていないもの、それを「尽きたのは自性としてだ」とどうして述べようか、すなわち、自性によって尽きていないもの、それを他の如何なる体によって尽きたと建立しようか。

(2・1・3・1・3)第三・結H22c2尾、

そのように何も生じることは無い、

何も滅することにならぬのである。(21ab)⁷³

そのK21a1ように正理によって伺察したときには、何も自・他の体によって生じることは無いし、自・他の体によって何も滅することにもならなくて、すなわち「瑜伽する者にとって何H22b3も所縁は無いのである。」という義である。

(2・1・3・2)第二・教証との相反の捨断に、(2・1・3・2・1)生滅をK21a2お説きになったのは未了義だという教示、(2・1・3・2・2)生滅に縁つて無自性と了解する様態、(2・1・3・2・3)執念を有する者は了解しないという教示、(2・1・3・2・4)信解する者らが了解するH22b4様態である。

(2・1・3・2・1)第一(生滅をお説きになったのは未了義だという教示)、もし、「そのように生滅の二つが有り得ないなら、世尊が

ああ、諸行はK21a3無常、

生じ滅するという法を有するものなのだと、

生じてから滅することになるもの、

それらは寂滅為楽だ。⁷⁴

と——生滅が無いなら、涅H22b5槃を得る方便としてお説きになることが道理でないのに——お説きになっているから、「(生滅は) 有るのである。」というなら、

生・滅の道⁷⁵は

必要な⁷⁶義として教示されたものである。(21cd)⁷⁷

ଶ୍ରୀରାଧାକୃତିପାଦାବିରାଣୀପଦାକୃତିପ୍ରମାଣ

ଦ୍ୱାରା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା

শান্তিসংবলদুর্দণ্ডনাম্বৰ H_{23a2} শম্ভু ঘৃত র্বা।

ଦ୍ୱାରା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା

३५

ମୁଣ୍ଡାମୁଣ୍ଡାମୁଣ୍ଡାମୁଣ୍ଡା

ଶ୍ରୀହଣ୍ଡିଷ୍ଟାମୁଖୀଶ୍ଵର

ଦୁଃଖ'ପରି'କ୍ଷଣ'ଗୁହ୍ନ'କ୍ଷଣା'ଧନ'ବସନ୍ତ । (22)

ଶ୍ରୀମଦ୍ଭଗବତ୍^{122a}ପ୍ରକାଶନାଳ୍ୟରୁ ଏହା ପରିଚୟ ଦେଖିଲୁଣି ଶ୍ରୀମଦ୍ଭଗବତ୍^{122b}ପରିଚୟ ଦେଖିଲୁଣି ।

ସାହିତ୍ୟକାରୀ

“**ଶତାବ୍ଦୀରେ କିମ୍ବା କିମ୍ବା**”

藏文大藏经

K2lb3 ༜' མ' བ' ག' ར' བ' ཕ' ད' བ' ཉ' ||

ମୁଖ୍ୟାନ୍ତିର୍ଦ୍ଦ୍ୱାରୀଙ୍କୁ ପାହାଯାଏ । (23)

藏文：**ཇི་སྒྲོ་པ୍ରଦ୍ୱାୟ ପାରି ଦେଇଯାଇଲା** ।

K216-28. དྲୟାନାମ୍ବୁଦ୍ଧ ପାଦ ଦ୍ୱାରା କହା ଥାଏ ଯେ କୃତି ପାଦ ଶୁଣି ହେବାପାଇଁ ତୁ କର୍ତ୍ତବ୍ୟ ପାଦ କରିବାକୁ ଛାପିବାରେ ପରିପାଳନ କରିବାକୁ ପାଦ ଶୁଣି ହେବାପାଇଁ ତୁ କର୍ତ୍ତବ୍ୟ ପାଦ କରିବାକୁ ଛାପିବାରେ ପରିପାଳନ କରିବାକୁ ।

131

2

57

100

130

131

^{k21a4} 生・滅は——自体により成立したあとで——お説きになったものなのではないが、世間の勝てはいない^{H22a6} 道に進む者は、これを真実(=自体)に結び付けようと思う者なので、生・滅の道⁷⁸、これを教示することによって真実を了解可能だから、真実を了解する方便として必要な義⁷⁹として^{k21a5}教示されたものである。

生滅を教示する経は未了義ではあっても^{H23a1} 言葉通りのものなので、(宗)自流においては生滅を承認していて、(因)というのもそれを承認することと基体たる空が一つに撰まるから。

そのようではないのなら、縁起を諦が遍充することになるのである。

(2・1・3・2・2) 第二(生滅に縁って無自性と了解する様態)に、(2・1・3・2・2・1) そのものと、^{H23a2} (2・1・3・2・2・2) 利徳である。

(2・1・3・2・2・1) 第一(そのもの)、^{k21a6} 「生滅を教示することに何の必要・目的があるのか」というなら、

生を知ることで消滅を知る。

消滅を知ることで無常を知る。

無常たることを覚知することで

正法も了解することになる。(22)⁸⁰

凡夫が女^{H23a3} 人に貪ることを斥けんがために、世尊は生^{k21b1} 滅を教示する。(宗)そのように生を知ることで消滅も知ることになって、(因)というのも消滅は生を根本として有するものなのだから。

消滅を知ることでそれと同一義である無^{H23a4} 常を知ることになり、三界の無常の火が燃える⁸¹ 内に住すると知るので、それ^{k21b2} を超えたいと思うし真実に入ることを知るので、〔世尊が生滅の教示によって、間接的に〕 正法、涅槃と異ならない無戲論、^{H23a5} 空性をお説きになっていることを了解する、すなわち通曉することになるのである。

(2・1・3・2・2・2) 第二(利徳)、

縁起生は

生・滅が捨断されていると

^{k21b3} 知ることになった者ら、彼らは

見となった有(生存)の海を渡る。(23)⁸²

説かれた通りの次第(順序)で^{H23a6} 真実を探求することに熱中する最上の慧を具えた者らで、縁起生は自性によって生・滅することが遮断された、〔すなわち〕 常断の見により住することを保持しない^{k21b4} と知ることになった者ら、彼らは——常断の見となつた^{H23b1} ものこそが有(生存)の海なので——見となつた有(生存)の海を空性の了解という船によって決定して渡ることになるのである。

ସମ୍ବନ୍ଧରେ

ଶ୍ରୀଶ୍ରୀକୃତ୍ସନ୍ଦରାପଦାଚକ୍ରୀ

ཡੰਦ-ਦੰਦ-ਗੇਂਦ-ਸਾ-ਭੁਰ-ਲੇ-ਘੱਣ

ନେଶା'ପଣ' K21bs ରୁକ୍ଷ-ମୁଦ୍ରଣ'ଦୟା'ଶୁନ୍ତ-କୁମାର ।

H_{23b2} ମୁଣ୍ଡ-ଶିଖରାଶି-ପଞ୍ଚନୀତି-ଦୟା । (24)

“**ବ୍ୟାପକୀୟାକୁମାରୀଶ୍ଵର**”^{୧୨} ଏହାରେ କୃତ୍ୟାଗ୍ରମ୍ ଅନୁଷ୍ଠାନିକ କରାଯାଇଛି।

੫੫

"ବୁଦ୍ଧଶାଖାକ୍ଷରଣାପାତ୍ରକୁଳନାମିଶାନ୍ତି ।

ହରାପ୍ରକାଶପତ୍ରିକା

ଶାନ୍ତିକାଳେ ପରମାଣୁକାଳେ

॥ २५ ॥

ଶତାବ୍ଦୀ

॥**ଶକ୍ତା'ପିଦ'ଦମୀଶା' H_{24a3}'ଶ'ର୍ଦ୍ଧ'ଶ'ପିନ୍ ।**

କୁଷାମ୍ବେଦ୍ରିତେଶବନ୍ଦୀପାମ୍ବେଦ୍ରୀ ।

ବ୍ୟକ୍ତିଗତ ପରିମାଣରେ

ସମ୍ବନ୍ଧରେ କିମ୍ବା କିମ୍ବା । (26)

132

133 श्री हरिहर

(2・1・3・2・3) 第三(執念を有する者は了解しないという教示)、
 異生という、事物が我を有し、
 有・無だと顛倒する
 過誤によって _{K21b5}煩惱の支配するところとなった者らは、
_{H23b2}自らの心により欺かれることになる。(24)⁸³

「業のとおり、かつ煩惱のとおり、その通りにそれぞれ異なる生処に趣くので異生という——蘊と異ならずに我だと執ることによって、事物が我を有するか、あるいは事物は法我なのでそれを異生は我 _{K21b6} _{H23b3}として具えているから、事物が我を有するか、あるいは事物に対する諸々の執念が事物が我を有することなのだが——〔事物は〕空性だと見ることによって畏怖する者らは、〈自性による有・無は自相あるもの〉と執る顛倒の妄分別が生じさせ _{H23b4} た過誤により貪瞋など _{K22a1}の煩惱という他のものの支配するところとなった者らだが、決して心は無生だと知らずに、自らの心の執により欺かれて、輪廻に輪廻することになるのである。」といふ義である。

(2・1・3・2・4) 第四・信解する者らが了解する _{H23b5} 様態に、(2・1・3・2・4・1) 究竟の諸 _{K22a2} 御事業によって了解する様態と、(2・1・3・2・4・2) 軌範師自身が御覧になる様態と、(2・1・3・2・4・3) それの妥当性である。

(2・1・3・2・4・1) 第一(究竟の諸御事業によって了解する様態)、
 事物に善巧な者らは、
 「事物は無常、欺く法、
 空しく、かつ空、無我である
_{H23b6} 空虚なもの」と見る。(25)⁸⁴

空性を _{K22a3} 崖地のように思わずには、諸法のなかの勝義、および涅槃に趣く道と了解するところの、事物に善巧な者らは、「事物は空虚にして自 _{H24a1} 性が空である。」と見るのである。

その妥当性は五つの特性で、すなわち事 _{K22a4} 物は刹那毎に消滅する性質を有するのだから [1] 無常、幻術の如く、無自性なものが自性を _{H24a2} 伴って顯現するので [2] 欺く法、長期に住さず微力にほかならないので [3] 空しく、かつ法我的自性を離れているから [4] 空な _{K22a5} もの、人我を離れているから [5] 無我である。

(2・1・3・2・4・2) 第二(軌範師自身が御覧になる様態)、
 無住處で、所縁 _{H24a3} として有りはしないし、
 根本が無く、住処が無く、
 無明の因より十分に生起した、
 始め・中央・最後が捨断された、(26)⁸⁵

134

Komits [

135

Dr. H.

136 Komits J.

137

芭蕉の如く心體無く、
ガンダルヴァ城と同様なものは、すなわち
K22a6 痴愚の都城が尽きない
趣として幻術の如 H24a4 く見える。(27)⁸⁶

器・有情〔世間〕に包摂された趣、これは、軌範師が——後得において幻術の如く見える、すなわち——御覧になるものなのである。

「どうして幻術のようであるのか」というなら、四つの妥当性として教示するものとは、逆縁を通じて、住処あるいは所依は K22b1 無諦だし、H24a5 諦める所縁も有りはしないので種子の在り方では根本が無く、生きないので三縁の在り方では住処が無いものである。

「趣が無自性なら種々にどうして顯現するのか」というなら、〔趣は〕無〔自性〕であっても、顯現することの特殊な因 H24a6 たる無明の因より完全に K22b2 生起するので、顯現するものである。

それ(=無自性であること)によっては顯現することは否定されないという教示である。

「成立したものは無自性だと教示されているから、始めに自性により生じることと、中央に〔自性により〕住することと、最後に〔自性により〕消滅することが捨断された、H24b1 すなわちそれを離れているのである。」という義である。

芭蕉(バナナの木)の如く心體が少し K22a3 も無いから、またガンダルヴァ城と同様に諦として顯現しても、伺察するならそのように無いから、やはり無明の因より生起したものである。

特殊な趣を——痴愚の都 H24b2 城という身語の働きが自身に対して能害することを斥け難いので、尽きない趣なの K22b4 だが、そのように見える、すなわち——〔軌範師は〕御覧になるのである。

(2・1・3・2・4・3) 第三(その妥当性)に、(2・1・3・2・4・3・1) 教証と(2・1・3・2・4・3・2) 理証の二つである。

(2・1・3・2・4・3・1) 第一(教証)、
梵天などのこの世間の者には
諦として顯現するもの、
H24b3 それは聖者にとって虚偽だとお説きになった。

それ以外の何が残ろうか。(28)⁸⁷

は、世間における根を超えた義を見る K22b5 場合に、最上という名聲の梵天などには——すなわち外・内のこの世間の者には——諦として顯現するもの、それを世 H24b4 尊が「『涅槃は唯一勝義諦なのだが、有為は虚偽、欺く法を有するのである。』」という聖者らにとつては虚偽なるものなのである。」と K22b6 お説きになったのなら、それ以外の幻術のようにならない何が在ろうか、すなわち有りはしない H24b5 ということなのである。

શાન્તિસાહિ

ੴ ਸਤਿਗੁਰ ਪ੍ਰਸਾਦਿ ॥

藏文：**西藏民族学院**

ପାତ୍ରମହାନ୍ତିକାଙ୍କ୍ଷା

ଦୁଃଖ'କୁଶା'ହୁ'କି'ହୁ'ବନ୍ତୁ । (29)

କଣ୍ଠରୀଧାରା ଶଶୀପାତ୍ରି ହେଲା ହେତୁ K23a-୯ ହେଲିବିଷା କାମିକା ଦିନାପରି ସମ୍ବନ୍ଧରେ କଣ୍ଠରୀଧାରା ଶଶୀପାତ୍ରି ହେଲା ହେତୁ K24b ଦା ଶୂନ୍ୟରେ
ଶ୍ରୀକୃତିଶ୍ଵରାସୀ ଶଶୀପାତ୍ରି ହେଲା ହେତୁ କୃତାଶ୍ରୀ ହେଲା ଶଶୀପାତ୍ରି ହେଲା ହେତୁ କୃତାଶ୍ରୀ ହେଲା ହେତୁ
କଣ୍ଠରୀଧାରା ଶଶୀପାତ୍ରି ହେଲା ହେତୁ କୃତାଶ୍ରୀ ହେଲା ଶଶୀପାତ୍ରି ହେଲା ହେତୁ କୃତାଶ୍ରୀ ହେଲା ହେତୁ
କଣ୍ଠରୀଧାରା ଶଶୀପାତ୍ରି ହେଲା ହେତୁ କୃତାଶ୍ରୀ ହେଲା ଶଶୀପାତ୍ରି ହେଲା ହେତୁ କୃତାଶ୍ରୀ ହେଲା ହେତୁ

ଏହାକୁ ପରିବର୍ତ୍ତନ କରିବାକୁ ଆମେ ପରିଚାରିତ କରିଛୁ।

55

॥८॥

ପଦାନ୍ତରକର୍ତ୍ତା ପଦାନ୍ତରକର୍ତ୍ତା

၁၃၁၂

ନୀତିବିଜ୍ଞାନରେ କମ୍ପ୍ୟୁଟର୍ (30)

西藏自治区人民代表大会常务委员会关于修改《西藏自治区民族区域自治条例》的决定

138 Komits

139

ପଞ୍ଚମ.

(2・1・3・2・4・3・2) 第二(理証)、

世間の無明で盲目となった

渴愛の流れ(相続)に隨順する者と、

善巧で渴愛を離れた

勝れた者らがどうして等しかろうか。 (29)⁸⁸

梵天など世間_{K23a1}の者で、慧眼が無明の眼翳によって盲目となった、すなわち癡げられる_{H24b6}ことになった、顛倒の渴愛の河(暴流)の流れ(相続)に隨順した異生と、善巧、
〔すなわち〕慧眼が清淨で、この派(=仏教)の法の甘露液に満ち足りて渴愛を離れた勝
れた者らが_{K23a2}どうして等しい、すなわち相同することに_{H25a1}なろうか。そのとおりなら、聖者が凡夫に帰謬し、かつ凡夫が聖者に帰謬することになるのである。

(2・2) 第二・蘊などとして教示されたものは未了義なのである〔と論証する〕ことに、
(2・2・1) 真実を教示する次第と、(2・2・2) 蘊などは意趣によって_{H25a2}お説きになったこと、
(2・2・3) 無生が了_{K23a3}義なのであると教示することである。

(2・2・1) 第一(真実を教示する次第)に、(2・2・1・1) 次第そのものと、(2・2・1・2) それを踏み越えた誤失、(2・2・1・3) それの対治である。

(2・2・1・1) 第一(次第そのもの)、

真実を探求する者に、始めには

「一切が有る」と述べるべきだ。

諸義を了解し貪_{H25a3}無き者には

後には空虚である〔、と述べるべきだ〕。 (30)⁸⁹

もし、「一_{K23a4}切が虚偽であるのなら、世尊は勝義だけを教示すべきではなかったのか。虚偽なるものの教示を何でするのか。」というなら、虚偽なるものも必要・目的が有るなら教示すべきだが、諦(真実)も必要・目的が_{H25a4}無いなら教示すべきでないので、
真実を了解することを探求する者である弟子に、——趣く〔べき〕_{K23a5}義の成就に善巧で〔弟子に〕利益したいと思う上師は——始めだけには「蘊・界・処の一切が有るのである。」と述べるべきである。

バラモン(=世尊)は、「『一切』と_{H25a5}いうのは、五蘊・十二処・十八界に至るまでである。」とお説きになったのである。

有_{K23a6}も、長さに縁って短いと仮設する様に色などに縁って蘊と仮設し、また油灯より_{H25a6}光が生起する様に因に觀待して果を建立したが、〔自〕性によつては成立していないものである。

ସାହିତ୍ୟକାରୀ

କୁମାରଦିନକୁମାରକିଶୋଭା ।
ଶବ୍ଦାଶରମାପାରହୁଣାପ୍ରେଦାତିଦା ।
ଶବ୍ଦଦାଶରମାକରଣକିଶୋଭା ।
ଶବ୍ଦାଶରମାପାରହୁଣାପକ୍ଷା । (31)

୪୩

“**ମେହାକୁଣ୍ଡଳୀର୍ଦ୍ଧବ୍ସନ୍ତରତ୍ନା**”¹⁴² ଲିଖିବାରେ
ପର୍ଯ୍ୟନ୍ତ ଏହାରେ ଅନ୍ତର୍ଭାବରେ ପରିଚାରିତ ହୋଇଥାଏଇଛି ।
ଏହାରେ ପରିଚାରିତ ହୋଇଥାଏଇଛି । (32)

କେନ୍ଦ୍ର'ପାଦିତ'ମ'ଶନ୍ତିଶ'ଗୁଣ'କୁଣ'ଗୁରୁ'ଦର୍ଶି'ମ'ଶନ୍ତିଶ'ଗୁଣ'ଦର୍ଶଣ' K24a₁ ପମ'ନଷ୍ଟିକ'ଟ'।

140 श्री हेम

141 H inserts

142 *EW HEE*

143

¹⁴⁴ H inserts |.

果おのおのについても、多くの縁を有するものであるのだから〔、と諸義を了解し〕、
 K23b1 また縁おのおのについても、辺際無きものが生じるときに多くの努力によって成立
 させる必要があるし、消滅 H25b1 するときに努力無く自然に消滅する、と諸義を了解しつつ、輪廻に対する貪を棄てたいと思う者で、我に対する貪などによる貪が無くなつたプ
 ド K23b2 ガラ(人)に、後時には空虚・甚深・空性を教示す H25b2 べきだが、〔我に対する貪
 が無くなる〕以前に〔空性を教示すべき〕ではないのである。

(2・2・1・2) 第二(それを踏み越えた誤失)、

空虚の義を知らず、

聴聞したことには入るのに

福徳を為さない

劣等の士、彼らは損なわれている。(31)⁹⁰

聖者らが K23b3 福徳と非福徳の両 H25b3 業を為そうとしないのが道理なら、真実を了解しない者は、最初に空虚、〔すなわち〕空性の義を知らず、途中で空性の言葉を聴聞した程度のことでは空性には如実に入るために、「空 K23b4 である。」と業 H25b4 果を躰無したあと、福徳の善業を為さない劣等の士、(宗)彼らは損なわれていて、(因)というのも一に不善に入っているので劣等の士である。

(2・2・1・3) 第三(その対治)、

諸業が果を伴うことと

諸趣も H25b5 実と説いた。

それの K23b5 自性の遍知と

生が無いことをも教示した。(32)⁹¹

説かれたとおりの過誤、それをよく捨断しようとお思いになって、世尊は最初に因である善・不善の諸業と、〔諸業が〕果である異熟の樂 H25b6 苦を伴うことと、果を受用する諸趣 K23b6 も「実として有るのである。」と説いたが、その後に、その業果の自性は空性だと遍知することである道諦と、それによって得られた、自相による H26a1 生が無いことである滅諦をも教示したのである。

詩句の前者二つによって苦・集〔諦〕を、また後者二つによって滅・ H24a1 道〔諦〕を教示したのである。

それゆえに(宗)真実を教示する者らは次第について善巧すべきであつて、(因)というのも「利 H26a2 德が大きいので……」と考え、かつ利益を欲しているように見えるので最初に空性を教示したら、〔その者が〕〈自らは菩薩の律儀を具えている〉と自認するのなら、根本墮罪が生起するし、他 H24a2 も損なわれることになるから。

୯୯

"ଦ୍ୟନ୍ତା"ପରି ଦ୍ୟନ୍ତା ଶିଶୁ କୁଳ ସକଳମା ।

ପ୍ରକାଶକ ମୁଦ୍ରଣ

ସନ୍ଦର୍ଭ ପରିମାଣ କରିବାରେ ଏହାକିମ୍ବାକୁ ବିଶେଷ

ଦ୍ୱାରା ପରିଚୟ କରିଛନ୍ତି । (33)

ଶନ୍ତିଶାଖା ମହାଶାଖାଦ୍ୱାରା ପ୍ରକଟ.

୮୯

ବ୍ୟକ୍ତି-ପାଇଁ-ପାରିଷଦ୍ୟମନ୍ଦିରମାତ୍ରମୁକ୍ତି

କୁର୍ମାଶିଥିଷ୍ଠାନୀ

କୁମାରପାତ୍ର । 146

¹⁴⁹ ପାତ୍ର-କ'ରୁଣ-ଶଶନ-କେତ'ମ'ଦି-ପକିତ'ପେଦ-ଦୀନ'ଏହିକ'କଣ-ଶ୍ରୀ'ପରି-ଶ୍ରୀ-କିମ' ପର୍ବତ

145

¹⁴⁶ Read grey; grounded on Derge edition and Dar ma rin chen's commentary.

147

148

149

大車ら(=ナーガールジュナ、アサンガ)は順序を逆にして教示_{H26a3}する者らを全く否定したが、(宗)利徳は資糧道よりも見道が大きくて、(因)というのも〔見道は〕最初に生じ得ないから、また〔そうだとすれば、〕六波羅蜜も最初に般若波羅蜜が生起するのが道理〔であることに帰謬すること〕になるのである。

{K24a3}空性を恐れる者も、業果を信認してから{H26a4}その後で恐れが生起する者なのであるが、最初に教示しても知覚が〔そちらに〕向かないで恐れないし、(宗)業果をウサギの角の皺を数えることの様に理解して喜びが広大に生じることになるのであって、(因)というのも不善を捨断する苦_{K24a4}行は必要ないと理解_{H26a5}するから。

(2・2・2)第二・蘊などとしてお説きになったものは必要・目的を有するものなのであること⁹²に、(2・2・2・1)そのものと、(2・2・2・2)証拠である。

(2・2・2・1)第一(そのもの)

意趣に応じて勝者らは

「私」と「私の……」とお説きになったように、

蘊・界・処を

前者と同様に意趣_{H26a6}に応じ_{K24a5}てお説きになった。(33)⁹³

は、あらゆる有身見が尽く捨断されても、意趣に応じて勝者、〔すなわち〕正等覚者らは所化が無生を了解する方便として「私」と「私の……」とお説きになったように、_{H26b1}蘊・界・処を_{K24a6}——言説程度で有るものと意趣なさって——前者の喻例と同様に眞実を了解する方便として意趣に応じてお説きになったということなのである。

(2・2・2・2)第二(証拠)に、(2・2・2・2・1)理証と、(2・2・2・2・2)教証である。

(2・2・2・2・1)第一(理証)、

大種などとして説かれた_{H26a2}ものは

識に正しく摂まる、

そのことを知ることによって_{K24b1}こそ、離れることになるなら、

逆は構想分別なのではないのか。(34)⁹⁴

因の色である四大種と果の色である十一〔処〕などとして経に説かれたものは——無明が自性として_{H26a3}識に行相を付与してから現れた程度以上のものとして有る、_{K24b2}と建てるのは不可能なので——識の範囲に摂まるが、その識が自性によって生じることは無いと知ることによってこそ、〔大〕種などを諦と思念することも離れる_{H26b4}ことになるなら、それらの逆は実ではなく構想分別されたものなのではないのか、そうなのだと_{K24b3}いうことに帰謬するのである。

要するに「(宗)大種などは無自性で、(因)というのもそれ(=構想分別)に縁って生じたから」ということである。

କୁମାର୍-ବ୍ରଦ୍ଧାଶାର୍କଶାର୍ମୀ-ଦ୍ଵାରା H₂O₂ ସହିତ ପାଥୋଗ୍ନିକ କ୍ଷେତ୍ରରେ କୁମାର୍-ବ୍ରଦ୍ଧାଶାର୍କଶାର୍ମୀଙ୍କ ପରିଚୟ ପାଇଲା ।

શાન્તિસાહિ

ଶୁଦ୍ଧକାରିତାରେ ପରିଚାଳନା କରିବାକୁ ପାଇଁ

କୁପି'ପ'କୁମା'ଗ୍ରୀଶ'ଶର'ଶନ୍ତିଦେଶ'ପା

ମୁକ୍ତିକାରୀଦାରୀ

वायना॑ वायना॑ विषा॑ K24b6 हृषा॑ वायना॑ विषा॑ ॥ 153 (35)

ସମ୍ବନ୍ଧରେ କେତେ ଦୁଃଖାବ୍ୟାସ ହେଲା ? କିନ୍ତୁ କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା

୫୫. ଶ୍ରୀ

ପାଇଁ ହିନ୍ଦୁ ପାଇଁ କରାଯାଇଥାଏ ।

୮୩

କୃତ୍ୟାମନୀ

ଶ୍ରୀଶାମ' K25a ମେଦ' ଧର' ତିଶାପି' ଧରନ୍ଦା । (36)

150

H inserts |

15 Read इन्:

સુર્ય H સુર્ય

¹⁵³ K omits].

154 Komits

現れた以上の〔外境〕義として有る、_{H26a5}と建てるのは不可能で、〔可能なら〕石女の子なども有ることに帰謬することになるのである。

「知の能取行相は有るのか無いのか。前 _{K24b1}者のとおりなら、所取行相も承認した〔ことになる〕ので一方ともう一方の二つの分を承認しているから、_{H26a6}自証(自己明知)を承認しているが、後者のとおりなら所取行相は妥当しないのである。」というなら、〈知が対境を明知することが証成していること〉を明知する程度のこととして証成し終わっているので、明知を証成せんがために〈自己が _{K24b5}明知するのか、他が明知するのか〉と伺察するのは道理でなくて、そのとおり(=道理)なら知が色法に _{H27a1}なるのであって、灯火が瓶を照明する必要がある〔場合に、更に灯火を照明する灯火が必要ない〕の同様だ。

(2・2・2・2) 第二(教証)、

涅槃が唯一の諦と

勝者らがお説きになった、

その際、「余剩は顛倒でない」と

善巧なる誰が _{K24b6}観察をなそうか。(35)⁹⁵

教証 _{H27a2}でも、世尊が「比丘らよ、この勝れた諦は一つであって、すなわち欺かない法を有する涅槃である。」⁹⁶とお説きになっているので、涅槃、〔すなわち〕勝義諦だけが唯一の諦と勝 _{H27a3}者らが _{K25a1}お説きになった、その際、「その余剩の諸蘊などは顛倒、〔すなわち〕虚偽の義を有するのではないのである。」と二諦の区分に善巧なる誰が観察をなそうか、道理でないのである。

(2・2・3) 第三・無生としてお説きになったものは _{H27a4}了義なのだとということに、(2・2・3・1)無明に _{K25a2}顯現するので無自性であることと、(2・2・3・2)無明に隨転・還滅するので無自性であることと、(2・2・3・3)生滅住の三つは因に觀待するので無自性であることである。

(2・2・3・1) 第一(無明に顯現するので無自性であること)、

意の動搖 _{H27a5}する限り、

その限り魔の行境であって、

そのとおりなのであるなら、これには

過誤が _{K25a3}無いと何で妥当しないのか。(36)⁹⁷

非如理作意によって意の動搖することが対境に働く限り、その限り聖者の慧根の _{H27a6}命根を中断することなどの六つの限定を具えた無明といふ魔の行境であって、他の支配〔下〕 _{K25a4}になったものである。

শান্তিশা'দ'ব'শান্তিশা'ব'ক্ষণা' দুর্দ'হ'ব'স্মৰণ'ব'বি'হ'ন'ন'প্রে'দ'ব'স'ব'ক'ব'ব'ক'

ମହିଷା^{K25a5}ନେବାର୍ଦେଶାଶ୍ରୀକରଣଙ୍କୁ।

ସନ୍ଦ୍ରମ୍ଭିତ୍ସନ୍ଦର୍ଶକୁମାରୀପଣ୍ଡିତ ।

୮ୟାତ୍ମିକାରୀଶ୍ୱର

କୁର୍ମଶାଖିକ କେଶାଲ୍ଲଶାଖି ଦସ୍ତା । (37)

ମହିଶା¹⁵⁷କେବୁନ୍ତେ ସର୍ବପେକ୍ଷଣି କୁଞ୍ଚିତମ୍ଭୁତ୍ୟୁଷାଦିବା ଏହିଶାପରିକୁଳିତକୁ

58

ସମ୍ବନ୍ଧରେ ପାଇଲା

ଶ୍ରୀ ପଦମନାଭ ପଣ୍ଡିତ

କେଶ' K25b1 ଏଣ୍ଡରା'ପ' ଲୁହ' ର୍ମ' ।

ष निश्चय देश दक्ष व कृष्ण द वि

ସାହେବ' କଣାନ୍ତିରିମାନ' H27b4 ମାତ୍ର ।

ସମ୍ବନ୍ଧରେ କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା

५३. शेषाद्यवगाक्यहशसद्य

ତେଣୁମୁକ୍ତଶୂନ୍ୟମୁଦ୍ରା । (38)

झूँटा देव प्रभु का देवता है। जैसे देवता का नाम है तो उसका दर्शन भी हो सकता है।

ସମ୍ବନ୍ଧିତ

၅၄။ ပြန် ၁၁။

ଶ୍ରୀକୃଷ୍ଣପାଦକିରଣ H27b6 ଶାକଶାପାଦା

ଶ୍ରୀକୃଷ୍ଣାମୁଦ୍ରିତ୍ୟନ୍ତରେଷାମ୍ବନ୍ଦି

ੴ ਕ੍ਰਿਘੁ ਲੇਸਾ ਲੈ ਲਿਨ ਹੱਸਾ । (39)

156

১৪৫ H ১৪৫

157

K omits क्.

無生が現前した、そのとおりなのであるなら、無生を現見に了解する者、(宗)これに説かれたとおりの過誤が無いと何故に妥当しないのか、_{H2751}(因)〔というのも〕魔の行境を離れているから。

(2・2・3・2)第二(無明に隨転、還滅するので無自性であること)に二つあるうち、(2・2・3・2・1)
第一・無明に隨順すると教示すること、

世_{K2546} 間は無明を有縁としていると

覺者(佛陀)らがお説きになるが故に、

それ故に、「この世間は

構想分別なのだ」と何で妥当しないのか。(37)⁹⁸

世_{H2752} 間は、五取蘊の何れかにおいて無明を有縁として有るので、無明を有縁として成立しているのである。

等覺_{K2546}者が「無明の縁により行、行の縁により識」とお説きになったが故に、それ故に、_{H2753}「この世間は構想分別によって仮設された程度のものなのである。」と何で妥当しないのか、すなわち『宝鬘』に、

その種子が虚偽であるもの、その

生はどうして諦なものか。⁹⁹

と_{K2551}お説きになったとおりである。

(2・2・3・2・2)第二・無明が斥いたなら還滅すること、

無明が滅することになった_{H2754}ときに、

滅することになるもの、それは

無知に遍計されたものだと

どうして明らかにならないだろうか。(38)¹⁰⁰

明かりの近くの闇の如く、明の智が生起したことによって無_{K2542}明が滅することになるときに、行などでありかつ滅する_{H2755}ことになるもの、(宗)それは無知、〔すなわち〕愚痴より遍計されたものだとどうして明らかに了解することにならないだろうか、(因)というのも眼翳が無いなら毛髪が還滅することが見えるからである。

(2・2・3・3)第三(生滅住の三つは因に觀待するので無自性であること)、

因_{K2543}に伴い生起するし、

縁無くしては_{H2756}住すること無く、

縁無きが故に更に消滅することになるもの、

それを「有る」とどうして了解しようか。(39)¹⁰¹

ଦ୍ୱାରା ପ୍ରକାଶିତ ମାନ୍ୟମାନିକୁ ଏହାର ଅଧିକାରୀ ହେଲେ ଏହାର ପରିବାରକୁ ଏହାର ପରିବାରକୁ ଏହାର ପରିବାରକୁ ।

ଶାନ୍ତିମୁଦ୍ରାକ୍ଷରିତିରେ ପରିଚୟ କରିବାକୁ ପରିଚାରିତ ହେଉଥିଲା

དྲବ୍ୟା ସାହୁଙ୍କୁ ରୂପାବେଳି ପ୍ରଦାନ କରୁଥିଲା ଏହାରେ କମ୍ପ୍ୟୁଟର ମେଦିସିନ୍ ପାଠ୍ୟ କେତେ ବିଶେଷ ପାଠ୍ୟ ହାବିଲା ।

୫୯

ସବୁରେ ପାଦମଣ୍ଡଳ କରିବାକୁ ପାଇଲା

॥
॥
॥

କୁଳାଙ୍କରୁ ପାଦପାଦିତା । (40)

ସାହିତ୍ୟକୀ

॥**ଶଦ୍ରା'କୁଣା'ପମ'ପ'ପହିଳ'କୁଣା'ବୀ**॥

ଶ୍ରୀକୃଷ୍ଣାମୁଦ୍ରା

ସନ୍ଦର୍ଭାବରୁ କରିବାରେ ପରିମଳାତଥିଲା

ଶକ୍ତାଦୟରେ ହିନ୍ଦୁ ।(41)

१५९

160 H inserts 1.

161

Read 5.

162 श्रीमद्भागवतः

有為で、生が因に伴うことに依拠して生起するので、生は因に観待するし、能住の縁無くしても住は無いので、_{K25b1} 住も _{H28a1} 縁に依拠するが、住の縁が尽きて無きが故に更に消滅することになるので、住の因が尽きたという縁に依拠して生起するものたる消滅¹⁰²、(宗)それを「自性によって有る」とどうして了解しようか、(因)というのも自性によって _{H28a2} 有るなら、さらに他になることは有り得 _{K25b5} ないからである。

(2・3)第三・蘊と思念する誤失に、(2・3・1)機縁を提示することと、(2・3・2)誤失そのものである。

(2・3・1)第一(機縁を提示すること)に、(2・3・1・1)他部の有自性論者は、その程度で怪異は無いことと、(2・3・1・2)自部の有自性 _{H28a3} 論者は大いに不道理であることと、(2・3・1・3)それの妥当性である。

(2・3・1・1)第 _{K25b6} 一(他部の有自性論者は、その程度で怪異は無いこと)、

もし、有自性論者らで、

事物を最上と執って安住する者らなら、

ほかならぬその道に安住していることは、すなわち

それに奇異は少しも無い。(40)¹⁰³

もし、サーンキャの三グナ〔が常に有ると論じる者ら〕と、ヴァイ _{H28a4} シェーシカの微塵が常に有ると論じる者らが、事物を最上、〔すなわち〕諦と _{K26a1} 執って安住する者らならば、自らの根本学説であるほかならぬその道に相反しないで安住していることは、すなわちそれに奇異は少しも無くて、すなわち(宗)世間に有り得ない _{H28a5} 義を縁じるなら怪異の因なのだが、有り得るものなのではなくて、(因)というのもそれは〔自らの〕流儀と一致する _{K26a2} から。

(2・3・1・2)第二(自部の有自性論者は大いに不道理であること)、

仏道に縁ってこそ

全てを無常と論じる者らが

論難することで、諸事物を最上と執って

安住しているのも、_{H28a6} それは希である。(41)¹⁰⁴

「仏の道である縁起生を承認することに縁ってこそ、事物全てを『無常である。』」_{K26a3}
と論じる者である毘婆沙師と、經量部と、表識派が、一切法は空と論じる中觀派 _{H28a1} を
論難することで、諸事物を最上、〔すなわち〕諦と執って安住しているのだということ、
それは奇異・希有である。」という表記の名句は、すなわち「帰命するに適さない _{K26a4}
者に帰命するのである。」と述べるのと同様である。

୪୩

ରଦ୍ଦି-ରତ୍ନ-ଦ୍ଵେବିଶାମର୍ଦ୍ଦୁ ।
କରି H₂Se₂ମର୍ଦ୍ଦ-ମୁଦ୍ରା-କରି ମୁଦ୍ରିଷାମର୍ଦ୍ଦ ।
କୁଦ୍ରମା-ରଦ୍ଦି-ରତ୍ନ-ଦ୍ଵେବିଶା ।
ଯମର୍ଦ୍ଦା-ମର୍ଦ୍ଦା-କରିଲୁ-ମର୍ଦ୍ଦା । (42)

କେ'ବ'ର୍ତ୍ତନା'ପ୍ରଦ'ାଶନା'କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ'ଯାହ'ଯାହ'କେ'ବ'ର୍ତ୍ତନା'କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' K₂₆₅ କେ'ବ'ର୍ତ୍ତନା'ଦି'ନ'ବିଶ'ଏନ'ଦ'ର୍ଶ'ରୀ'ଷୀଯ' ଏନ'କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' ଦି'ନ'ବିଶ'କୁଣ୍ଡଳ' H₂₈₅ କେ'ବ'ର୍ତ୍ତନା'ଦ'ର୍ଶ'ରୀ'ଷୀଯ'ାଣ' ।
ଦି'ନ'ବିଶ'କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' ସମ୍ଭବ'ଯ' ଏନ'କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' ।
ଏନ'କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' କେ'ବ'ର୍ତ୍ତନା'ଦ'ର୍ଶ'ରୀ'ଷୀଯ'ାଣ' H₂₈₅ ରୂପାଦ' କେ'ବ'ର୍ତ୍ତନା'ଦ'ର୍ଶ'ରୀ'ଷୀଯ'ାଣ' ।
K₂₆₅ କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' କେ'ବ'ର୍ତ୍ତନା'ଦ'ର୍ଶ'ରୀ'ଷୀଯ'ାଣ' ଏନ'କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' H₂₈₅ ରୂପାଦ' କେ'ବ'ର୍ତ୍ତନା'ଦ'ର୍ଶ'ରୀ'ଷୀଯ'ାଣ' ।
ସାହୁ'ପାଦ' କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' କେ'ବ'ର୍ତ୍ତନା'ଦ'ର୍ଶ'ରୀ'ଷୀଯ'ାଣ' ଏନ'କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' ।
ଏନ'କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' କେ'ବ'ର୍ତ୍ତନା'ଦ'ର୍ଶ'ରୀ'ଷୀଯ'ାଣ' ଏନ'କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' ।
ଏନ'କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' କେ'ବ'ର୍ତ୍ତନା'ଦ'ର୍ଶ'ରୀ'ଷୀଯ'ାଣ' H₂₈₅ କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' ।
165 ଏନ'କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' ।
ଦି'ନ'ବିଶ' ଏନ'କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' ଏନ'କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' ।
ଦି'ନ'ବିଶ' ଏନ'କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' ଏନ'କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' ଏନ'କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' ଏନ'କୁଣ୍ଡଳ'ପାଦ' ।

၁၅၃

শুণা ক্ষেত্র সংসাধন দ্বারা শীর্ণ কৃত প্রয়োগ হইলে একটি অবিভক্ত পদ্ধতি গুরুত্বপূর্ণ।
কৃত কৃত পদ্ধতি একটি সুবিধা দ্বারা পরিপূর্ণ করা হয়। একটি অবিভক্ত পদ্ধতি গুরুত্বপূর্ণ।
কৃত কৃত পদ্ধতি একটি সুবিধা দ্বারা পরিপূর্ণ করা হয়। একটি অবিভক্ত পদ্ধতি গুরুত্বপূর্ণ।
কৃত কৃত পদ্ধতি একটি সুবিধা দ্বারা পরিপূর্ণ করা হয়। একটি অবিভক্ত পদ্ধতি গুরুত্বপূর্ণ।

¹⁶³ शेषा H शेषा

(2・3・1・3) 第三(その妥当性)、

「これや、それである。」と何かを
伺₁₂₈₄₂ 紹したら、所縁とされないのなら、
論難によって「これや、それは諦である。」と
善巧なる誰が論じることになろうか。(42)¹⁰⁵

縁生を承認する仏の道に縁つてこそ、「色、これや、_{K26a5} 受、それである。」と何かを正理によって伺察したら、自性は少_{H28a3} しも所縁とされないのである。

自性が所縁とされないのなら、他者に教示不可能である。

教示不可能なもの、それを、論難によって「色、これや、受、それは諦である。」とか、「自らの立場、これや、他者の_{K26a6} 立場、これは諦である。」と善巧なる誰が論じることになろうか、道理でないのである。

(2・3・2) 第二(誤失そのもの)に、(2・3・2・1)事物実在論者は解脱道より脱して、見解という水によって流されているという教示、(2・3・2・2)その見解そのものが無意義の因だという教示、(2・3・2・3)事物への思念が有るからには、煩惱は捨断不可能だという教示、(2・3・2・4)対境という籠_{K26b1}に捕らわれていることと捕らわれてい_{H28b5} ないことの区別を教示することである。

(2・3・2・1) 第一(事物実在論者は解脱道より脱して、見解という水によって流されているという教示)に、(2・3・2・1・1)他部が見解に奪われていることの教示、(2・3・2・1・2)自部が見解に奪われていることの教示、(2・3・2・1・3)空論者がそれより斥いていると教示することである。

(2・3・2・1・1) 第一(他部が見解によって奪われていることの教示)、

縁らずに
我世間と執念する者ら、
彼らは、_{K26a2} _{H28b6} ああ常・無常
などの見によって奪われている者なのだ。(43)¹⁰⁶

サーニキヤなど、因縁に縁らずに我あるいは常なるものが自性によって成立しており、また蘊世間が自性によって成立していると執念する者ら、彼らにおいては、変化しないなら_{H28a1} 常論者に、また変化するなら_{K26a3} 断論者になるので、——〔そのことに〕悲愍するから——〔彼らは、〕ああ〈常〔なのだ〕〉、〈無常〔なのだ〕〉、〈常無常両方〔なのだ〕〉、また〈〔それら〕ではないのだ〉などの見によって奪われて、その他のものが支配することになっている者なので_{H29a2} ある〔といでのである〕。

あるいは、自部の、五蘊という映像のごとく無自性なものに我_{K26b4} と仮名するが、心という自相によって成立しているものを我と建てる者、彼らは見の河水に流されていて、〔彼らにも〕「自性によって成立した心、それが変化するなら断に_{H29a3} なり、変化しないなら常になる」と適用されるが、〈前者(=サーニキヤなど他部)の方が麗しいか〉と上師(=ツォンカパ)はお説きになった¹⁰⁷。

ସନ୍ତିଷ୍ଠାନୀ

শ'দ'ন'গ'।^{K2665}ম'হ'ৰ'ব'স'দ'র'স'য'ক'ম'ন'।

କୁଣ୍ଡଳ ପାତାର କିମ୍ବା କିମ୍ବା

ੴ ਸਾਹਿਬ ਪ੍ਰਸਾਦਿ ॥ (44)

શસ્ત્રોદ્ધર્મ

॥ एवं दशा एवं हेतु वक्ष ददृश एवं वक्ष ॥

କ'ଣ୍ଠ'ବ'ିଜ'ନ'କ'ା

ଯତ୍କଣ୍ଠାନ୍ତିର୍ମିଳିତ୍ପଞ୍ଚଶାସ୍ତ୍ରିକାତ୍

ପରେ କାହିଁଏବେ କାହିଁଏବେ । (45)

ଦ୍ୱାରା ଯାଏନ୍ତିରେ କାହାରୁ ପରିବର୍ତ୍ତନ କରିବା ପାଇଁ ଦେଖିଲାମ୍ ।

བཞྱ་‘କୁ’ରୁଷ୍ଣିମାଦକୁଶାରୀୟ-ପରମାଣୁବିଦ୍ୟାରେ ଏହାରୁ ପରମାଣୁବିଦ୍ୟାରେ ଏହାରୁ

ବ୍ୟକ୍ତିଗତ ପରିମାଣରେ ଏହାକୁ ବନ୍ଦ କରିବାକୁ ଆବଶ୍ୟକ ହେଲା

ବ୍ୟାକ୍ ପାଇଁ ଶିଖିବାର ପାଇଁ

ଶିଶୁଶ୍ରୀହୃଦୟାନ୍ତଶାସ୍ତ୍ର ।

ମହାତ୍ମା ପଣ୍ଡିତ ନାନ୍ଦୀନୀ । 165

ବେଳାଗା'ବା'ଦ୍ୱାରାଶବ୍ଦାବିରୁଦ୍ଧ'ପଦ୍ମ'ପ୍ରଥମ' ଦେଶାଶୀ'ଦ୍ୱାରା'ବନ୍ଦ'କାହା'ପଦ୍ମ'ପ୍ରଥମ' ଦେଶାଶୀ'ଦ୍ୱାରା'ବନ୍ଦ'କାହା'ପଦ୍ମ'ପ୍ରଥମ' କାହା'ପଦ୍ମ'ପ୍ରଥମ' କାହା'ପଦ୍ମ'ପ୍ରଥମ' ।

॥५५॥

۱۹۰

॥
କେତେ ଦୁଃଖ ପାରିବୁ ହେଲା ମୁଁ ॥

କାନ୍ତିକାଳେ ପଦମାଲା

ଶ୍ରୀମଦ୍ଭଗବତ୍

କେତେବେଳେ ପାଇଁ ଏହାରେ ଦେଖିଲାମା (16)

164 H inserts [.]

165 Komits.

(2・3・2・1・2) 第二(自部が見解に奪われていることの教示)、

縁つて、諸事物が

真実として成立していると主張する者ら、

彼らにも常などの過失、

それらがどうして生起することにならないだろうか。(44)¹⁰⁸

諸事 物が縁つて生起(縁生)すると承認していても、真実として成立していると主張する者ら、彼らにも常見などによる過失、^{K26b6} それらがどうして生起することにならないだろうか、すなわち自性によって成立した事物を承認していると、変化するなら断〔見に〕^{H29e5} また変化しないなら常見になるのである。

(2・3・2・1・3) 第三(空論者がそれより斥いていると教示すること)、

縁つて、諸事物は、

水の月のように

実ではない、誤りでないと

主張^{K27a1}するものら、彼らは見によって奪われていない。(45)¹⁰⁹

(宗)中觀派で、縁つて生起(縁起)した諸^{H29e6} 事物は、水の内の月の映像のように実、^[すなわち] 諦として成立したものでもないが、誤り、^[すなわち] 全くの無でもなく顕現するに自性は無いと主張する者ら、彼^{K27a2} らは常断の見によって奪われていなくて、(因)というのも事物における自^{H29e1}性を少しも承認していないから。

縁つて生じた諸々のものは、自性ある有であることと自性ある無であることが捨断されていて、映像の如きだと承認すべきであって、アーリヤデーヴアは、

果^{K27a3}が有ることを主張する者らと

果が^{H29h2} 無いことを主張する者らは、

家の為に柱などが

装飾(莊嚴)された義も無いことになる。¹¹⁰

と柱などが自性によって有るとても、それらの為に努力をなす必要がないことになり、無が自性あるものなのだ^{K27a4} としてもそれらの為に^{H29e3} 努力する義が無いという帰謬を投じたものなのだが、「〔單に〕 有るなら不必要、〔單に〕 無いなら不可能」という程度のものなのではないのである。

(2・3・2・2) 第二(その見解そのものが無意義の因だという教示)に、(2・3・2・2・1) そのものと、

(2・3・2・2・2) それが斥く様態である。

(2・3・2・2・1) 第一(そのもの)、

事物という承認が有るならば、

貪欲・瞋恚が生起する

^{K27a5} 凶惡・^{H29h4} 凶暴な見を執り、

それより生起した論難になる。(46)¹¹¹

শ'ন্তিশ'ব্দ'বা ব'দ্বৰ'শ'শ্লোক'দ্ব'। ক্ষুণ্ণ'ব্য'প'দ'।

H29b6 հՀ. Տ. K27b1 Վ.

ଶ୍ରୀମଦ୍ଭଗବତ

କୁଣ୍ଡଳୀ ପାତାର ମହିଳାଙ୍ଗନୀ

དྲྲୁତ དྲྲୁ རྩྰୀ རྩྰୁ རྩྰୁ

ଶ୍ରୀଦ୍ଵାରକାମନାଯୁଦ୍ଧାବ୍ସର୍ବମନ୍ତ୍ରି । | (47)

यान्त्रिश'द्युम्या निषा' H30a३ एति' यावश'कुर्याद्दृढा' वैष्णव'कुर्याद्या'

དང་ཝྱଲ་བྱତ୍ର རྩା རྩେ རྩା རྩା

५५

"ଏହିଶବ୍ଦରେ ମେଲାକଣ୍ଠରୁଥିଲୁଗନ୍ତିରୁ" ।

ସହିତ କିମ୍ବା H30a4 ରକ୍ତ ସାମାନ୍ୟ ସାଥୀ ।

ପହିକୁ କଣା ଅଶାଦ୍ୟ ବ୍ୟାକୀ ଶାଦ୍ୟ ।

ସମ୍ବନ୍ଧ ପାଇଁ କଥା ହେଉଛି । (48)

ଶ୍ରୀମଦ୍ଭଗବତ୍ ପାଠ୍ ୧୨ ଅଂଶ୍ ୩ ପାଠ୍ ୨୫ ପରିଃ ୨୨୯

諦なる事物という承認が有るならば、決まって自らの立場を貪る貪欲と、他者の立場に背く瞋恚が生起する因となつた諸見が成熟し、_{K27a6, H29a5} 忍耐し難いものを生じさせてるので凶惡、超え難いものゆえに凶暴なもの〔である見〕を執り、それより自らの立場を堅固にしようと欲し、他者の立場を除去しようと欲する論難が生起することになるのである。

(2・3・2・2・2) 第二(それが斥く様態)に、(2・3・2・2・2・1)略説と、(2・3・2・2・2・2)広説である。

_{H29b6} (2・3・2・2・2・1)第一 _{K27b1} (略説)、

それは全ての見の因、

それ無くんば煩惱を生じさせなくて、

それ故、それを遍知するなら、

見と煩惱が遍く浄化する。(47)¹¹²

事物と執ること、それは、前辺際と後辺際の見など、全ての見の因なのだが、見に縁つて _{H30a1} 自らの見に対し貪る、すなわち慢することが、_{K27a2} また他者の〔見〕に対し瞋が、また一切に対し愚痴が生起するのである。

随転を教示してから、還滅を教示するのは、事物と執ること、それが無いなら貪瞋などの _{H30a2} 煩惱は生じなくて、それ故、事物、それを自性空性と遍知するなら、常断の見の _{K27a3} 煩惱あるものが遍く浄化する、すなわち清淨になるので、無自性だと了解する方に努力すべきである。

(2・3・2・2・2・2) 第二(広説)に、(2・3・2・2・2・2・1)所 _{H30a3} 知の住する様態と、(2・3・2・2・2・2)知覚の了解する様態である。

(2・3・2・2・2・2・1) 第一(所知の住する様態)に、(2・3・2・2・2・2・1・1)縁つて生じたことと無自性であることは相反しないことと、(2・3・2・2・2・2・2)相反 _{K27b4} すると執ることにより全ての過誤が生起すると教示することである。

(2・3・2・2・2・2・1・1) 第一(縁つて生じたことと無自性であることは相反しないこと)、

「何によってそれを知ることになるのか」と考えるなら、

縁りつつ _{H30a4} 生起すること(縁生)が見えること〔によって〕であって、

縁つて生じたものは生じていないと

最上の一切知者がお説きになった。(48)¹¹³

詩句の第一によって質問を、第二によって回答を、第 _{K27b5} 三によって縁生の自性を、第四によってお説きになる者を教示したのである。

「無自性 _{H30a5} だと知ることによって煩惱を捨断するなら、無自性であること、それを何によって知ることになるのか」と考えるなら、縁りつつ生起すること(縁生)が見えること〔によって〕であって、観待法の義を如実に知ることによって見えることになる _{K27b6} のである。

শান্তিকুরস্বামীশব্দের সন্ধান কৰিবেন।

ସମ୍ବନ୍ଧରେ କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା

ਦ੍ਰਿੰਗੁ ਸਾਡੇ ਸਾਡੇ ਪੜ੍ਹੇ ਪੜ੍ਹੇ

ଶ୍ରୀକୃଷ୍ଣାମନ୍ଦିର ପତ୍ର ପତ୍ରମା

ସନ୍ଦର୍ଭିଷାଙ୍କୁ ହିନ୍ଦୁଶ୍ଵରାଜୁ ପାଇଁ ଘଟିଲା ।

ବୈଶ'ସମନ'କ୍ର'ମାତ୍ରେକ'ଶ୍ରୀନ'ଶାନ୍ତିନ'ମା'ରାଧା'ପ'ମେଦ'କ'।

શાન્તિસાહિત્યા

સેસાદની સેસાદના ચેસાર્કરણ

ସହିକୁ ପାଇଲା ଯାଇଲା ଏହିକିମିତିରେ

५८-४८३-४६७-४६८-४६९-

କେବଳ କଣାନ୍ତରେ ହେଉଥିଲା ଏହାଙ୍କାଳି । (49)

K28b1 55-5-2

કે.શરી.જાણા.હીન્.નવ.દે.જા.

ସମ୍ବନ୍ଧରେ କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା । 16

ବୁଦ୍ଧାବନ୍ଧୁମଣ୍ଡଳ ତଥା ସଂଗ୍ରହିତ ପରିଚୟ

ସମ୍ବନ୍ଧରେ କୁଣ୍ଡଳୀଙ୍କାରୀ । (50)

166 第二部分

167 होमिट्स

168 H omits]

もし、「縁って生じたもの、それは生じた H30a6 ものにはかならないのではないか。それがどうして生じていないという言葉の所詮になるのか。これ(=生じたものと生じていないもの)は相互相反なので道理でないのである。」というなら、我々は〈縁って生じたもの、それは映像の如く自性によって生じていない〉と論じたが、「全く K28a1 生じていない H30a1 のである。」とは論じていないので相反する機会がどこにあろうか。それゆえに、「縁って生じた」ということと「生じていない」ということの二つは対境が異なるものなのであって、生じていないとは、実なるものや諦や性として生じていないことだと論じるし、縁つ K28a2 て H30a2 生じたとは、「虚偽なるものとして生じたのである。」ということなのである。

「縁って生じたもの、それは自性によって生じていないものである。」というのは、縁より生じたもの、それは生じていない。

それに生の自性は有りはしない。

縁に依拠するもの、それは空だと説く。

空 H30a3 性を知る者、彼は K28a3 不放逸なのだ。 114

と一切知者がお説きになつたので、相反は無いのである。

縁って生じたものであることを生じていないものであることが遍充すると承認する善知識、彼らはこの部分の註を、よく眼を H30a1 拭って見るように。

このことによってこそ、〈四辺の生の K28a4 否定は所否定を勝義により限定する必要はないので、—迷乱して—全面的に帰謬派は所否定に勝義を結び付ける必要はない〉と主張することも除去するのである。

(2・3・2・2・2・2) 第 H30a5 二(相反すると執ることにより全ての過誤が生起すると教示すること)、

誤った知に制圧された

非諦を諦と執る者には

K28a5 執持と論難などの

次第が、貪より生起することになる。(49) 115

事物だと思念する誤った知に制圧された、縁生という非諦のものを H30a6 諦と執るプロダガラである者に事物に対する貪が生起するが、自らの立場を執持 K28a6 することと、他の立場を—否定を通じて—論難・論争することなどの次第が、事物に対する貪より生起することになるので、〈縁生と H31a1 無自性は相反する〉と執るべきではないのである。

(2・3・2・2・2・2) 第二・知覚の了解する様態に、(2・3・2・2・2・2・1) そのものと、(2・3・2・2・2・2・2) それの妥当性である。

K28a1 (2・3・2・2・2・2・1) 第一(そのもの)、

偉大な本性を有する彼ら

諸々に立場は無い、論難は無い。

立場が無い者ら、

H31a2 彼には他の立場が何処に有ろうか。(50) 116

द्वयार्थीप्राप्तिः अस्याद्युपर्याप्तिः पूर्वानुभवात् एवं द्वयार्थीप्राप्तिः अस्याद्युपर्याप्तिः पूर्वानुभवात् ।

「**བ**」_{H1b1}ཅིག་ན་**ར**་**સ** ད୍ୟା**ଶାରଦ**·**ପ୍ରଦା**କି**·**ସମ**」_{K286} ନାହିଁ**ଦ୍ୟା**ଶାରଦ**·**ପ୍ରଦା**କି**** ବେଳା**କି**·**ର୍ଦ୍ରକୁଣ୍ଡଳୀ****ଶ୍ରୀ**ଦ୍ୟା**ଶାରଦ**·**ପ୍ରଦା**କି************

西藏民族出版社《藏文古籍整理》第173号。HB5

ସାହୁରୁଧ୍ୟକେ ଦ୍ୱାରା କୌତୁଳ୍ୟ ପ୍ରଦାନ କରିଛି ।

শ্রী'ব'ভ'স'ব' গ'ব'ক' দ'ক' দ'ব'ন'ক'দ'ব'য'দ'ক'দ'ব'ন'ক' প'ত'স'ব'ন'ক' প'ত'স'ব'ন'ক'
দ'ব'য'দ'ব'ন'ক' গ'ব'ক' প'ত'স'ব'ন'ক' প'ত'স'ব'ন'ক' প'ত'স'ব'ন'ক' প'ত'স'ব'ন'ক'
ক'প'ত'স'ব'ন'ক' প'ত'স'ব'ন'ক' প'ত'স'ব'ন'ক' প'ত'স'ব'ন'ক' প'ত'স'ব'ন'ক' প'ত'স'ব'ন'ক'

169 U emits $\gamma\gamma$

Homits 4

Read यद्यः.

Digitized by KirtiGangotri

୧୨

173 ၏၏
174 ၏၏

中觀派という離戲論を了解する功徳によって偉大な本性を有する彼ら諸々に自らの立場が有るなら、それを論証する_{K28a2}ために他の者らと一緒に論難することになるなら、正理による伺察に堪える基体が無いので自らの_{H31a3}立場は無いのであって、それ故に偉大な本性の者らに論難は無いのである。

もし、「彼は清淨なので自らの立場は無いけれど、他の立場で除去すべきものが有るのではないか」_{K28a3} そのために『〔中〕論(=六十頌如理論)』を著述したからである。後者が有るので自らの立場_{H31a4}も有るのである。」というなら、自相によって成立した立場というものが有るなら自らの立場や他の立場というものになるのなら、中觀派にとつては、正理により単なる立場も所縁とされないので、単なる_{K28a4}立場が無い者、彼には他の立場で_{H31a5}除去すべきものが何処に有ろうか。立場が有り得ない、その際に、決定して煩惱が滅することになるのである。

「これ(=『六十頌如理論』)に主張命題が無いと説かれたのと、『根本般若』に四辺を否定する主張命題を承認したのはどうなのか」というなら、パツアップ〔・ニマタク〕が云うには、「それ(=『根本般若』)において_{K28a5, H31a6}は、高々、否定的断定である主張命題なのであるが、これ(=『六十頌如理論』)においては、肯定的断定である主張命題は無いと説かれた」とのことだが、チャン・〔セム・ギエルワ・〕イエ〔シェー〕¹¹⁷が云うには、「否定的断定である程度のもの、それも他者の誤った分別を否定するために提示されたものなのであるが、自らの流儀なのではない」とのことである。

或る_{H31b1}者が云うには、「主張命題が有るとは帰謬_{K28a6}の主張命題〔のこと〕なのであるが、無いとは自立の主張命題〔のこと〕なのだ」とのことだ。〔別の〕或る者が云う「有るとは伺察しない顯現の側においてであるが、無いとは正理の側においてである」ということも、〔すなわち〕〔或るものがあるのは言説程度〔として〕、また無いのは勝義_{H31b2}として〕〔ということであり〕、また他の者が云うには「有るのは他の側なのだ_{K29a1}が、無いと説かれたのは、自らの流儀に無いこと〔が説かれたもの〕なのだ」とのことである。

シャン・タン・サクバが云うには「帰謬派は、真実を伺察する場合に自立を為さないもののだが、言説を伺察する場合には決まって自立を_{H31b3}為すのである。」とのことである。

他は大部分、伺察し_{K29a2}終わっているが、チャン・〔セム・ギエルワ・〕イエ〔シェー〕の流儀も伺察すると、他者の誤った分別を否定する主張命題は有るのか無いのか。

後者のとおりなら利他を主張する命題も無いことになる。

前者のとおりなら、他者の誤った分別を否定する主張_{H31b4}命題を中觀派が認容しないのなら、事物実在論者自身の主張_{K29a3}命題を否定する主張命題を事物実在論者自身のそれよりも認容することは有り得ない〔ことになる〕から〔、他者の誤った分別を否定する主張命題を中觀派は自らの流儀として認容する〕。

ଶ୍ରୀମତୀ ପ୍ରଦ୍ବନ୍ଧୁ ସାହୁଙ୍କର ପଦାଳିରେ ଏହାରେ ପାଇଲା ଯାହାରେ କିମ୍ବା କିମ୍ବା
କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା

୮. ପାଦବୀ ସରଦ୍ର କେନ୍ଦ୍ର ଧନ୍ୟା ।
୯. ପାଦବୀ କେନ୍ଦ୍ର ଶର୍ତ୍ତ ଧିନ୍ୟା ।

ବ୍ୟାପର ଶାଖା ଏବଂ କାମାକୁଳ ଦେଇ କରୁଥିଲେ ।

དྲླ୍ଲିମ୍‌ବ୍ୟାକ୍‌ଶ୍ରୀଷ୍ଟାହ୍‌ରୁଣ୍ଡିନ୍‌କେନ୍‌ତୁ ପ୍ରେଦ୍‌ରୁଣ୍ଡିନ୍‌କେନ୍‌ତୁ ପ୍ରେଦ୍‌ରୁଣ୍ଡିନ୍‌କେନ୍‌ତୁ

བྱନ୍ହା རୁଦ୍ଧ དକ୍ଷିଣାଧ୍ୟ ପରି କୁଶକ୍ଷତ୍ର ଉଠି ସ୍ମୃତିଭାଗି ଯେତି
ଦୂଷା କୁତ୍ସାଧ୍ୟ ପ୍ରଦେଶରେ ଭୂର୍ବାଧୀନ ଥିଲା ।¹²⁰² ଏଥାର୍ଥ କେବଳ ପ୍ରଦେଶର ଦୂଷା କୁତ୍ସାଧ୍ୟ ଦେଖିଲା । କେବଳ
ଦୂଷା କୁତ୍ସାଧ୍ୟ ପ୍ରଦେଶରେ ଯେତି କୁଶକ୍ଷତ୍ର ଉଠି ସ୍ମୃତିଭାଗି ଯେତି ।

ସାର୍ଵିଶାଶାନ୍ଦେହି ପଦମଧ୍ୟରେ
ସାର୍ଵିଶାଶାନ୍ଦେହି ପଦମଧ୍ୟରେ ।
କେତୁ ମନ୍ତ୍ରରେ ଶ୍ଵର୍ଯ୍ୟମାତ୍ରାଶାପର୍ଯ୍ୟଚକ୍ର ପ୍ରିୟ ।
କେତୁ H265 ଏବଂ ବ୍ୟାସ K290 ରେ ମାତ୍ରାଶିଖିତା
ପାରୁ ଗୋଦାନ୍ଦେ ଦ୍ୱାରା ଉଚ୍ଚିତ୍ୟାମ୍ଭୁତ । (51)

¹⁷⁵ K omits [.]
¹⁷⁶ .

176 બેન્ચ

その立場を汝が「〈生じる程度のことは有るが、自と他より生じることは無い〉といふことにも相応する〔すなわち自他よりの生の否定は自らの流儀ではない〕のである。」というなら、(宗)相応し_{H31b6}なくて、(因)というのも等時の他である程度のものは言説として有っても、因果〔関係〕にある他のものは言説として_{K29e4}も有り得ないから〔、自他よりの生の否定は自らの流儀なのである〕。

或る者が

私に主張命題は無いので、

私に過失は無いにほかならないのだ。¹¹⁸

という典籍に縁つて「承認程度すらも無い」と論じる者は、_{H31b6}語句である程度のもので顕われた慢を為す者なのであって、中觀自立派の者らもその程度の語句が見てない者なのでは_{K29e5}ないのである。

相反する果という辯を見ずに、語句の一分について概説して「承認は何も無い」と論じる者は、空性の_{H32a1}獅子吼によって事物実在論者のキツネなどは克服不可能だという罪過を認めていて、学者の部類における、軌範師と世尊に対する過失を_{K29e6}功徳と増益してから称賛のふりで誹謗を付与し_{H32a2}法と教主に対して損減する者なのである。

他にも、見解を理解していないことの上有るその程度の承認、その承認は畢竟無だと了解すること、それは無因・無縁なのか、それとも因・縁が有るのか。

前_{K29b1}者のとおりなら、他者の誤った分別も無因・無縁だ_{H32a3}と何故、否定しないのか。何故に他者極成の詮因などを提示するのか。

後者のとおりなら、それこそが自らの見解の理由だと何故、承認しないのか。

それゆえに、(宗)立場の有無とは、前に説かれた¹¹⁹とおり_{K29b2}正理の側における有法の_{H32a4}有無のみだと明かなのであって、(因)というのも『明句論』¹²⁰においても、軌範師バーヴィヴェカにそのことを通じて内部相反を執るからである。

(2・3・2・2・2・2・2) 第二・それの妥当性、

いずれでもよいが、住処を獲得したなら、

煩惱の毒蛇を諂を有する者が

捉える_{H32a5}ことになる_{K29b3}のである。その心が

住処無き者、彼らを捉えることにならない。(51)¹²¹

ସମ୍ବାଦାର୍ଦ୍ଦିତାକିରଣ୍ୟକୁ ପ୍ରତିକର୍ତ୍ତାପନାମ୍ବାଦି^{H32} ଅନ୍ତର୍ମାତ୍ରରେ କୁଣ୍ଡଳାମାଲାଶାଖା¹⁸⁰ ଦ୍ଵାରା ଦର୍ଶନ ଦିଲ୍ଲିଜିଲ୍ଟରାଶାଖାମାତ୍ରକେ ପାଇଯାଇଥାଏବା ପାଇଯାଇଥାଏବା ।

५५

॥ शक्ता' K29b६ एवा'शेषा'द्द्वया'क्षमा'पा ।

ନେତ୍ର·ଶର୍ଷା·ଦୂଷା·କେବୁ·ତୀର୍ତ୍ତିଶାମି·ଦୁର୍ଦ୍ଵାରା ।

ସନ୍ତକେ ସନ୍ତବନ୍ଦିଷ୍ଟାନ୍ତାନ୍ତା

ଶ୍ରୀ^{H32b3}ମୁଦ୍ରଣ ପାତ୍ର ପରିଚୟ । (52)

ପିଲାକୁ ଦିନରେ ମଧ୍ୟାହ୍ନ କାହାରେ ଥାଏ ? ସାହୁଙ୍କ କାହାରେ ଥାଏ ? ସାହୁଙ୍କ କାହାରେ ଥାଏ ?

དྲିକୁଁ གର୍ବ དୱାଣି ཤେ ຂପାଣା རୁଦ୍ଧ ເନ୍ଦ୍ର පରି ସର୍_{K302} ଅପା ସହଦ୍ୟ ଶୈଖା ସର୍ବଜ୍ଞା ଧା ଯଦି ଶାନ୍ତି କ୍ଷୁଣ୍ଣି ତେବେ
ମନ୍ଦିରା ପରି ଥିଲୁ ହେଲା ଶୈକ୍ଷିକ ସର୍ବ ବ୍ୟାସ ଏବଂ ପ୍ରିମ୍ରର୍ମଣୀ ।

ସତ୍ରିଷ୍ଟାପନୀ

ଶ୍ରୀନାଥପଦ୍ମକଣ୍ଠଙ୍କୁ ଶ୍ରୀନାଥ

ଯତ୍ତୁଷବ୍ଦାପଦ୍ମବ୍ରଦ୍ଧିତିକୁ ହେଲା ଏବଂ ପଦ୍ମବ୍ରଦ୍ଧିତିକୁ ହେଲା ।

କ୍ରିସ୍ତୁମାନୀୟ ହେବ୍ରୋନ୍‌ସାହିତ୍ୟରେ ଏକ

ପୁରୁଷୀ'ଶତେଷ'ବ'କ୍ଷଣା'ଦନ' K30a3 ମୁଦ୍ରା । (53)

177 श्री ह. ग.

୧୭ ପାତ୍ର

१९८४ दिसंबर

180 የኩርያ አስተዳደር

ପ୍ରକାଶକ

「立場が無いなら、煩惱がどうして滅することになるのか」と、貪欲など煩惱のいはずでもよいが、住処、あるいは因、〔すなわち〕事物へ執念H226するところの所縁を獲得したなら、貪欲などK29b4煩惱が行という稠密な荒野から動き出し、善という命の中断を生じさせ、見解という窟に該当するものを持えた、諂ハスを有する者である地獄などの趣が曲がりくねり〔の動き〕をH22b1持えた毒蛇を——それ(第五十一偈)に説かれたとおり〈住処を獲得してから〉——捉えることになるが、その心がK29b5——事物は無自性だと了解することによって——住処無き者、彼らを蛇が捉えることにならないのである。

(2・3・2・3)第三・事物への思念が有るなら、煩惱はH22c2捨断不可能だという教示に、(2・3・2・3・1)そのものと、(2・3・2・3・2)それを具えた者を悲愍すべきだという教示、(2・3・2・3・3)それ以外を斥けることである。

(2・3・2・3・1)第一(そのもの)、

住処をK29b6伴う心を具えた者らに

煩惱の大毒が何で生起しないのか。

如何なる際も、中間にいる者をも

煩H32a3惱の蛇が捉えることになる。(52)¹²²

事物へ執念する住処を伴う心を具えた者らに貪欲などの煩K30a1惱の大毒が何で生起しないのか、生起するのにほかならないのである。

どうしてというなら、意に適ったH22b4ものより貪が、また意に適わないものより瞋恚が、また事物である程度のものを増益したことより愚痴が生じるのである。

その理由は、如何なる際も、貪瞋無き中K30a2間に——捨て——いる者をも愚痴という煩惱の蛇H32b5が捉えることになるからである。

(2・3・2・3・2)第二(それを具えた者を悲愍すべきだという教示)、

諂と想う凡夫が

映像に貪る様に

そのように、世間は痴愚するので、

対境の籠に捕らわれることにK30a3なる。(53)¹²³

শনুব'দ'শ'ব'ক' K30as ག'ཤ'ན'ན'ྱ'শ'ব'ক'

བདག་ནිද්‍යා ཁේ ཀුසා དැං්ග ජ්‍යෙ དැං

ଶତ୍ରୁଗାନ୍ଧିକୁ ପ୍ରଦାନ କରିବାରେ

३८० शिष्यावश्च रक्षा युत्तरेण ते।

ଶ୍ରୀମଦ୍ଭଗବତ୍ ॥ 54 ॥

¹⁸⁴ ସବୁ' K30b1 ଦ୍ୟାୟୁସ୍ମୀ' ଶତ୍ରେନ' ପ୍ରକ୍ଷଣା' ପି' ଦ୍ୱଦ୍ଵାମି' ଶୈଶବା' ପରି' ଦ୍ୱାସ୍ତେ' ନ' ପ' ଗର୍ଭର' ଶଳ୍ଲକ' କୁର୍ମ' ସମ୍ବନ୍ଧ' ।

५८

॥५॥ प' कुवा' व' श्रवणा' व' क्षणा ॥

प्रमाद्या रै क्षमा H33a त्रिप्रद्युम्ना

ଶତ୍ରୁଷାନ୍ତାଗୀନ୍ତିଶବ୍ଦିକ୍ଷାମେଷାମ୍ପି

॥५॥ श्रीकृष्णात्मकम् वाचानम् शब्दा । (55)

182

183

184

この愚痴が生起することになる一切の _{H22b6} 際、その際に、表記に熟達していない、顔の映像を諦_(真)の顔と想う凡夫が、映像に——見ることと個別に仮設することなどをなすことを通じて——貪る様に _{K30a4} そのように、世間の者 _{H33a1} らも諦ではないものを諦と痴愚するので、映像と同じ様な対境の籠に捕らわれて過罪行の苦を領納するから、その者こそが勝れた者らに悲愍の対境として顯現することになる _{H33a2} のである。

(2・3・2・3・3) 第三・それ _{K30a5} 以外を斥けること、

偉大な本性の者らは、諸事物は

映像のようだと、智の

眼によって見て、「対境だ」と

いう泥に捕らわれないのである。 (54) ^{1 2 4}

〈聖者、〔すなわち〕 本性が偉大で、般若の眼が無知 _{H33a3} の眼翳によって〔汚されずに〕 清淨な者らは、色 _{K30a6} などの事物は映像のようだと、智の眼によって見て、「淨なる色などが対境だ」という輪廻の泥に捕らわれない、すなわち解脱することになるのであって、_{H33a4} 表記に熟達した者らが映像に対するが如きである。〉 と意趣なさるのである。

(2・3・2・4) 第 _{K30b1} 四・対境という籠に捕らわれていることと捕らわれていないことの区別〔を教示すること〕に、(2・3・2・4・1) 略説、(2・3・2・4・2) 広説である。

(2・3・2・4・1) 第一(略説)、

凡夫らは色に貪る。

中間の者らは貪を _{H33a5} 離れたことになる。

色の自性を知る

最上慧をえた者は解脱する。 (55) ^{1 2 5}

欲 _{K30b2} 界の凡夫らは——映像に、〔すなわち〕 表記に熟達していない凡夫のように——淨なる色に貪って、対境の泥に沈むことになる _{H33a6} も、凡夫で、禪〔天〕・無色〔界〕の心を得て欲界を超えたのに、眞実は了解してい _{K30b3} ない中間の者らは淨なる色に対する現前した貪を離れたことになるのである。

色の自 _{H33b1} 性を空性として直接に現見で遍知する最上慧をえた聖者らは、貪の種子を捨断したので輪廻 _{K30b4} より解脱することになるのである。

षत्रिष्ठापनी

त्रिष्ठाकृष्णवायस्यक्षमायद्वयम् ।
द्वं H3382 एवा त्रिष्ठावायद्वद्वक्षमायम् ।

त्रिष्ठाविश्वेषामुक्त्वद्वेवम् ।
वर्षद्वक्षमात्र्युद्वयद्वयम् ॥ (56)

द्वद्वद्वयाभावायद्वक्षमावै त्रिष्ठावायस्यामुक्त्वायद्वयम् K305 त्रिष्ठाकृष्णविश्वेषामुक्त्वद्वयद्वयम् ।
क्षमायस्यामुक्त्वद्वयम् H3383 एवा त्रिष्ठावायद्वद्वक्षमामुक्त्वायस्यामुक्त्वेष्विष्ठावायस्यामुक्त्वद्वयम् ।
द्वद्वद्वक्षमावर्षद्वयद्वयाभावायद्वक्षमात्र्युमुक्त्वेष्विष्ठामुक्त्वेष्विष्ठामुक्त्वेवायद्वयम् K306 द्वद्वविश्वेषामुक्त्वद्वयम् ।
त्र्युद्वयाभावायद्वयम् H3384 त्रिष्ठावायद्वयम् ॥

विश्वेषामुक्त्वेवायद्वयम् ।
द्वद्वयाभावायद्वयम् ॥

द्वद्वविश्वेषामुक्त्वेवायद्वयम् ॥

प्रेषामविश्वेषामुक्त्वेवायद्वयम् K31a1 विश्वेषामुक्त्वेवायद्वयम् ।
त्रिष्ठामुक्त्वेवायद्वयम् H3385 प्रेषामुक्त्वेवायद्वयम् ॥

द्वद्वद्वद्वद्वयामुक्त्वेवायद्वयम् ।
द्वद्वद्वयामुक्त्वेवायद्वयम् ॥ (57)

द्वद्वद्वद्वयामुक्त्वेवायद्वयम् ।
द्वद्वद्वद्वद्वयामुक्त्वेवायद्वयम् ।
द्वद्वद्वद्वद्वयामुक्त्वेवायद्वयम् ।
द्वद्वद्वद्वद्वयामुक्त्वेवायद्वयम् ।
द्वद्वद्वद्वद्वयामुक्त्वेवायद्वयम् ।
द्वद्वद्वद्वद्वयामुक्त्वेवायद्वयम् ॥ (57)

द्वद्वद्वद्वद्वयामुक्त्वेवायद्वयम् ।
द्वद्वद्वद्वद्वयामुक्त्वेवायद्वयम् ।

द्वद्वद्वद्वद्वयामुक्त्वेवायद्वयम् ।
द्वद्वद्वद्वद्वयामुक्त्वेवायद्वयम् ।
द्वद्वद्वद्वद्वयामुक्त्वेवायद्वयम् ।
द्वद्वद्वद्वद्वयामुक्त्वेवायद्वयम् ।
द्वद्वद्वद्वद्वयामुक्त्वेवायद्वयम् ॥

षत्रिष्ठापनी

गवामुक्त्वेवायद्वयम् ।

द्वद्वद्वद्वयामुक्त्वेवायद्वयम् ।

गवामुक्त्वेवायद्वयम् ।

K31a2, H34a2 गवामुक्त्वेवायद्वयम् ॥ (58)

¹⁸⁵ अऽस्मद् H अऽस्मद्

¹⁸⁶ त्रिष्ठां H त्रिष्ठां

¹⁸⁷ त्रिष्ठामुक्त्वेवायद्वयम् H त्रिष्ठामुक्त्वेवायद्वयम्

¹⁸⁸ त्रिष्ठां H त्रिष्ठां

¹⁸⁹ द्वद्वद्वयामुक्त्वेवायद्वयम्

(2・3・2・4・2) 第二(広説)、

淨と考ることより貪になる。

それ _{H33b2} より斥くことによって貪欲を離れた。

幻術の男のように空虚だと

見てから涅槃になる。 (56)¹²⁶

欲界の者らは、色などを淨 _{K30b1} と非如理に作意したので貪が生ずることになる _{H33a3} し、
色〔界〕・無色界の者らはそれより斥く、すなわち不淨と作意したことによって(現前
した貪欲)を離れたが、聖者らは幻術の男のように自性が _{K30b6} 空虚だと見てから涅槃 _{H33b4}
を得たことになるのである。

(2・4) 第四・解脱の利徳に、(2・4・1)個別に説くことと、(2・4・2)結末である。

(2・4・1) 第一(個別に説くこと)に、(2・4・1・1)捨断の功徳と、(2・4・1・2)了解の功徳である。

(2・4・1・1) 第一(捨断の功徳)、

誤った知によって〔有情が〕現前に煩悶 _{K31a1} するところの

煩惱という諸過失 _{H33b5} たるもの、それは

—事物・非事物を尋思する者が

義を知ることになって—生起しないのである。 (57)¹²⁷

事物に対して誤って執念した知により生じさせられる輪廻における苦によって、〔有
情が〕現前に煩悶させるところの _{K31a2} 貪欲などの煩惱 _{H33b6} こそが過失なので、煩惱とい
う諸過失たるもの、それは生起しないのである。

誰に〔生起しないの〕か〔という〕なら、縁起の義を現見に知ることになったアダガ
ラに〔生起しないの〕である。

「彼はどのような〔者〕か」というなら、事物・非事物の体を所縁とし _{K31a3} ないこと
によって、事物・非事 _{H34a1} 物を尋—すなわち意樂の裡から—空だと—思〔察〕・
了解する、すなわち十全に知る者である。

(2・4・1・2) 第二(了解の功徳)、

住処が有るならば貪欲、かつ

貪欲と離れたことになるときに

無住処。偉大な本性の者らは

_{K31a4, H34a2} 貪が無いし離貪でない。 (58)¹²⁸

ଶତଶାବ୍ଦୀଶ୍ଵର

ସମ୍ବନ୍ଧରେ କିମ୍ବା କିମ୍ବା

ଶର୍ଷାଦିପିନ୍ଦଗୁଡ଼ିକାରୀ

ੴ ਸਤਿਗੁਰ ਪ੍ਰਸਾਦਿ ਕੁਝ ਕਹੋ ਪਾਖਾਂ ॥ (59)

ଶ୍ରୀଦୁର୍ଗାମି^{H34a5}ଶ୍ରୀଵକ୍ରତୁଷ୍ଟବ୍ଦୀପତ୍ରଦୂର୍ଗା

‘**ଶୁଣିବା’**ଏହାପରି**ଦ୍ୱୟାକା** । **କିମ୍ବା**ଦ୍ୱରା**‘ଯାତ୍ରାଜୀବନକ୍ଷେତ୍ରା’**^{H34a} ଦ୍ୱରା**ଶୁଣିବା**ନୁ**କେବଳ** ସମ୍ଭାବନା**ଅଛି** । **ଏହାପରି** ଶୁଣିବା
ଶୁଣିବାପରି^{K31b} ଦେବକର୍ତ୍ତାଙ୍କୁ**ଶୁଣିବାପରି** ଏହାପରି**‘ଯତ୍ରାଜୀବନକ୍ଷେତ୍ରା’**^{H34b} ଦ୍ୱରା
ଶୁଣିବାପରି**‘ଯତ୍ରାଜୀବନକ୍ଷେତ୍ରା’**^{H34c} ।****

‘**ରୁଦ୍ରାବିନୀପେଦିତକଣ୍ଠଶ୍ଵରାପଦିତୁମାହୁମୁଦିତେଷାପ୍ରକଳ୍ପନାମ**’^{K3lb5} ରୁଦ୍ରାବିନୀପେଦିତକଣ୍ଠଶ୍ଵରାପଦିତୁମାହୁମୁଦିତେଷାପ୍ରକଳ୍ପନାମ
ଦ୍ୱିତୀୟାବିନୀପେଦିତକଣ୍ଠଶ୍ଵରାପଦିତୁମାହୁମୁଦିତେଷାପ୍ରକଳ୍ପନାମ ।

ସାମ୍ରାଜ୍ୟ'ପ'ଏକତା'ପରି'ଦ୍ୱୀ'ପ'ଏଷାନ୍ତ'ପ'ବୈ

ମୁଦ୍ରା-ପତ୍ର H34b2 ମହିନାଙ୍କେ ଶତାବ୍ଦୀ ।

ପାନ୍ଦିରବନ୍ଧୁ ପାନ୍ଦିରବନ୍ଧୁ ॥

ପଞ୍ଚକ-କର୍ମା-ଘେ-ବୈଶା-ଷଷ୍ଠୀ-ହତ-ଶତ

କୁଣ୍ଡଳ ଶିଖାରେ ପୂର୍ବମନ୍ଦିର । (60)

ହେଉଥିବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା

ଶାଦ୍ୟମାଣ' Kaliya 'କଥାମାଣ'। କେନ୍ତାଙ୍ଗ'କଥାମାଣ' ପରିଷ୍ଠୀ ।

190 श्री हनुमेश

191

K. K.

貪欲などが生じる住処、すなわち因として事物を諦と執ることが有るなら、それより欲界の者らに貪欲が生じることになり、無常を修習したことによって貪欲と離れたあとから_{H34a3}愚痴によって住する_{K31a5}ことになるときに、(宗)事物は無自性と了解するので無住処と見る偉大な本性の者・聖者らは、淨のうちに貪が無いし、不淨と執ることによって離貪、すなわち愚_{H34a4}痴によって住する者でもなくて、(因)というのも住_{K31a6}処の因が成立していないから。

(2・4・2)第二・結末、

「空虚だ」と

動搖する意も動搖しない者らが、

煩惱という蛇が攪拌することになった

凶惡な有(生存)の海を渡る。(59)¹²⁹

有の_{H34a5}海を渡ることになるのである。

「有(生存)の海」_{K31b1}どのような「もの」か」というなら、貪欲などの煩惱という蛇が攪拌して、充満することになった凶惡なものである。

誰が渡ることになるのか〔、という〕なら、瑜伽する者で、前に資糧〔道〕・_{H34a6}加行〔道〕の境地で、「一切法は自性が空_{K31b2}虚である。」と猿のように動搖する分別を本性とする意も動搖しない、すなわち心心所の残りなきすべての働きと動きが寂滅した者らである自分自身、彼が〔渡る、すなわち〕解脱することになる_{H34b1}のである。

「無自性である」と考える時に、幻術のようなといふ部類は了解していくても二顯現は_{K31b3}没していないので、非異門勝義諦を現見で見る者なのではないのである。

(3)第三・著述したことの善の廻向、

善、_{H34b2}これにより衆生全てが

福德・智の資糧を積集して

福德・智より生起したところの

勝れたもの_{K31b4}二つを得るように。(60)¹³⁰

それについては、廻向すべきものと、その為に〔廻向が〕為されるべき者と、廻向する者によって知るべきである。

二辺を除去する『六十_{H34b5}頌如理論』、これを著述したことより生起した〔身口意〕三門の善根、これにより因が作られてから、得るようになれ、である。

何を〔得るの〕か、色_{K31b5}身という勝れたものと、法身という勝れたもの二つを、である。

それはどのよう〔なもの〕か〔といふ〕なら、後得における布施と戒などの福德_{H34b4}の資糧と、等引における無我と了解する般若および更に般若の因たる墨と紙と花を供えることなどの智の_{K31b6}資糧を積集したことより生起した、すなわち生じたことになったところの〔もの〕、である。

କେନ୍ଦ୍ରୀୟାସାମନ୍ତ୍ରୀଶବ୍ଦାଧିକାରୀଙ୍କରୁ ପାଇଥାଏନ୍ତାଙ୍ଗୀରୁ¹⁴ ଶ୍ରୀଶ୍ରୀ ଶ୍ରୀ ଶ୍ରୀଶବ୍ଦାଧିକାରୀଙ୍କରୁ ପାଇଥାଏନ୍ତାଙ୍ଗୀରୁ¹⁵ ।
କେନ୍ଦ୍ରୀୟାସାମନ୍ତ୍ରୀଶବ୍ଦାଧିକାରୀଙ୍କରୁ ଶ୍ରୀଶ୍ରୀ ଶ୍ରୀଶବ୍ଦାଧିକାରୀଙ୍କରୁ¹⁶ ପାଇଥାଏନ୍ତାଙ୍ଗୀରୁ¹⁷ ।

“**ଦ୍ୱାରା ହୁଏ** ‘**ଶକ୍ତିରୀଶବ୍ଦାନ୍ତମାନୁଷ୍ଠାନି**’¹⁹² **ହାତେ** ଦ୍ୱାରା **ଶକ୍ତିରୀଶବ୍ଦାନ୍ତମାନୁଷ୍ଠାନି** ହେଉଥିଲା ଏବଂ ପରିବର୍ତ୍ତନା ହେଲା ।”¹⁹³

ଦ୍ୱାରା ପରିଚୟ କରୁଥିଲା ଏହା ପରିଚୟ କରିବାର ପରିମାଣ ଏହାଙ୍କିମାତ୍ରା ହିଁ
ଏହାଙ୍କିମାତ୍ରା ହିଁ ଏହାଙ୍କିମାତ୍ରା ହିଁ ଏହାଙ୍କିମାତ୍ରା ହିଁ ଏହାଙ୍କିମାତ୍ରା ହିଁ

K32b1 ଶୈଖା'ପରି'ଦୟନ'କୁଣ୍ଠା'ଦସିନା'କେତ'ପ୍ଲା'ଙ୍ଗିତ'ଗୁଣା ।

ହେବାନ୍ତରୁଦ୍‌ଯସରନ୍ତିପିଣ୍ଡରୁ^{H35ab} ଶାବଦକୁମାରଙ୍କିଧୟା ।

ମୁଣ୍ଡାରୀ ହେତୁ କାହାରେ ଯାଏନ୍ତି କାହାରେ ପାରିବାରି 195

୮ୟକୁଳିତ୍ୱାପରିଗ୍ରହଣଶିଖିତା ।

ଦ୍ୟୁମ୍ନିକ୍ଷେତ୍ର ଯାମଣା ଦୟୋମନା ଶାନ୍ତିକ୍ଷେତ୍ର ପଞ୍ଚକ୍ଷେତ୍ର ଏହାଙ୍କିମା ।

ମୈଶାନ' K₃₂₆₂ତୁଳ-କୁଣ୍ଡ-ଦରି-ଶ-ଶବ୍ଦ-ପାତ୍ରା-ଶ-ପିଣ୍ଡ-

ସାହୁମନ୍ଦିର-ଶକ୍ତିପଥ-ଶିଖାରୀ-ବୁଦ୍ଧପାଦ-ଶିଖା ।

H35b1 ཡང་དྟା ସନ୍ଦର୍ଭକେ ଏକଣ୍ଠା ହିଁ ଶନ୍ଦ ପରିଷ୍ଠା

192 કન્શી મણકાંગી

193

२८६

୨୮

如何なる〈その為に〔廻向が〕為されるべき者〉が〔得るの〕か、虚空の边际に遍満する衆生という有情全てが、〔得るの〕である。

「如何なる所作を為してからか」というなら、最高の聴聞・思惟の究竟から、色身の因である福徳の資糧と法身の因である智の資糧の残りなきすべてを積集して、である。

果である境位における〔仏〕身_{H34b6}と智の一切を他者の側だけにおいて建てたあと、自相続に包摶されていることは無いと主張する者、彼らは良く論じていなくて、すなわち十地の最後_{K32a2}相続において自相続に包摶されたものが有る様に、それの第二刹那において相好に装われた〔仏〕身の_{H35a1}相続が漸たれたり、他相続に移行するものではないのである。

あるいは、前者(=十地の最後相続)においても〔自相続に包摶されたものは〕無いと承認する、無いという立場を取るように。

「法の教示などの顕現は_{K32a3}自顕現に無いで他顕現のみである。」というなら、そのとおりなら、「等引である。」_{H35a2}という考えも自顕現に無いで等引も他顕現のみになるから、後得を「他顕現」と限定したのは道理ないのである。

それによってこそ、彼らは、自_{K32a4}顕現に有為などのあらゆる顕現が没していることと自相続に智_{H35a3}が有ることは相反しないと通曉しない者である。

「一切法を現見に御覧になることと、無顕現より全く受けなさらないことは相反するのである。」というなら相反しなくて、異生_{K32a5}の境地においても現見の所量であることを顕現であることが遍充しないのなら、聖者の境地_{H35a4}においては、何を語る必要があろうか。

「前者(=異生の境地)においては直接・間接の所了解・能了解が有るからである。」というなら、後者(=聖者の境地)においても、離戯論を直接に了解するし、如量を覆障していたあらゆる_{K32a6}垢が尽きているからである。

それゆえに、仏陀に自顕現が有るなら無明が捨断されていないことに_{H35a5}なるが、それ(=自顕現)が無くても一切の所知を現見に御覧になるので相反は全く無く、〈相反する〉と思うのは、「彼(=仏陀)らが御覧になるなら顕現する必要がある」と思うことである。

_{K32a1}正理の自在者・大聖者ナーガルジュナが

縁生・離辺を教示する_{H35a6}典籍の海より、

正理に隨順した智慧の撲乳棍により

百味を具えた醍醐を受け取り、

眞実の教示に善巧な善知識に依止し、かつ

正理を_{K32a2}具えた空の種子を建てる者は、

この典籍を聴聞・思惟する舌根により

_{H35b1}正しくこの最上の甘露を受け取りなさい。

196

શ્રી H શ્રી

197 H inserts

198

¹⁹⁹ H inserts

無上最上乗に住していなないのに、
長きにわたる憶測(疑)の地を渡ることになった
勝れた者の御教えという水の流れより _{K3263} 来た者は、
不放逸で甘露話の大きな庫なのだ。
事物に思念する有(生存)の海 _{H35h2} より来た者が、
常斷の辺見の川を良く渡つてから
正見の平原に〔自らを〕引き上げることを欲するなら、
教義の大船、これの内に入れ。
ああ、_{K32h4} 有暇を得た善き機縁、
最上道を教示する善き友を獲得し、
甚 _{H35h3} 深なる真相の義を信じる
私は、今日より一切の生において
百の功徳を具えた善知識に依止しつつ、
無垢の _{K32h4} 三学を意により恭敬をもって承受してからは、
如理が心において散乱すること無き _{H35h4} ように。
私が、外は火の穴に囮まれ、
肉と骨を粉碎する
燃える鉄の館に須臾に住する者のなかの
勝れた者らを罵倒することになってい _{K32h6} ないように。
善巧たらんと欲して善巧なる衆生を罵倒したり、
戒を具えんと欲するために _{H35h5} 他者の過誤を論い、
善を欲して他者の過悪を捜し求める
友と決して出会いにならないように。
そのような純白無垢の善、それによって、
辺執という _{K33a1} 他のものが支配することになった老母らが、
縁生・離辺・中の義を了解し _{H35h6} て、
無所縁・法身の境位を速やかに得るよう。

²⁰⁰ K inserts the following pssages.

၁၅၂

ଅକ୍ଷ-ଦେବ-ପୁଣ୍ୟ-ଶରୀର-କୃତ-ପାତ୍ର-ଦୂର-ଦୂରୀ
ମୁଖ-କୁଳ-ଦୂରୀ-ଗୁରୁ-ପର-କୁଳିଣ-ଦୂରୀ-ପର-ଦୂରୀ ।
ଶୁଦ୍ଧ-ଶ୍ରୀ-ରାମ-ମୋହନ-ଶୁଦ୍ଧ-ଶ୍ରୀ-କୁଳିଣ-ଶୁଦ୍ଧ-କୁଳିଣ ।
କୁଳିଣ-ଶ୍ରୀ-ରାମ-ଦୂରୀ-ପର-ଦୂରୀ-ଦୂରୀ-କୁଳିଣ-ଶ୍ରୀ-ଶ୍ରୀ ॥

『偉大な本性の者・聖者ナーガルジュナが著作した中觀六十頌如理論の疏・妄論^{K33a2}を砕破するというもの』、これは、無所縁の智恵と限量^{HB6a1}無き御悲しみを有しなさり、特にまた、縁生の諸法を水の内の月の姿のように通暎なさつた「一切知者、吉祥を具えたレンダーワ」^{K33a3}と周知されたその方自身と、その方自身の御子息のなかの長兄、三学を眼^{HB6a2}球よりも特に大切に執る者、特にまた、私のような勝れていない、過誤の部類を執る衆生にとって堪えられない大悲を有しなさる一切^{K33a4}知者、ロサンタクペーペルお二方の御足に^{HB6a3}〔頭を〕着けて離れない信を具えた者、タルマリンチェンが——律儀に精進し〔三〕藏を保持する多くの者に促されつつ、〔『中論』、『律經』、『現觀莊嚴論』、『俱舍論』の〕四書を保持するゲンドウン・ギエルツエンが紙と^{K33a5}墨で順縁を結んでから——空閑所ヨルで著したものである。

^{HB6a4}これを書いた善根に縁って、中觀の無顛倒な見の義を了解しつつ通暎することになるように。

^{K33a6} ¹³¹サルヴァ・マンガラム(一切の幸あれ)。

引用書目

經典

- 『寶星陀羅尼經』 *Āryamahāsannipātaratnaketudhāraṇīnāmamahāyānasūtra.*
'phags pa'dus pa chen po rin po che tog gi gzungs zhes bya ba theg pa chen po'i mdo, Toh.138, D Na187b3-277b7.
- 『無熱惱龍王所問經』 *Āryānavataptanāgarājaparipṛccchānāmamahāyānasūtra.*
'phags pa klu'i rgval po rgya ma dros pas zhus pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo, Toh.156, D Pha206a1-253b7.
- インド撰述論書
- 『廻諍論』 *Vigrahavyāvartanīkārikānāma.*
rtsod pa bzlog pa'i tshig le'ur byas pa zhes bya ba, Toh.3828, D Tsa27a1-29a7.
- 『廻諍論註』 *Vigrahavyāvartanīytti.*
rtsod pa bzlog pa'i 'grel pa, Toh.3832, D Tsa121a4-137a7.
- 『現觀莊嚴論』 *Abhisamayālankārānāmaprajñāpāramitopadeśāstrakārikā.*
shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan zhes bya ba'i tshig le'ur byas pa, Toh.3786, D Kal1a1-13a7.
- 『四百論』 *Catuḥśatakaśāstrakārikānāma.*
bstan bcos bzhi brgya pa zhes bya ba'i tshig le'ur byas pa, Toh.3846, D Tsha1a1-18a7.
- 『四百論註』 *Bodhisattvavayogācāracatuhśatakaṭīkā.*
byang chub sems dpa' rnal 'byor spyod pa bzhi brgya pa'i rgya cher 'grel pa, Toh.3865, D Ya30b6-239a7.
- 『中觀五蘊論』 *Pañcasandhaprakaraṇa.*
phung po lnga'i rab tu byed pa, Toh.3866, D Ya239b1-266b7.
- 『中論』 *Prajñānāmamūḍilamadhyamakakārikā.*
dbu ma rtsa ba'i tshig le'ur byas pa shes rab ces bya ba, Toh.3824, D Tsa1a1-19a6.
- 『入中論』 *Madhyamakāvatāranāma.*
dbu ma la 'jug pa zhes bya ba, Toh.3861, D 'A201b1-219a7.
- 『入中論自註』 *Madhyamakāvatārabhāṣyanāma.*
dbu ma la 'jug pa'i bshad pa zhes bya ba, Toh.3862, D 'A220b1-348a7.
- 『寶鬘』 *Rājaparikathāratnamālā (Ratnāvalī).*
rgyal po la gtam bya ba rin po che'i phreng ba, Toh.4158, D Ge107a1-126a4.
- 『菩提心积』 *Bodhicittavivarjanāma.*
byang chub sems kyi 'grel pa zhes bya pa, Toh.1800, D Ngi38a5-42b5

『明句論』 *Mūlamadhyamakavṛttiprasannapadānāma.*

dbu ma rtsa ba i 'grel pa tshig gsal ba zhes bya ba, Toh.3860, D 'A1a1-200a7.

『六十頌如理論』 *Yuktisāsthikārikānāma.*

rigs pa drug cu pa i tshig le 'ur byas pa zhes bya ba, Toh.3825, D Tsa20b1-22b6.

『六十頌如理論註』 *Yuktisāsthikāvṛtti.*

rigs pa drug cu pa i 'grel pa, Toh.3864, D Ya1a1-30b6.

チベット撰述論書

『善説心髓』 *legs bshad snying po.*

drang ba dang nges pa i don mam par 'byed pa i bstan bcos legs bshad snying po (『末了と了の義を弁別する論書・善説心髓』), Toh.5396, Pha K1a1-119a5; H1a1-114a1.

『解説・心髓莊巖』 *rnam bshad snying po i rgyan.*

shes rab kyi pha rol tu phyin pa i man ngag gi bstan bcos mnгон par rtogs pa i rgyan gyi 'grel pa don gsal ba i rnam bshad snying po i rgyan ces bya ba (『般若波羅蜜多經口訣の論書・現觀莊巖註・明義の解説・心髓莊巖』), Toh.5433, Kha K1a1-354a5; H1a1-346a6. (『現觀莊巖論根本偈』とハリバドラの『小註』(『明義』*Sphuṭārtha*), Toh.3793, D Ja78b1-140a7に対する註釈書)

参考文献

瓜生津 2004

瓜生津 隆真「六十頌如理論」(梶山隆一、瓜生津隆真『龍樹論集』) (中央公論新社、2004)

瓜生津 2023

瓜生津 隆真『龍樹(ナーガールジュナ) : 空の論理と菩薩道』(大法輪閣、2023)

本庄

本庄 良文『俱舍論註ウバーイカーの研究 訳註篇上』(『阿毘達磨俱舍論釈ウバーイカー』(*Abhidharmakośaṭīkāyikānāma; chos mnong pa i mdsod kyi 'grel bshad nye bar mkho ba zhes bya ba*, Toh.4094, D Ju1a1-287a7.)の蔵訳よりの註付き和訳研究)

松本

松本 史朗『チベット仏教哲学』(大藏出版、1997)

横山

横山 剛『中觀五蘊論 : 全訳チャンドラキールティ』(起心書房、2021)

李・叶

李 学竹 叶 少勇『六十如理頌 梵藏漢合校・異読・訳註』(梵藏漢仏典叢書②) (中西書局、2014)

Amano

Abhisamayālamkāra-kārikā-sāstra-vivṛti, *Haribhadra's Commentary on the Abhisamayālamkāra-kārikā-sāstra*, Edited for the first time from a Sanskrit manuscript By Koei H. Amano, Heirakuji-Shoten, Kyoto, 2000.(ハリバドラ『現觀莊嚴論小註』の梵語原典)

de la Valée

Mūlamadhyamakārikās (Mādhyamikasūtras) de Nāgārjuna avec la Prasannapadā Commentaire de Candrakīrti. Publiée par Louis de la Valée Poussin (Biblioyheca Buddhica IV.), Meicho-fukyū-kai, 1977.

Hahn (ed.)

Hahn, Michael, *The Basic Texts (Sanskrit, Tibetan, Chinese) (Nāgārjuna's Ratnāvalī)*, Indica et Tibetica Verlag, 1982.

Kumar

B. Kumar: "The Critical Edition of Yuktiṣṭhika-Kārikā of Nāgārjuna", *The Tibet Journal* 18.3 (1993), pp. 3-16.

Li (ed.)

Madhyamakāvatāra-kārikā Chapter 6 in: *Journal of Indian Philosophy*, Dordrecht, vol. 43, iss. 1, Mar. 2015, pp. 1-30 (published with open access at Springerlink.com).

Lindtner

Lindtner, Christian, *Nagarjuniana: Studies in the Writings and Philosophy of Nāgārjuna*, Motilal Banarsi-dass, First Indian Edition: Delhi, 1987.

Suzuki (ed.)

Sanskrit Fragments and Tibetan Translation of Candrakīrti's *Bodhisattvayogācāracatuhśatakaṇikā*, The Sankibo Press, 1994.

Tshultrim (ed.)

Tsongkhapa's Essence of True Eloquence, by Tsong khapa, Critically edited by Tshultrim Kelsang Khangkar, Published by the Tibetan Buddhist Culture Association Minamida-cho 22-9, Jodo-ji, Sakyo-ku, Kyoto, Japan, 2021.

¹ D Ts20b1-2.

एतद्युक्तिपूर्वकेणाद्यग्ना ॥(a)...

D Ya2a3; 瓢生津 2004, p. 11.

एतद्युक्तिपूर्वकेणाद्यग्ना प्रदीपिक्षुमुख्यमात्राय ॥(ab)...

namas tasmai munindrāya prafitotpādavādine |... (李・叶 p. 2)

*[...yenānenā vidhānenā niśiddhāv udayavyayau ||

歸命三世觀釋主 宣說緣生正法語

若了諸法離緣生 所作法行如是離 (T 1575, Vol. 30, 254b23-24)

² Toh.4158, D Ge107a4, I k. 5a, Hahn (ed.), p. 2f.

śrāddhatvād bhajate dharmam

因信能持法。(T 1656, Vol. 32, 493b15)

- ³ D Tsa20b2.
 ལྷ ༜ རྒ སྤ རྒ
 D Ya3b4; 瓜生津 2004, p. 15.
 ལྷ ༜ རྒ
 (a)... ད୍ୱ
 astinātrivyatikṛta buddhi yeṣām nirāśrayā |
 gambhīras tair nirālambah prat�ayārtha vibhāavye || (Lindtner p. 102; 李 · 叶 p. 4)
 離無有二邊 智者無所依
 甚深無所緣 緣生義成立 (T1575, Vol. 30, 254b25-26)

- ⁴ 『宝星陀羅尼經』 DNa189a7-b1 (b2-3)

Mahāsannipātaratnaketudhāraṇisūtra
karmakesasāhetukāraṇavati lokaprvyptir yathā
karmalesanivṛttikāranam api provāca tarī nāyakah |
yasmīn janmāravipattiniyataṁ duḥkhāraṇa na santiṣṭhate
tarī mokṣapravarāṇā sa vādīvyaśbho jñātā svayāri bhāṣate || I.2 ||
『寶星陀羅尼經』T402, Vol. 13, 537b9-12 (c7-10).

煩惱業因緣 世間如是轉
煩惱業不生 導師如是說
生老死定壞 彼解脫無上
如彼勇牛王 如來自悟說
『大方等大集經』『寶幢分』T397(9), Vol. 13, 129a24-28.
法從緣生。通達是因。因緣滅故。即是寂靜。世間即苦。苦因名集。若修八正。世間集滅。若無苦集。我師說言。名為涅槃。善男子。我師唯說如是等法。

- ⁵ 『入中論』 k. 1c. D 'A201b2; 『入中論註』 D 'A220b3. ‘kāruṇyacittādvayabuddhi...’
⁶ 『入中論註』 D 'A225b3-4.

दैवीके 'एकाशमणि' वर्णन के द्वारा अवश्यकता नहीं है। इसका उल्लेख एक विश्वासात्मक विषय है।

- その際、人無我を現見に見ることはないのであって、というのも再び生じない

D Ya4a7; 瓜生津 2004, p. 17.

- *[sarvadoṣākaras tāvad abhāvo vinivāritah] 若謂法無性 卽生諸過失 (T1575, Vol. 30, 254b27)

- ⁸ 『明句論』参照。

Toh.3860, D 'A13a4-5.

世尊が「比丘らよ、これは勝れた諦であって、すなわち欺き無き法を有する涅槃である。……」云々とお説きになつたのである。

uktarī bhagavatā etad dhi bhikṣavāḥ paramāṇi satyāṇi yad uta amoṣadharma nirvāṇam...ityādi | (de la Valée, p. 41, ll. 4-5.)

ପ୍ରମାଣିତ କାହାର ଦେଶରେ ଏହା ନାହିଁ ।

縁起生の義、それが一相として見て、次第に数習してから無明が残りなく滅して、縁起生の体性を所縁とする知に安住する者が現法において涅槃すること、および〔涅槃と〔知に安住する者〕〕所作・能作として建立するが、他として〔建立したの〕ではないのである。

27 Toh.3861, D 'A211a7-b1, k. VI 145.

၂၁၇
၂၁၈

ପର୍କେ'ପଦ୍ମ'ପାଦ'ହନ'ଫୁଲ'ଚୀଶ'ପଦ୍ମିଶ'ପଦ୍ମିଶ'

ମୁହଁ ଯା କେଣା ତୁ ମୁହଁ କୁଳ ଲୁହ ପାଶକନା ଏ

ଓ'କ'ାନ'ପ'ର'ମ'ନ'ା

見の山——無我を了解する金剛により

碎破された我がそれと一緒に消滅することになるところのもの——とは

有身見という高大な山に存在し、

頂の高くなつたもの、これらである。

etāni tāni śikharāṇi samudgatāṇi satkāyadṛṣṭivipulācalasāṁsthitāṇi

nairātmyabodhakuliśena vidāritātmā bhedam prayāti saha tair api dṛṣṭisailah || (Li (ed.), p. 22.

この偈頌だけでは、有身見と預流との関連はよく分からぬが、『入中論自註』Toh.3862, D'A302b5-7には、

ଦେଖିଲେଣକାହାରେ ଥିଲେ କେବଳ ମୁକ୍ତିପାଦି ଏବଂ ମୁକ୍ତିପାଦିରେ ଥିଲେ କାହାରେ

ସମ୍ବନ୍ଧରେ କଥା ପାଇଁ ପିଲା

ସର୍ବକାନ୍ତରେ ଏହାର ପରିମାଣ ଅଧିକ ହେଉଥିଲା

ପ୍ରଥମ କେଣାଶ୍ଵଳୀ ଏବଂ ଅନ୍ତର୍ଗତ ସାହୁରାଜୀ

କେବୁଣ୍ଠିମାନଙ୍କୁହୀଣ୍ଠିମାନେ ।

३० श्रीकृष्णामृतम् विद्युति श्रीकृष्णामृत

ਬਹੁਤ ਸਾਰੀਆਂ ਮੈਂਦਰਾਕਸ਼ਾਲੀਨਾਂ ਵਿਖੇ ਪ੍ਰਭਾਵ ਪੈਂਦੇ ਹਨ। ਇਹ ਅਨੇਕ ਸਾਰੀਆਂ ਮੈਂਦਰਾਕਸ਼ਾਲੀਨਾਂ ਵਿਖੇ ਪ੍ਰਭਾਵ ਪੈਂਦੇ ਹਨ।

そのうち、「有身見という山の二十の高き頂を智の金剛によって破碎してから預流果を現証したのである。」と何で基督教にお説きになったのか、

見の山——無我を了解する金剛により

碎破された我がそれと一緒に消滅することになるところのもの——とは

有身見という高大な山に存在し、

頂の高くなつたもの、これらである。

有身見という山——聖者の智の金剛が下されないことによって毎日煩惱の岩石が増大したもの、無始の輪廻から生起したものの、高さが三界ほど高いもの、方角を余すことなく満たすもの、無明という黄金の大本地より聳えたもの——を無我に通曉する金剛によって消滅させたときに、一緒に消滅することになるところの頂の大きい高き諸々のもの、それらが〔二十〕の頂なのだと知るべきである。

と、有身見を断つて預流果を現証することが明記されている。

なお「有身見」という山の二十の頂」とは、五蘊の各々について「……は我である」「我は……を具えている」「……に我は有る」「我に……は有る」の四句分別をして、二十見となしたもののことである。『入中論自註』Toh.3862, D'A302a6-b4 ad Toh.3861, D'A211a6-7, k. VI 144 参照。

²⁸ 『中觀五蘊論』では、有身見は見所断のうちの見苦所断のみに含まれ、修所断には全く含まれない。Toh.3866, D.Ya260a2-5, b5-261a1;横山 p.104, pp.105f参照。

29 D Tsa20b5-6.

...କିଷ୍ମେନାହଦ୍ରହିଷ୍ମଦ୍ରଶୁନ୍ମା ।(d)

D Ya8b5; 瓜生津 2004, p. 30.

କୁମାର'ଦେଖିଲା'ରା'ଦଶୀତଥ୍ରୁ'ଶ୍ଵରୀ'। ଯତନା'କୁଳା'ତେଜା'ଦଶା'ପା'ଫିକ'ର୍ତ୍ତ' ନେ'ବେ'ନ୍ତା'ପର୍ବତ'କ'ନୂତା'ଦଶା' ବିଜା'ତେଜା'ଦଶ'ହି'ଜ୍ଞାତା'।

*[samskrto na pariññato nirodho vibhaye sati]

pratyaksam bhūyate kasmin vibhavo jñāyate katham |

若滅有所壞 知彼是有為

現法尚無得 復何知壞法 (T1575, Vol. 30, 254c10-11.)

³⁰ D Tsa20b6, D Ya10a5; 瓜生津 2004, p. 34.

*[yadi skandhanirodhena bhaven na kleśasariksayah

彼諸蘊不滅 染盡卽涅槃 (T1575, Vol. 30, 254c12)

³¹ 『六十頌如理論註』 Toh.3864, D Ya10a7-b1. 參照。

དྲྲ རାତ୍ରିନ୍ଦରା ପକ୍ଷିମି ଶେଷା ଶେଷା ପୁରୀ ହେଣା କି ପାଶ୍ଚଦା ପୁରୀ କୁଣ୍ଡା ପାଞ୍ଚାମିଳା ପାଞ୍ଚାମିଳା

そのうち、経部での「この苦は」という句は現在だけの苦に関わっていて、「残りなく捨断された」から「没することになった」に至るまでお説きになつたのである。

未来の苦に関わって、「他の苦が結生しない」から「涅槃は尽きたのである。」という〔に至るまでの〕句は、現在だけの苦の生でないと教示するものである。

「これ以外の有(生存)は知らないのである。」という句は、未来の苦と結び付くと決定しているのである。

³⁻² 「雜阿含經」卷第十三(306)T99, Vol. 2, 88a9。「彼苦無餘斷。」『四百論註』Toh.3865, D Ya156a3;『俱舍論』訛ウパーイカ』Toh.4094, D Ju98b7, 本庄 p. 271 参照。

³³ 『六十頌如理論註』 Toh.3864.D.Ya10a5-6 參照。

この苦は残りなく捨断された、放棄された、浄化することになった、尽きた、貪欲を離れた、滅した、寂靜した、没したこと……

³⁴ 『雜阿含經』T99, Vol. 2, *passim*. 「自知不受後有」『入中論自註』Toh.3862, D'A343a2 參照。

³⁵ 『雜阿含經』T99, Vol. 2, *passim*. 「我生已盡」『入中論自註』Toh.3862, D'A343a2 參照。

³⁶ この部分のタルマリンチェンの記述は『六十頌如理論註』本文の記述が圧縮されており、少々わかりにくい。

『六十頌如理論註』では、「この苦は残りなく捨断された」と「これ以外の有(生存)は知らないのである。」とは別の経からの引用であり、前者の経文の前段に「生は尽きた」という文言が来る。『六十頌如理論註』の解説によれば、「生は尽きた」は、「この苦は残りなく捨断された」と同じく現在の苦に関わるものであり、「これ以外の有(生存)は知らないのである。」のような未来の苦に関わるものではない、という。註31参照。

³⁷ 『宝鑑』 Toh.4158, D Ge108a5-6, I k. 35ab, Hahn (ed.), p. 14f.

skandhagrāho yāvad asti tāvad evāham ity api |

陰執乃至在 我見亦恒存 (T 1656, Vol. 32, 494a15)

『入中論自註』 Toh.3862, D'A227a1 參照。

3 8 『六十頌如理論註』 Toh.3864, D Ya10b4-5 參照。

3 9 註 4 參照。

4 0 Toh.138, D Na188b6.

दिव्यगुरुकृति त्रयीषाकेषाम् द्विषाम् एवं द्विषाम् एवं द्विषाम्
『寶星陀羅尼經』 T402, Vol. 13, 537b13-14.

爾時優波底沙聞此法已。……得須陀洹果。

『大方等大集經』「寶幢分」 T397(9), Vol. 13, 129a28-29.

優波提舍聞是語已。得。……名須陀洹。

4 1 『律本事』 Toh.1, D Ka39b6-40a3.

दिव्यकृद्विषाम् एवं द्विषाम् एवं द्विषाम् ||

それから、具壽シャーリップトラは以下のように思つて、……心が解脱したのである。

『根本說一切有部毘奈耶出家事』卷第二 T1444, Vol. 23, 1028c17-18.

時具壽舍利子、斷諸煩惱、證阿羅漢果。

『別譜釋迦陀含經』卷第十一(203) T100, Vol. 2, 449b22-24.

時舍利弗如是觀察。諸法無常。即便離欲證成。棄捨諸見。無生 漏盡。心得解脱。

4 2 D Tsa20b6.

एवं केऽप्यद्विषाम् एवं द्विषाम् ||(c)...

D Ya11a4; 瓜生津 2004, p. 37.

एवं केऽप्यद्विषाम् एवं द्विषाम् ||(c)...

*[yadā cāyām niruddhalḥ syāt tadā mokṣo bhavishyati ||]

若了知滅性 彼即得解脱 (T1575, Vol. 30, 254c13)

4 3 D Tsa20b6-7.

अस्मिन्नेत्रविश्वामूलवाय अद्विषाय देवाग्नियजिष्ठाम् एवं द्विषाम् ||(a-c)...

D Ya11a7; 瓜生津 2004, p. 37f.

अस्मिन्नेत्रविश्वामूलवाय अद्विषाय देवाग्नियजिष्ठाम् एवं द्विषाम् ||(ab)... एवं अद्विषाय देवाग्नियजिष्ठाम् एवं द्विषाम् ||(d)

avidyapratyayotpanne samyagñānānāvalokite |

utpādo vā nirodhō vā na kaścid upalabhyate ||(李・叶 p. 22)

若生法滅法 二俱不可得

正智所觀察 從無明緣生 (T1575, Vol. 30, 254c14-15)

4 4 D Tsa20b7.

D Ya11b7; 瓜生津 2004, p. 39.

अस्मिन्नेत्रविश्वामूलवाय अद्विषाय देवाग्नियजिष्ठाम् एवं द्विषाम् ||

dr̥ste dharmae ca nirvāṇān kṛtakṛtyaiḥ tad eva ca |(李・叶 p. 22)

若見法寂靜 諸所作亦然 (T1575, Vol. 30, 254c16)

4 5 註 24 參照。

4 6 D Ya12a2-3.

4 7 D Tsa20b7.

D Ya12a6; 瓜生津 2004, p. 40.

केषम् एवं द्विषाम् एवं द्विषाम् एवं द्विषाम् ||

*[dharmajñānam parariñ yatra bhedas tu tatra vidyate ||]

知此最勝法 獲法智無邊 (T1575, Vol. 30, 254c17)

4 8 D Tsa20b7-21a1.

...କୁମାର'ପି'ବନ୍ଦା'ଦ୍ୱା'ଖା'ନ୍ତି|| (c) ...

- D Ya12a6; 瓜生津 2004, p. 40.
 त्रिवृक्षुष्वर्द्धंस्वायत्तं ||(a)...

*[atistūkṣmasya bhāvasya jātir yena vikalpitā |
 prayatyodbhavam artham na paśyati so 'vicakṣanāḥ ||]
 緣生性可見 是義非無見
 此中微妙性 非緣生分別 (T1575, Vol. 30, 254c18-19)

4 9 「繁雜な分類を好む」の意。

5 0 D Ts20b7-21a1.
 ... स्मृत्युक्त्वानां तु कृत्वा पूर्वा चिह्नं कृत्वा चिह्नं ||(cd)
 D Ya13b2-3; 瓜生津 2004, p. 43f.
 ... एवं च एवाद्युक्त्वा कृत्वा चिह्नं चिह्नं तु कृत्वा पूर्वा चिह्नं कृत्वा चिह्नं ||(b-d)
 *|[sarikleśakimbhūṣṇāḥ samsārā cen niवāryate |
 kutah sampannabuddhaś ca tasyārambho na bhāṣitāḥ ||]
 佛正覺所說 有說非無因
 若盡煩惱源 卽破輪迴相 (T1575, Vol. 30, 254c20-21)

5 1 D Ts21a1-2.
 D Ya14a1; 瓜生津 2004, p. 45.
 ... अप्यमस्तु व्याप्तिरात्मावैति ||(b)
 *|[ārambhe sati caikāntē bhave dṛṣṭiparigrahah ||]
 諸法決定行 見有作有取 (T1575, Vol. 30, 254c22)

5 2 D Ts21a2.
 त्रिवृक्षुष्वर्द्धंस्वायत्तं ||(c)...

D Ya14a5-6; 瓜生津 2004, p. 45.
 *|[yah pravyasamutpādās tasya pūrvarī parāḥ vā kīm ||]
 前後際云何 從緣所安立 (T1575, Vol. 30, 254c23)

5 3 D Ts21a2.
 कृत्वा कृत्वा चिह्नं कृत्वा कृत्वा चिह्नं कृत्वा ||

D Ya14a4; 瓜生津 2004, p. 45.
 त्रिवृक्षुष्वर्द्धंस्वायत्तं ||
 *|[samutpannarī kathari pūrvarī paścāt punar niवāryate ||]
 云何前已生 彼後復別轉 (T1575, Vol. 30, 254c24)

5 4 註 52 參照。

5 5 D Ts21a2.
 D Ya14a6; 瓜生津 2004, p. 46.
 त्रिवृक्षुष्वर्द्धंस्वायत्तं ||(c)...

*|[piरvāparāntavihino moksah khyātir māyopamah ||]
 故前後邊際 如世幻所見 (T1575, Vol. 30, 254c25)

5 6 D Ts21a2-3.
 D Ya14b2; 瓜生津 2004, p. 46.
 एवं त्रिवृक्षुष्वर्द्धंस्वायत्तं ||(ab)... त्रिवृक्षुष्वर्द्धंस्वायत्तं ||(d)
 *|[bhavatidānī yadā māyā naksyattī tadaiva hi |
 māyājñānaparabhūto māyājñānena mohitaḥ ||]
 云何幻可生 云何有所著

癡者於幻中 求幻而為實 (T1575, Vol. 30, 254c26-27)

- 5 7 D Tsai21a3.
 श्रीद्वार्षिकाकृत्त्वाद्यत्परम् | (a) अभ्यामप्तस्तुव्याप्तिं प्राप्नुया | (d)
 D Ya14b5; 瓜生津 2004, p. 47.
 श्रीद्वार्षिकाकृत्त्वाद्यत्प्रियमवृद्धव्याप्तिं प्राप्नुया | (ab)
 * [yathā maricikā māyā bhavam buddhyā hi paśyati |
 pūrvāntarān vāparāntarān vā na drṣṭyā parikliṣyate ||]
 前際非後際 執見故不捨
 智觀性無性 如幻焰影像 (T1575, Vol. 30, 254c28-29)

5 8 D Tsai21a3-4.
 ...प्रस्तुत्येवाकृत्त्वाद्यत्परम् | (d)
 D Ya14b7-15a1; 瓜生津 2004, p. 47.
 ...श्रीद्वार्षिकाकृत्त्वाद्यत्परम् | (b-d)
 * [sariskṛtaṇe hi manyante bhangotpādavikalpitam |
 pratiṣṭyotpādacakreṇa vijānanti na te jagat ||]
 若謂生非滅 是有為分別
 而彼緣生輪 隨轉無所現 (T1575, Vol. 30, 255a1-2)

5 9 現量・比量・譬喻量・聖教量の四つ。

6 0 『四百論註』Toh.3865, Ya229a5; Suzuki (ed.) p. 372, II. 1-2, p. 373, II. 6-8.
 द्विकृत्याद्यत्प्राप्तवृद्धव्याप्तिं कृत्याग्निर्दर्शनाद्यत्प्रियमवृद्धव्याप्तिं व्युत्पत्त्वासर्वकृत्याद्यत्प्राप्तवृद्धव्याप्तिं व्युत्पत्त्वाद्यत्प्रियमवृद्धव्याप्तिं |
 tad evāri parikṣayamānā bhāvāḥ svabhāvāsiddhā na bhavantū saiva māyopamatāvāsiṣyate bhāvānām |
 そのように十全に伺察したときに諸事物の自性が成立していることにならないので、それぞれ諸事物に幻術のごときもの、それこそが残余することになるのである。
 の趣意。

本文の「सर्ववृद्धव्याप्ति」は、『入中論自註』のものを上の引用文中の「सर्ववृद्धव्याप्ति」と混同したのかもしれない。

次註参照。なお、サンスクリット原文に「सर्ववृद्धव्याप्ति」に該当する語は無い。

6 1 『入中論自註』Toh.3862, A'252a3.
 सर्ववृद्धव्याप्तिं विद्याद्यत्प्रियमवृद्धव्याप्तिं...
 なりなりて、言葉である程度のものが残ることになる……

6 2 『入中論自註』の誤りか。 Toh.3862, A'255a5.
 ...सर्ववृद्धव्याप्तिं कृत्याद्यत्प्रियमवृद्धव्याप्तिं व्युत्पत्त्वासर्वकृत्याद्यत्प्रियमवृद्धव्याप्तिं कृत्याद्यत्प्रियमवृद्धव्याप्तिं...
 ……異生らの勝義であるもの、それこそが顕現を伴う行境を有する聖者らの唯世俗なのだ……

6 3 『入中論』Toh.3861, D'A205a5-6, k. VI 23ab; 『入中論自註』Toh.3862, D'A253a5.
 दर्शनाग्राह्यद्वयाद्यत्प्रवृद्धव्याप्तिं व्युत्पत्त्वासर्वकृत्याद्यत्प्रियमवृद्धव्याप्तिं |
 samyagmṛṣādarśanālabdhahabharā
 rūpadvayāt bibhrati sarvabhāvāḥ | (Li (ed.), p. 7.)

6 4 Toh.60, D Nga62a2.
 गुरुकृत्याद्यत्प्रवृद्धव्याप्तिं व्युत्पत्त्वासर्वकृत्याद्यत्प्रियमवृद्धव्याप्तिं |
 『父子合集經』 T320, Vol. 11, 942b12.
 此依世俗談真諦 由染慧故起顛倒
 『大寶積經』 「菩薩見實會第十六」 T310(16), Vol. 11, 379a7.

於俗諦中說眞者 彼顛倒慧應當知

6 5 Toh.3861, D 'A208a2, k. VI 80ab;

शक्तदर्शवाक्यासुशूर्वादन् ॥

द्विवादवाक्यासुशूर्वादन् ॥

Toh.3862, D 'A274b4-5.

शक्तदर्शवाक्यासुशूर्वादन् ॥

द्विवादवाक्यासुशूर्वादन् ॥

upāyabhūtarūpi vyavahārasat�
upayabhuṭarūpi paramārthaśat� | (Li (ed.), p. 14.)

6 6 Toh.3861, D 'A215a4-5, k. VI 226; Toh.3862, D 'A325a5-6.

गुरुत्वेन उद्दिष्टवाक्यासुशूर्वादन् ॥

द्वयादेव त्रिपादेव स्त्रियोदयादेव ॥

अनुवृत्तवाक्यासुशूर्वादन् ॥

त्रिपादेव अनुवृत्तवाक्यासुशूर्वादन् ॥

jinagūṇajaladheḥ pararī sa pāraṇī

vrajati puraskṛta eṣa janmihariṇīḥ |

śubhapavanabaleṇa rājahariṇīḥ

prthusitasarivytitattvajātakṣaḥ | (Li (ed.), p. 30.)

6 7 『中論』 Toh.3824, D Tsa15a6, k. XXIV20 acd; 『明句論』 Toh.3860, D 'A168a3-4.

एवं तद्विवादवाक्यासुशूर्वादन् ॥

द्वयादेव द्विवादवाक्यासुशूर्वादन् ॥

de la Valée, p. 505, l. 18, p. 506, l. 1.

yady asūnyam idāni sarvam [udayo nāsti na vyayah] |

caturjām āryasatyānām abhāvas te prasajyate ||

『中論』「觀四諦品第二十四」T1564, Vol. 30, 33b23-24.

若一切不空 [則無有生滅]

如是則無有 四聖諦之法

6 8 「菩提心軒」 Toh.1800, D Ngi41b4-5, k. 88.

क्षेत्रक्षमार्हताद्यद्विषयासुशूर्वादन् ॥

द्विवृत्तवाक्यासुशूर्वादन् ॥

6 9 『現觀莊嚴論』 Toh.3786, D Ka 10b7-11a2, kk. V40-42.

द्वयादेव द्विवादवाक्यासुशूर्वादन् ॥

त्रिपादेव द्विवादवाक्यासुशूर्वादन् ॥

क्षेत्रक्षमार्हताद्यद्विषयासुशूर्वादन् ॥

क्षेत्रक्षमार्हताद्यद्विषयासुशूर्वादन् ॥

क्षेत्रक्षमार्हताद्यद्विषयासुशूर्वादन् ॥

क्षेत्रक्षमार्हताद्यद्विषयासुशूर्वादन् ॥

क्षेत्रक्षमार्हताद्यद्विषयासुशूर्वादन् ॥

所縁の妥当性¹、それの 自性を決持すること²、

一切相知性智³、 勝義⁴、 世俗⁵、

加行⁶、 三宝⁷⁻⁹、 方便を伴うもの¹⁰、 牟尼の〔現〕観¹¹、

顛倒¹²、 道を伴うもの¹³、 対治・所対治両者¹⁴、

相¹⁵、 修習¹⁶についての、論者らの邪分別が

一切相知性を所依とする 十六行相だと主張なさる。

Amano, p. 97, ll. 1-6.

älambanopapattau ca tatsvabhāvāvadhārane |
sarvakārajanītājñāne paramārtha sasārvittau ||
prayoge triṣu ratneshu sopāye samaye muneh |
viparyāse samārge ca pratipakṣavipakṣayoh ||
lakṣaṇe bhāvanāyāṁ ca matā vīpratipattaya
sarvakārajanītādhāraḥ sodha daśa ca vādinām ||

上の偈頌の和訳に示した十六行相の内訳は、『解説・心髓莊嚴』*rnam bshad snying po'i rgyan* の以下の記述(Toh.5433, Kha.K301b2-5; H302a1-4)に基づく(Cf. Amano, p. 97, ll. 7-21; Toh.3793, DJa129a4b2.)。

十六とは何かというなら、道を修習する所縁行相¹²についての邪分別二つと、修習の果³についての邪分別一つと、基体の真相である世俗⁴と、勝義諦⁵が妥当でないと論難すること二つと、行⁶が妥当でないと帰謬すること一つと、行の所依⁷・帰依⁸・対境⁹を伴うものが妥当でないと帰謬すること三つと、行の限定¹⁰が妥当でないと帰謬すること一つと、現觀¹¹と、それの所捨断¹²が妥当でないと帰謬すること二つと、道の体¹³が妥当でないと帰謬すること一つと、捨断・対治の区分¹⁴が妥当でないと帰謬すること一つと、所修習である自(相)・共相¹⁵が妥当でないと帰謬すること一つと、それを修習すること¹⁶が妥当でないと帰謬すること一つである。

70 D Tsa21a4.

D Ya15a6, 7; 瓜生津 2004, p. 48.

tat tat prāpya yad utpannāṁ notpannāṁ tat svabhāvataḥ

svabhāvena yan notpannam utpannari nāma tat katham || (Lindtner p. 108)

tat tat prāpya yad utpannam notpannam tat svabhāvata

yat svabhāvena notpannam utpannam nāma tat katham || (李·叶 p. 38)

若已生未生 彼自性無生

若自性無生 生名云何得 (T1575, Vol. 30, 255a3-4)

71 D Tsa21a4-5.

... ཚོས་ཀྱ ນ བ ཁ ག ຕ ສ ດ ທ || (b) ... ད ལ མ ཉ ཚ ན བ ཁ ག ຕ ສ ດ ທ || (d)

D Ya15b2; 瓜生津 2004, p. 49.

*[śāntam hetukṣayād eva kṣīṇam nāmāvabudhyate]

svabhāvena hi yat kṣīṇam tat kṣīṇam ucyate katham ||

因寂卽法盡 此盡不可得

若自性無盡 敦名云何立 (T1575, Vol. 30, 255a5-6)

⁷² ツオンカバを始めゲルク派では、この偈頌に対するチャンドラキールティの註によって、「消滅したものは事物・有為だ」という帰謬派の特徴的な学説の一つ(松本 p. 178 参照)が示されたと解釈する。註 102 参照。

7³ D Tsa21a5.

D Ya16b4; 瓜生津 2004, p. 53.

निरुद्धायाम्भेदात्प्राप्तायाम्भेदायाम्॥

na hy atropadyate kircin nāpi kircin nirudhyate |(李・叶 p. 42)

無少法可生 無少法可滅 (T1575, Vol. 30, 255a7.)

7⁴ 『律雜事』 वृत्त्याकृत्यक्षेत्रात्प्राप्तायाम्भेदायाम्॥ Toh.6, D Da291b2; 『ウダーナヴァルガ』 केन्द्रावृद्धायाम्भेदायाम्॥ Toh.326, D Sa209a2-3. Cf. 『無常經』 विकारावृद्धायाम्॥ Toh.310, D Sa157a4; 『悲華經』 वृत्त्याकृत्यक्षेत्रात्प्राप्तायाम्भेदायाम्॥ Toh.111, D Cha75a16-7; 『四童子三昧經』 वृत्त्याकृत्यक्षेत्रात्प्राप्तायाम्भेदायाम्॥ Toh.136, D Na145b7, etc.7⁵ デルグ版の las 「作用」の方がタルマリンチェンの本文 lam 「道」より理解し易いが、チャンドラキールティ『註』では lam で、また漢訳では「彼生滅二道」となっており、タルマリンチェン版と一致する。註 78 参照。7⁶ デルグ版および下記のタルマリンチェンの註釈に則り、dgongs を dgos と読み換える。註 79・93 参照。7⁷ D Tsa21a5.

श्वर्णाद्वये वृद्धिशब्दे वाम्॥ (c)...

D Ya16b7. 瓜生津 2004, p. 53.

*utpadabhaṅgakarmanābhīprāyārthaḥ pradarśitah]

彼生滅二道 隨事隨義現 (T1575, Vol. 30, 255a8.)

7⁸ 註 75 参照。7⁹ 註 76 参照。8⁰ D Tsa21a5-6.

... वृद्धिशब्दे वृद्धिशब्दे वाम्॥ (d)

D Ya17a1-2; 瓜生津 2004, p. 54.

... श्वर्णाद्वये वृद्धिशब्दे वाम्॥ (d)

*utpadajñānato bhaṅgo bhaṅgejñānād anityatā |

anityatvābodhā ca saddhamo hi vibodhitāḥ ||

知生即知滅 知滅知無常

無常性若知 不得諸法底 (T1575, Vol. 30, 255a9-10)

8¹ 『法華經』「譬喻品第三」の記述を連想させる。8² D Tsa21a6.

... श्वर्णाद्वये वृद्धिशब्दे वाम्॥ (b)...

D Ya17a5; 瓜生津 2004, p. 54.

संदाहकृत्यावृद्धिशब्दे वाम्॥ श्वर्णाद्वये वृद्धिशब्दे वाम्॥ (ab) ... श्वर्णाद्वये वृद्धिशब्दे वाम्॥ (d)

*yah prafityasamutpāda utpādabhaṅgavāritām |

parijānāti tenaivam uttriyate bhavāmbudhiḥ ||

諸法從緣生 雖生即離滅

如到彼岸者 即見大海事 (T1575, Vol. 30, 255a11-12)

8³ D Tsa21a6-7.

D Ya17b1-2; 瓜生津 2004, p. 55.

... श्वर्णाद्वये वृद्धिशब्दे वाम्॥ (c)...

svena cittena vañcyante bhāvātmānah pṛthagjanāḥ |

bhāvābhāvaviparyāsadośakleśavaśaśingatāḥ || (李・叶 p. 52)

若自心不了 異生孰我性

性無性顛倒 卽生諸過失 (T1575, Vol. 30, 255a13-14)

^{8 4} D Tsa21a7.

D Ya17b7-18a1; 瓜生津 2004, p. 56.

... དྲ୍ଵେଷେ རୁତୁ ଶ୍ରୀ କ୍ଷେତ୍ରୀ || (b) ... ཁୁମ୍ରା ད୍ଵେଷେ କ୍ଷେତ୍ରୀ କ୍ଷେତ୍ରୀ || (d)

anityarū mośadharmaṇīn muktarū śūnyam anātmakam |

viviktaṁ iti paśyanti bhāvāṁ bhāvavicakṣanāḥ || (李・叶 p. 54)

諸法是無常 苦空及無我

此中見法離 智觀性無性 (T1575, Vol. 30, 255a15-16)

^{8 5} D Tsa21a7-b1. D Ya18b1; 瓜生津 2004, p. 57f.

amūlatvā sthitūraiva nirālambo nirāśrayaḥ |

avidyābijaśambhūtam ādimadhyāntavarjitaṁ || (李・叶 p. 56)

無住無所緣 無根亦不立

從無明種生 離初中後際 (T1575, Vol. 30, 255a17-18)

^{8 6} D Tsa21b1.

... ཁୁମ୍ରା ད୍ଵେଷେ କ୍ଷେତ୍ରୀ କ୍ଷେତ୍ରୀ କ୍ଷେତ୍ରୀ || (c) ...

D Ya18b1-2; 瓜生津 2004, p. 58.

... ཁୁମ୍ରା ད୍ଵେଷେ କ୍ଷେତ୍ରୀ କ୍ଷେତ୍ରୀ || (c) ...

kadaligarbhanilśāram gandharvanagaropamam |

sarīmohaganarāṇī ghorāṇī jagān māyeva dṛṣyate || (李・叶 p. 56)

癡闇大惡城 如芭蕉不實

如乾闥婆城 皆世幻所見 (T1575, Vol. 30, 255a19-20)

^{8 7} D Tsa21b1-2.

... ད୍ଵେଷେ ସନ୍ତୁଷ୍ଟା କ୍ଷେତ୍ରୀ କ୍ଷେତ୍ରୀ କ୍ଷେତ୍ରୀ କ୍ଷେତ୍ରୀ କ୍ଷେତ୍ରୀ କ୍ଷେତ୍ରୀ କ୍ଷେତ୍ରୀ || (b-d)

D Ya19a7-b1; 瓜生津 2004, p. 60.

କ୍ଷେତ୍ରୀ ସନ୍ତୁଷ୍ଟା କ୍ଷେତ୍ରୀ ||

ବୈଷଣ୍ଵିତା ||

brahmādyair asya lokasya yat satyarūpiṇīprakāśitam |

tad āryāṇāṁ mṛṣety uktarūpiṇī kīrmā na sēśam atāḥ param || (李・叶 p. 58)

世界梵王初 佛如實正說

後諸聖無妄 說亦無差別 (T1575, Vol. 30, 255a21-22)

^{8 8} D Tsa21b2.

... ଶ୍ରୀ ଦ୍ଵେଷେ କ୍ଷେତ୍ରୀ କ୍ଷେତ୍ରୀ କ୍ଷେତ୍ରୀ || (b) ... ଦ୍ଵେଷେ କ୍ଷେତ୍ରୀ କ୍ଷେତ୍ରୀ କ୍ଷେତ୍ରୀ || (d)

D Ya19b4-5; 瓜生津 2004, p. 61.

... ଶ୍ରୀ ଦ୍ଵେଷେ କ୍ଷେତ୍ରୀ କ୍ଷେତ୍ରୀ କ୍ଷେତ୍ରୀ || (b) ... ଶ୍ରୀ ଦ୍ଵେଷେ କ୍ଷେତ୍ରୀ କ୍ଷେତ୍ରୀ କ୍ଷେତ୍ରୀ କ୍ଷେତ୍ରୀ || (cd)

*[lōkō] 'vidyāndhabhūto 'sau tṛṣṇāstrotasā cālitah |

tṛṣṇārahitavijñasya punyadṛṣṭi samā kutah ||

世間擴所閼 愛相續流轉

智者了諸愛 而平等善說 (T1575, Vol. 30, 255a23-24)

^{8 9} D Tsa21b2-3.

D Ya20a6-7; 瓜生津 2004, p. 63.

ଦ୍ଵେଷେ କ୍ଷେତ୍ରୀ କ୍ଷେତ୍ରୀ କ୍ଷେତ୍ରୀ || (a) ... ଦ୍ଵେଷେ କ୍ଷେତ୍ରୀ କ୍ଷେତ୍ରୀ କ୍ଷେତ୍ରୀ କ୍ଷେତ୍ରୀ କ୍ଷେତ୍ରୀ କ୍ଷେତ୍ରୀ || (cd)

sarvam astūpi vaktavyam ādau tattvagavesināḥ |

- 此最勝無妄 無智即分別 (T1575, Vol. 30, 255b6-7)

9 6 『明句論』 D'A13a4-5; de la Valée, p. 41, ll. 4-5. 参照。註 8 参照。

9 7 D Tsā21b5-6.
.. དུ་ིརྒྱନ୍ତୁ རୁତ୍ୟାନ୍ତି ||(b) ...

D Ya22b2-3, 5; 瓜生津 2004, p. 69.
ଦୁର୍ବ୍ଲିପ୍ତିମୁକ୍ତିକାର୍ଯ୍ୟାନ୍ତି ||(a) .. དୁତ୍ୟାପିକାର୍ଯ୍ୟାନ୍ତି ||(c) ...

manovispanditarūyāvat tāvān mārasya gocarāḥ |... (李・叶 p. 74)
*... evam bhūtaḥ blaved yatra nādoṣo jāyate kathāṁ ||
若心有散亂 與諸魔作方便
若如實離過 此即無所生 (T1575, Vol. 30, 255b8-9)

9 8 D Tsā21b6.
.. མନ୍ତ୍ରିକାର୍ଯ୍ୟାନ୍ତି କୁର୍ବାକାର୍ଯ୍ୟାନ୍ତି ||(d) ଧିଷ୍ଟିକାର୍ଯ୍ୟାନ୍ତି ||(bc) ...

D Ya22b7; 瓜生津 2004, p. 70.
କାର୍ଯ୍ୟାନ୍ତି କୁର୍ବାକାର୍ଯ୍ୟାନ୍ତି କାର୍ଯ୍ୟାନ୍ତି କୁର୍ବାକାର୍ଯ୍ୟାନ୍ତି ||ଦୁର୍ବ୍ଲିପ୍ତିମୁକ୍ତିକାର୍ଯ୍ୟାନ୍ତି ଦୁର୍ବ୍ଲିପ୍ତିମୁକ୍ତିକାର୍ଯ୍ୟାନ୍ତି||

avidyāpratayāyā yasmāt sambuddho lokam abravīt |
tasmāl loko vikalpo 'yam iti kiṁ nopapadyate || (李・叶 p. 76)
如是無明緣 佛為世間說。
若世無分別 此云何無生 (T1575, Vol. 30, 255b10-11)

9 9 Toh.4158, D Ge108a3, k. I29cd, Hahn (ed.), p. 12f.
bijārā yasyāntarā tasya prarohah satyataḥ kutah ||
若種子不實 芽等云何真 (T1656, Vol. 32, 494a4)

1 0 0 D Tsā21b6-7.
.. ଦୁତ୍ୟାପିକାର୍ଯ୍ୟାନ୍ତି ||(d)

D Ya23a4-5; 瓜生津 2004, p. 71.
କାର୍ଯ୍ୟାନ୍ତି କୁର୍ବାକାର୍ଯ୍ୟାନ୍ତି କାର୍ଯ୍ୟାନ୍ତି କୁର୍ବାକାର୍ଯ୍ୟାନ୍ତି || ଦୁର୍ବ୍ଲିପ୍ତିମୁକ୍ତିକାର୍ଯ୍ୟାନ୍ତି ଦୁର୍ବ୍ଲିପ୍ତିମୁକ୍ତିକାର୍ଯ୍ୟାନ୍ତି||

avidyāyāṁ niruddhāyāṁ niruddhō yasya jāyate |
tat kathāṁ nāma na spaśām ajñānaparikalpitam || (李・叶 p. 78)
若無明可滅 減已即非生
生滅名無違 無智起分別 (T1575, Vol. 30, 255b12-13)

1 0 1 D Tsā21b7.
.. དୁତ୍ୟାପିକାର୍ଯ୍ୟାନ୍ତି ||(d)

D Ya23a6-7. 瓜生津 2004, p. 71.
କୁର୍ବାକାର୍ଯ୍ୟାନ୍ତି କାର୍ଯ୍ୟାନ୍ତି ||(a) .. དୁତ୍ୟାପିକାର୍ଯ୍ୟାନ୍ତି ||(d)

hetutah saribhavo yasya sthitir na pratayair vinā |
vigamah pratyayābhāvāt so 'stūty avagatalā katham || (Lindtner p. 112; 李・叶 p. 80)
有因即有生 無緣即無住
離緣皆有性 此有亦何得 (T1575, Vol. 30, 255b14-15)

1 0 2 この一節は、ゲルク派が帰謬派の特徴的な学説の一つとみなす〈消滅したものは事物・有為だ〉という教義に基づく。註 72 参照。

1 0 3 D Tsā21b7-22a1.
.. କାର୍ଯ୍ୟାନ୍ତି କୁର୍ବାକାର୍ଯ୍ୟାନ୍ତି ||(b) ...

yah prat�ayaair jāyati sa hy ajāto no tasya utpādu sabhāvato 'sti |
yah prat�ayādhīnu sa sūnya ukto yah sūnyatām jānati so 'pramattah ||

なお、この経文は教説として中觀派に広く依用されており、帰謄教のチャンドラギールティ〔上記の外、『四百論註』(Toh.3865, D Ya237b7-238a1)、『中觀五蘊論』(Toh.3866, D Ya253b6; 横山 p. 86)〕やブラジュニヤーカラマティ〔『入行論難語解』(Toh.3872, D La189b5-6)〕のみならず、自立派の論師であるバーヴィヴェカの〔『般若灯論』(Toh.3853, D Tsha230b3)、『中觀心論』(Toh.3856, D Dza219a1-2)〕や同じくカマラシーラ〔『中觀光明論』(Toh.3887, D Sa150b1-2)〕も引用している。

D Ya27b2-3; 瓜生津 2004, p. 83.

స్వగుహని మేలు వారి తెలుగు ప్రశ్నల ఉత్సవం | (a)... రేపు కుటుంబాల మేలు వారి తెలుగు | (d)

mīthvāīñānābhībhūtānām asatye satyasamīñitām |

parigrahavivādādikramah snehāt pravartate || (李·叶 p. 100)

衆生邪妄智 無實謂實想

於他諍論興自行顛倒轉 (T1575, Vol. 30, 255c5-6)

- 116 D Tsa22a6.

D Ya27b5, 7; 瓜生津 2004, p. 84.

ਝੁਕਾਵੇਂਕੇ ਪਰੀ ਵਹਿਨੀਦ ਲਕਾ ਨੰਦ ਵਹਿਨੀ ਵੱਖੀ ਵੱਖਣਾ ਵੇਂਦ੍ਰਾ॥ (ab)....

nirvivādā mahātmānah paksas tesān na vidyate |...

*[...yesām na vidyate paksah tesām paksah parah kutah || (李 · 叶 p. 102)

自分不可立 他分云何有

自他分俱無 智了無諍論 (T1575, Vol. 30, 2)

- ¹¹⁷ Tshultrim (ed.), p. XIX 参照。

- 118 『廻詛論』 Toh 3828 D Tsa128a1; Toh 3832 D Tsa128b3 k 29cd Lindtner p. 80

『道靜端』 Yoh.5828, D Tsa26a1, Yoh.5832, D T
nicht so manch protzige traurige Reinheit und doch

『王子篇第三』 T1621 V.1.22.1411

我字無物故。如見不得過。

- 110 / 12 參照

- ¹¹⁹ 註12參照。

『明句論』D' A&biff; de la Valée p. 25ff. esp. D' A9b6-10a1; de la Valée, p. 41, II. 4-5.

『聖經』詩篇第46章第1節「神是我們的避難所，我們的力量，是我們的盾牌，我們的勇士，我們的盾牌，我們的救主，我們的王，我們的恩主，我們的王，我們的恩主。」

そのように顛倒と不顛倒は異なるが故に、それ故に【賢者らの】不顛倒の境地においては顛倒が有りはないが故に、有法となり得るであろう世俗の眼はどうして有ろうか。それ故に、基体不成立の（宗）という過失と基体不成立の（詮釋）という過失が斥くことが無いので、これは【論難】の回避【といふもの】の【だけ】ない。【＊十蔵譲訳】

yataś caivaṁ bhīmāvīparyāśāvīparyāśau ato viduśāṁ aviparītāvasthāyāṁ viparītāśārīnbhāvāt kutaḥ sāṁvṛtarāṁ caksur yasya dharmaṁvai syāt | iti na vyāvartate 'siddhādhāre pakṣadosaḥ | āśrayāsiddho vā hetudosaḥ | ity aparihāra evāyam ||

- 121 DTsa22a6-7

ଶର୍ମିତାନ୍ତକୁ ପାଇଁ ଶର୍ମିତାନ୍ତକୁ ଶର୍ମିତାନ୍ତକୁ ।(a)...ହିନ୍ଦୁନାନ୍ଦନକୁ ଶର୍ମିତାନ୍ତକୁ ।(c)...

DV228a1-2: 瓜生津 2004 p.85

《西藏王臣記》(a)

Karméid evééravari lehdhvā áethēh ldeáchhuicé coméh |

- daśānti te na daśyante yeṣāṁ cittāṁ nirāśrayam || (李・叶 p. 104)
 有少法可依 煩惱如毒蛇
 若無寂無動 心即無所依 (T1575, Vol. 30, 255c9-10)
- 1 2 2 D Tsa22a7.
 デルグ版にはc句に該当する部分が欠落している。
 ...त्वचेत्याक्षरं जित्याम्||(b)[...] त्वचेत्याक्षरं जित्याम्||(d)
 D Ya28a6-7, b2-3; 瓜生津 2004, p. 86.
 एत्यन्द्रवद्यत्वमेत्यत्यन्द्यत्वम्||(a)...एत्यक्षेत्याक्षरं नाशयत्वम्||(c)...
 kathām sāspadacittānāṁ doṣā na syur mahāviṣāḥ |
 audāśīnye 'pi daśyante yada kleśabhujaṅgamaiḥ || (李・叶 p. 106)
 煩惱如毒蛇 生極重過失
 煩惱毒所覆 云何見諸心 (T1575, Vol. 30, 255c11-12)
- 1 2 3 D Tsa22a7-b1.
 उत्ताप्तिर्भवत्यनुसारम्||(a)...
 D Ya28b3-4; 瓜生津 2004, p. 87.
 pratibimbe yathā bälāḥ sajjante satyasariñjinaḥ |
 tathā ca badhyate loko mohād viṣayaparipare || (李・叶 p. 108)
 如愚見影像 彼妄生實相
 世間縛亦然 慧為癡所網 (T1575, Vol. 30, 255c13-14)
- 1 2 4 D Tsa22b1.
 D Ya28b7; 瓜生津 2004, p. 87.
 दर्शनार्थक्षणासहस्रशब्दां पि॑ तेऽपि॒ विशेषस्यामर्हत्वा॑ दर्शनार्थिकेत्याद्यन्ती॑ युग्म॒ विद्वाव॒ विक्षाप्त॑।
 pratibimbopamān bhāvān gṛhitvā jñānacakṣusā |
 na majjanti mahātmānā parike viṣayasarīrjite || (李・叶 p. 110)
 性喻如影像 非智眼境界
 大智本不生 微細境界想 (T1575, Vol. 30, 255c15-16)
- 1 2 5 D Tsa22b1-2.
 D Ya29a2; 瓜生津 2004, p. 88.
 ...स्वरूपद्वार॑ वद्वद्वार॑ वाच्यम्||(b)...क्षेत्रेणाद्याक्षरं त्वचेत्याम्||(d)
 bälāḥ sajjanti rūpeṣu vairāgyarūṇyāt madhyamāḥ |
 svabhāvajñā vimucyante rūpasyottamabuddhayā || (Lindner p. 116; 李・叶 p. 112)
 著色謂凡夫 離貪即小聖
 了知色自性 是為最上智 (T1575, Vol. 30, 255c17-18)
- 1 2 6 D Tsa22b2.
 ...दीप्तार्थेणाद्याक्षरं त्वचेत्याम्||(b)...क्षेत्रेणाद्याक्षरं त्वचेत्याम्||(d)
 D Ya29a7-b1; 瓜生津 2004, p. 89.
 ज्ञातेषामाक्षराद्याम्||(a)...
 śubham ity āgataḥ saṅgo vairāgyarūṇyāt tadviparyayāt |
 māyāpuruṣavād dīptvā viviktaṁ yānti niyvitim || (李・叶 p. 114)
 若著諸善法 如離貪顛倒
 猶見幻人已 離所作求體 (T1575, Vol. 30, 255c19-20)
- 1 2 7 D Tsa22b2-3.
 ...दीप्तार्थेणाद्याक्षरं त्वचेत्याम्||(d)
 D Ya29b3; 瓜生津 2004, p. 89.

...॑क॒र्त्तुं श॑र्वा॒कृ॒शा॒षां पि॒त्रे॑॥(b)...

*[mīthyājñānābhītaptō yah kleśasariṇdoṣabhaṭā bhavet |
bhāvābhāvau vikalpaṇād artha{jñānam na jāyate ||]

知此義為失 不觀性無性

煩惱不可得 性光破邪智 (T1575, Vol. 30, 255c21-22)

128 D Tsa22b3-4.

D Ya30a1; 瓜生津 2004, p. 90.

...॑व॒र्द्ध॒कृ॒शा॒षां पि॒त्रे॑॥(b)...

naivā raktā mahātmāno na viraktā nirāśrayāḥ |

āśraye sati rāgaś ca virāgaś copajāyate ||(李・叶 p. 118)

智離染清淨 亦無淨可依

有依即有染 彼淨還生過 (T1575, Vol. 30, 255c23-24)

129 D Tsa22b4.

...॑प॒र्याप॒दित्यु॒त्तेष्मा॑॥(b) ...॑क॒र्त्तुं श॑र्वा॒कृ॒शा॒षां पि॒त्रे॑॥(d)...

D Ya30a3; 瓜生津 2004, p. 90.

ए॒द्गा॒कृ॒शा॒षां द्व॒त्तेष्मा॑॥(a) ...॑क॒र्त्तुं श॑र्वा॒कृ॒शा॒षां पि॒त्रे॑॥(c)...

viviktam iti yeṣān tu calam apy acalān manah |

klesavyālākularūpān ghorān tīrṇās te bhavaśāgaram ||(李・叶 p. 120)

極惡煩惱法 若見自性離

即心無動亂 得渡生死海 (T1575, Vol. 30, 255c25-26)

130 D Tsa22b4-5.

D Ya30a4-5. 瓜生津 2004, p. 91.

...॑व॒र्द्ध॒कृ॒शा॒षां पि॒त्रे॑॥(c)...

*[śāstreṇānena janānām pūnyām jñānarūpān ca sañcītam |

pūnyajñānakriyodbhūtām dvāv āptau tu parān tathā ||]

此善法甘露 從大悲所生

依如來言宣 無分限分別 (T1575, Vol. 30, 255c27-28)

131 K にのみ以下の一節がある。

オープン・スヴァスティ (おお、安寧なれ)。

利樂の源、勝者の教説が完全に集まる樹木である、

広大な全ての趣の解脱という最上の善果を

行じるために、タシリントウプ大法苑において

法施の衰退が無く、有暇の趣の相続、これを増大させよ。